

三木市所在

田 井 野 遺 跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXII—

1996年3月

兵庫県教育委員会

三木市所在

た い の い せき
田 井 野 遺 跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXII—



1996年3月

兵庫県教育委員会



SH01 出土土馬

例　　言

1. 本書は、兵庫県三木市久留美字田井野99～181に所在する田井野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 発掘調査ならびに整理作業は、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3. 発掘調査は合計4年度にわたって実施した。それぞれの実施年度および遺跡調査番号は下記の通りである。

確認調査	平成元年度	遺跡調査番号 890098
全面調査（A区）	平成2年度	遺跡調査番号 900107
全面調査（B・C・D区）	平成3年度	遺跡調査番号 910107
全面調査（D区）	平成4年度	遺跡調査番号 920087

4. 整理作業は、平成6・7年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

5. 本書に使用した方位は国土座標V系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また方位は座標北を指す。

6. 本書に掲載した遺跡分布図ならびに現況位置図には、国土地理院発行5万分の1地形図「高砂」・「神戸」図幅を、また位置図には国土地理院発行20万分の1地形図「姫路」・「京都及大阪」図幅をそれぞれ使用した。

7. 本書の執筆分担は目次に示したとおりである。

8. 遺物実測図については、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器・断面が白ヌキのものは土師器をそれぞれ示している。

9. 本報告にかかる出土遺物・写真などの関係資料は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および、兵庫県教育委員会魚住分館にて保管している。

10. 本書の編集は小川美奈の補助を得て高瀬が実施した。

本文目次

第1章 調査の経緯 (高潮 一嘉)	
1. 調査にいたる経過.....	(1)
2. 発掘調査の経過.....	(1)
3. 整理作業の経過.....	(2)
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境 (柏原 正民)	(3)
第2節 歴史的環境 (高潮)	(6)
第3章 確認調査 (高潮)	(13)
第4章 全面調査の成果	
第1節 全体の概要 (柏原)	(15)
第2節 A区の調査 (柏原)	(16)
第3節 B区の調査 (高潮)	(26)
第4節 C区の調査 (高潮)	(32)
第5節 D区の調査 (高潮)	(39)
第6節 出土遺物 (柏原)	(42)
第5章 まとめ (柏原)	
第1節 遺構について.....	(54)
第2節 遺物のまとめ.....	(58)

挿図目次

第1図 遺跡の位置 (上) 1/200,000 · (下) 1/50,000	
第2図 明治19年測量陸軍板製測量図 (1/20,000).....	(4)
第3図 調査区周辺の等高線復元図 (1/2,000)	(5)
第4図 周辺の遺跡 (1/50,000)	(9)
第5図 確認調査グリッド配置図 (1/1,000).....	(14)

図版目次

図版1 全面調査区・確認調査トレンチ配置図 (1/1,000)	
図版2 田井野遺跡全体図 (三木市調査分含) (1/1,000)	
図版3 A地区全体図 (1/250)	
図版4 S H01	
図版5 S H02	
図版6 S H03	
図版7 S B01・S B09	
図版8 S B03	
図版9 S B02・S B04	
図版10 S K03・S K09	
図版11 S K04～S K07	
図版12 S K01・S K02・S K08・S K10・S K11	
図版13 B地区全体図 (1/300)	
図版14 S B06・S B07	
図版15 S B08・S B09	
図版16 S K12～S K19	
図版17 S K20～S K27	
図版18 C地区全体図 (1/300)	
図版19 S B10・S B11	
図版20 S B12・S B13	
図版21 S B14・S K28～S K30	
図版22 S K31～S K41	
図版23 D地区全体図 (1/300)	
図版24 S B15・S K42～S K47	
図版25 出土遺物 (1)	
図版26 出土遺物 (2)	
図版27 出土遺物 (3)	
図版28 出土遺物 (4)	
図版29 出土遺物 (5)	

図版30 県下出土土馬位置図 1/800,000

図版31 平成3年三木市調査田井野遺跡全体図 1/500

写 真 図 版 目 次

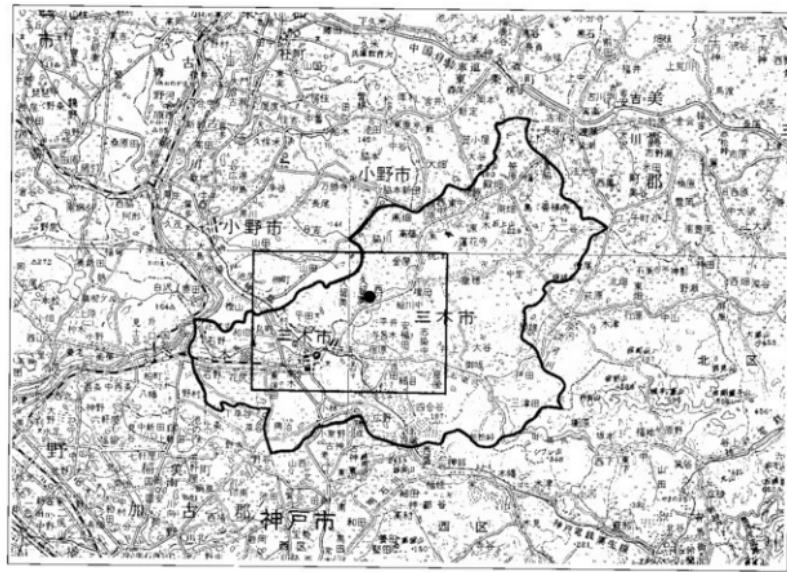
巻頭図版 1 SH01出土 土馬

- 写真図版 1 田井野遺跡の位置（国土地理院撮影）
写真図版 2 (上) 遺跡の遠景(南から) (下) 遺跡の遠景(南西から)
写真図版 3 (上) A地区(平成2年度調査) (下) A地区(平成2年度調査)
　　全景(南西から) 全景(北西から)
写真図版 4 (上) A地区(平成2年度調査) (下) A地区(平成3年度調査)
　　南東部(南東から) 全景(北東から)
写真図版 5 (上) B・C地区 全景(南西から) (下) D地区(平成4年度調査)
　　全景(南西から) 全景(南西から)
写真図版 6 (上) B地区 全景(南から) (下) C地区 全景(南から)
写真図版 7 (上) A地区 平成2年度調査部分 (下) A地区 平成3年度調査部分
　　全景(東から) 全景(西から)
写真図版 8 (上) SH01 全景(南東から) (下) SH01 カマド検出状況
　　(南東から)
写真図版 9 (上) SH01 作業風景(北西から) (下) SH01 土馬出土状況
写真図版 10 (上) SH02とSB02 全景 (下) SH02 カマド検出状況
　　(南東から) (南東から)
写真図版 11 (上) SH03全景(北西から) (下) SH03カマド検出状況
　　(南東から)
写真図版 12 (上) SB01 全景(南東から) (下) SB03 全景(北東から)
写真図版 13 (上) SB04 全景(北西から) (下) SB05 全景(東から)
写真図版 14 (上) SK07付近作業風景(北から) (下) SK01 全景(南東から)
写真図版 15 (上) SK03 全景(北西から) (下) SK04・05 全景(南東から)
写真図版 16 (上) SK06 全景(東から) (下) SK08 全景(南東から)
写真図版 17 (上) SK09 全景(北から) (下) SK10 全景(南から)
写真図版 18 (上) B地区上段(南東から) (下) SB06・07・08(南西から)
写真図版 19 (上) SB06 全景(南から) (下) SB07 全景(南から)
写真図版 20 (上) SB08 全景(南から) (下) SK12 断面(南西から)
写真図版 21 (上) SK13 全景(西から) (下) SK14 全景(南から)
写真図版 22 (上) SK15 全景(南から) (下) SK17 全景(北西から)
写真図版 23 (上) SK18 全景(南から) (下) SK18 断面(東から)
写真図版 24 (上) SK19 全景(北から) (下) SK20 全景(南から)
写真図版 25 (上) SK21 全景(南から) (下) SK22 断面(東から)

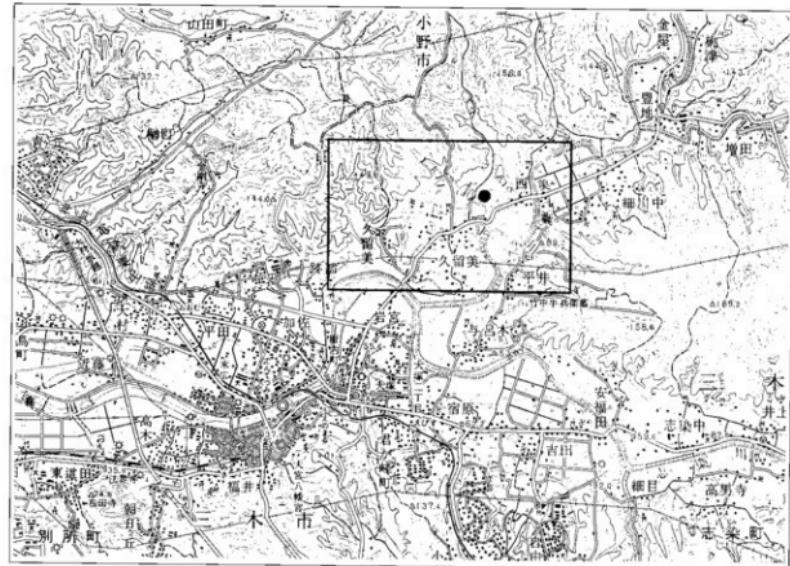
写真図版 26 (上) SK24	全景 (北から)	(下) SK25 全景 (南東から)
写真図版 27 (上) SK26	全景 (北西から)	(下) B地区 西壁断面 (東から)
写真図版 28 (上) C地区	上・中段 (南東から)	(下) SB09 全景 (南から)
写真図版 29 (上) SB10	全景 (南から)	(下) SB11 全景 (南から)
写真図版 30 (上) SB12	全景 (南から)	(下) SB13 全景 (南から)
写真図版 31 (上) SK28	全景 (南西から)	(下) SK31 全景 (東から)
写真図版 32 (上) SK32	全景 (東から)	(下) SK33 全景 (南から)
写真図版 33 (上) SK34	全景 (東から)	(下) SK37 全景 (南西から)
写真図版 34 (上) SK39	断面 (東から)	(下) SK40 全景 (北西から)
写真図版 35 (上) SK41	断面 (北から)	(下) SK41 全景 (南から)
写真図版 36 (上) D地区	上段 (南から)	(下) D地区 下段 (北から)
写真図版 37 (上) D地区	上段 (南東から)	(下) SD15 全景 (南西から)
写真図版 38 (上) SB15	全景 (北西から)	(下) SK42 全景 (東から)
写真図版 39 (上) SK43	全景 (東から)	(下) SK43 断面 (南から)
写真図版 40 (上) SK44	全景 (南から)	(下) SK45 全景 (南東から)
写真図版 41 (上) SK46	全景 (北から)	(下) SK46 断面 (西から)
写真図版 42 (上) SK47	全景 (東から)	(下) SK47 断面 (南から)
写真図版 43 SH01出土	土馬 (S=2/3)	
写真図版 44 出土土器 (1)		
写真図版 45 出土土器 (2)		
写真図版 46 (上) SH01・03	出土土器	(下) A区 出土土器
写真図版 47 (上) A区	出土土器	(下) A区 出土土器
写真図版 48 (上) A区	出土土器	(下) A区・B区 出土土器
写真図版 49 (上) B区	出土土器	(下) C区・D区 出土土器
写真図版 50 (上) A区	包含層 出土土器	(下) A区 包含層 出土鉄器

表 目 次

表1 周辺の遺跡一覧表 (1)	(10)
表2 周辺の遺跡一覧表 (2)	(11)
表3 周辺の遺跡一覧表 (3)	(12)
表4 A地区検出溝一覧表	(22)
表5 出土土器観察表	(49~53)
表6 兵庫県下土馬出土遺跡 地名表	(61)
表7 捜立柱建物跡一覧表 (三木市教育委員会調査分)	(62)
表8 捜立柱建物跡一覧表 (兵庫県教育委員会調査分)	(63)



1/200,000



1/50,000

第1図 遺跡の位置

第1章 調査の経緯

1. 調査に至る経過

山陽自動車道は、大阪府吹田市を起点として瀬戸内海沿岸を走りながら山口県山口市で中国縦貫自動車道路と接続する高速自動車国道である。兵庫県内では、赤穂市から中南部を横断するような形で、神戸市北区有野町において中国縦貫自動車道と合流する。

事業地内における埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、路線発表がなされて以後、順次日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議され、取り扱いがなされてきた。

9次区間とされる神戸市北区有野二郎から三木市鳥町までの28.6kmについては、昭和60年の路線発表と前後して協議が重ねられ、昭和61年4月と62年3月に分布調査が実施された。計画路線内において埋蔵文化財を包蔵する可能性の高い土地の絞り込みを行った結果、52ヶ所について確認調査の必要が明らかになった。

今回報告する地点は三木市久留美字田井野99~181にあたり、分布調査の段階ではNo.38地点と呼称されてきたが、遺跡名として小字名から「田井野遺跡」と命名された。

2. 発掘調査の経過

調査の概要

田井野遺跡は、分布調査の段階ではNo.38地点と仮称されていたが、平成元年度にグリット（試掘坑）を36ヶ所設定して確認調査を実施した。その結果、奈良～鎌倉時代の遺物とともに、土壙・溝・柱穴などの遺構が確認され、新規の埋蔵文化財包蔵地が存在すると判明した。

この地点では、確認調査の成果に基づき、全面調査を実施したが、調査対象地が長大であるため平成2年度から平成4年度にかけての3年間にわたり調査を実施した。

調査対象地は、農道などによる地割りから便宜的に4地区に区分して調査を進めている。調査は重機で表土・無遺物層を除去したのちに、人力により遺物包含層の掘削および遺構の検出を行った。遺構検出後は写真撮影、図面での記録保存の処置をとった。すべての遺構を検出したのちに、ヘリコプターによる航空写真撮影を計4回実施した。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が行い、各年度の調査の担当職員および調査期間は以下のとおりである。

なお、各年度の調査を通じて以下の方々が、現場補助員・室内作業員・事務員として参加した。

高島知恵子・足立敬介・五百蔵道代・舟坂好子・上田かよ子・村上昌代

第1次調査－確認調査（平成元年度） 遺跡調査番号890098

調査担当者：岡田章一・山下史朗・高瀬一嘉・中村 弘・多賀茂治

調査期間：平成2年2月8日～2月14日

第2次調査－全面調査（A区：平成2年度） 遺跡調査番号900107

調査担当者：高瀬一嘉・柏原正民・西原雄大

調査期間：平成3年1月21日～3月15日

第3次調査－全面調査（B・C・D地区：平成3年度） 造跡調査番号910107

調査担当者：井守徳男・高瀬一嘉・三原慎吾

調査期間：平成3年5月15日～11月13日

第4次調査－全面調査（D地区：平成4年度） 造跡調査番号920087

調査担当者：高瀬一嘉

調査期間：平成4年5月15日～6月3日

3. 整理作業の経過

田井野遺跡の整理作業は、遺物の水洗い、ネーミング作業は全面調査に並行して行い、それ以降の工程については平成6～7年度にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成6年度の整理作業

実施した作業は土器の接合・補強、実測である。

整理担当職員 整理普及班 技術職員 高瀬一嘉

整理技術嘱託員 主任技術員 池田悦子

企画技術員 密谷美音

図化技術員 早川ア紀子・飯田章子・横山麻子・藏 瑛子

船木昌美

図化補助技術員 中西睦子

日々雇用職員 茅原加寿代

平成7年度の整理作業

実施した作業は土器の復元、遺物の写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、金属器の保存処理、報告書印刷である。

整理担当職員 整理普及班 主 査 加古千恵子

主 任 高瀬一嘉

復興調査班 技術職員 柏原正民

整理技術嘱託員 主任技術員 小川美奈

企画技術員 横山麻子

図化技術員 中田明美・藏 瑛子・鈴木まき子・木場裕美

和田寿佐子・喜多山好子・山本京子・上山雅代

図化補助技術員 茅原加寿代

日々雇用職員 藤池亜希

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

三木市は兵庫県の中央部からやや南寄りに位置し、面積120.13km²・人口78,095人を数える。南部では神戸市と、西部では加古川をはさんで加古川市・加古郡福美町とそれぞれ境を接する。東播磨を流れる加古川の中流域に位置する中規模都市である。市の主要産業は、酒米（山田錦）やブドウを中心とした近郊農業と金物生産などで、特に大工道具・家庭用刃物・精密機械器具の生産を中心とする金属工業は盛んで、「金物の町」としてのイメージを定着させている。地形的には標高100~200m前後の丘陵地が市域の大半を占め、各丘陵を縫うような形で、美嚢川およびその支流が流れている。三木市の面積の80パーセントを占める丘陵地は、扇状地性台地として知られる「いなみの台地」に南部が、北部は「小野台地」にそれぞれ含まれる。

市域の西端で加古川へと注ぐ美嚢川は、三木市内を北東から南西へ継続し、市中央部からやや西寄りで志染川と合流する。これらの河川が、丘陵地を浸食することによって緻密な谷地形を形成する。河岸段丘や沖積地からなるこれら小河谷では、集落が形成され、水田開発が盛んに行われている。

一方で、これらの台地は大阪層群の砂礫やシルトに覆われて貯水能力に乏しい特質を持ち、安定した水の確保が困難である。中世末から近世にかけての生産力増加を背景に新田開発が盛んになると、丘陵地縁辺部の段丘上も水田形成の対象となり、灌漑用水の確保を目的とした溜め池が数多く造られた。三木市内にも丘陵縁辺を中心に、大小2千ヶ所以上を数える。今回の調査地である田井野遺跡周辺にも大池・カリ又池などが点在し、水田へ水を供給している。農業用水確保において不可欠な存在であった溜め池は、加古川流域に幅広く分布し、周辺一帯（印南野）のランドマークとして知られてきたが、近年のベットタウン化によって姿を消しつつある。

三木市の中心部は、美嚢川と志染川の合流点・上の丸町周辺に広がっている。扇状地形を中心となっている市域において、唯一のまとまった平野部にあたり、羽柴秀吉の攻城戦で有名な三木城が築かれた周辺でもある。その城下町的な集落として形成されていったと考えられる。

報告を行う田井野遺跡は、市の中央から北東方向へ約2.5kmに位置する。志染川との合流点に近い美嚢川右岸の中位段丘上に位置し、標高およそ80~83mを測る。同じく美嚢川右岸の扇状地・自然堤防上に立地する西ヶ原遺跡のすぐ西側にあたり、段丘の縁辺を境に20m以上の標高差がある。

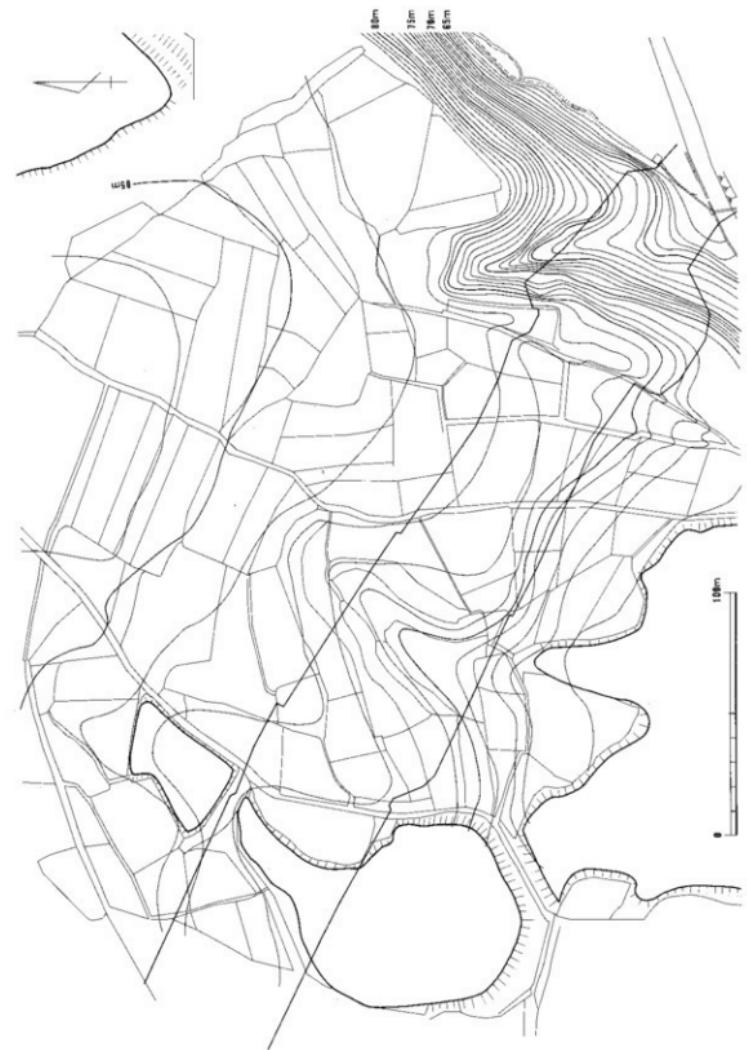
東側には細川町西・西側には久留美の集落があり、両者のちょうど中間地点にあたる。調査前の現地は緩い傾斜面を切り開いた水田が広がり、ほ場整備前の周辺一帯には農村の面影が色濃く残されていた。付近の様子は明治19年測量跡軍飯製測量図と比較しても大きな変化は見られず、基本的には明治初年の景観が変わることなく保持されていたといえる。

最近は、山陽自動車道の建設と崩落して、のどかな田園風景にも大きな変化が起こりつつある。特に丘陵の開発は著しく、市域の東部には数多くのゴルフ場、南部の志染町縁が丘付近には住宅地に開発した大規模な造成が行われている。周辺環境の変化は、田園都市からの脱皮を促進し、阪神間のベッドタウン・レジャー都市といった新しいイメージを育みつつある。

山陽自動車道の開通に伴って、三木市はどのように変貌してゆくのだろうか。



第2図 明治19年測量陸軍版製測量図



第3図 調査区周辺の等高線復元図

第2節 歴史的環境

三木市付近では旧石器・縄文時代の遺跡は今のところ確認されていない。加古川中流域は石器散布地が濃密に分布している地域であるものの、三木市内ではこれまで与呂木で尖頭器、正法寺山でナイフ形石器が採集されているのみである。しかし、兵庫県の実施した与呂木遺跡の調査ではチャート製石核等が出土している。この調査区は丘陵の縁辺部で、遺跡の中心は丘陵上にあると予想される。ただし、平成7年に三木市が実施した確認調査では中世の柱穴が検出されたのみで、旧石器・縄文時代の遺構・遺物は今のところ確認されていない。平成7年度に加古川を渡った小野市黍田町の勝手古墳群で旧石器の調査が実施されており、今後三木市域についてもこの時期の遺跡が明らかになるものとみられる。

三木市内で生活の痕跡が顕著に認められるのは弥生中期以降である。

平成元年に三木市によって調査された井上遺跡では、中期の土器を包含する溝・土壙などの遺構が検出され、平成7年に調査された宿原遺跡で方形周溝墓7基が検出された。

山陽自動車道の建設に関連して兵庫県が行った調査では貝谷遺跡・貝谷古墳群で中期の土器棺5基、木棺墓36基あまりを検出、年ノ神遺跡からは13軒の弥生時代中期末~後期にかけての円形・方形の竪穴住居跡を調査している。中期後半の集落としては細川女谷遺跡・与呂木遺跡で検出されている。このうち与呂木遺跡では径9mを越える住居跡が検出され、内部から複数の鉄製品が出土している。

弥生後期から古墳時代にかけての集落は市内各地で確認されている。

三木市の行った調査から述べれば、昭和55年調査の戸田遺跡第1・2地点では弥生末から古墳時代の溝・土壙が検出され、多量の弥生土器・古式土師器が出土している。この中には搬入土器と推定される壺型土器が含まれている。第3地点ではカマドをもつ方形の竪穴住居跡1軒が検出されている。昭和53年調査の吉田南遺跡で弥生後期の溝・古墳時代の住居跡を検出している。昭和55年調査の平井遺跡で方形の竪穴住居跡1軒、昭和58年調査の久留美西ノ谷遺跡で方形の竪穴住居跡2軒、59年調査の細目有田遺跡で方形の竪穴住居跡2軒、昭和62年調査の志染中遺跡でカマドをもつ竪穴住居跡5軒、平成5年調査の久留美松ノ下遺跡と久留美丈ノ越遺跡ではカマドをもつ方形の竪穴住居跡を各1軒、平成7年調査の宿原遺跡で方形の竪穴住居跡2軒を検出している。宿原遺跡はかなり高い密度で遺構が検出されており、その範囲は8,000m²に及ぶと考えられる遺跡である。

昭和63年に毛谷窯跡群埋蔵文化財調査会で調査された毛谷石原・女谷遺跡では弥生時代の竪穴住居跡2軒、古墳時代の竪穴住居跡3軒を検出している。

山陽自動車道の建設に関連して兵庫県が行った調査では平成5・6年度に調査した年ノ神遺跡でカマドをもつ竪穴住居跡2軒を検出している。平成2年調査の西ヶ原遺跡で弥生時代後期末の竪穴住居跡5軒と、古墳時代後期のカマドをもつ竪穴住居跡31軒を検出している。検出した個体数としては三木市内で群を抜いている。しかも、この調査の範囲は集落の一部であり三木市が実施した、ほ場整備とともに確認調査でも周囲に同時期の竪穴住居跡の存在が確認されており、この地域に大規模な古墳時代の集落が存在していることが明らかとなった。平成2~4年調査の田井野遺跡でも3軒のカマドを持つ竪穴住居跡が検出されている。

この他、古くは吉田遺跡では弥生時代末の壺棺墓が検出されている。弥生時代を特徴づける青銅器は正法寺山で細形銅劍が、高籠地区で小銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると三木市内でも多くの古墳が築造される。市内には400基以上の古墳が確認されている

が、その大半は後期の小型古墳である。

三木市内で前期まで遡りうる古墳は加古川・美濃川合流点付近の丘陵上に築造された前方後円墳の愛宕山古墳と平成6年に山陽自動車道建設に伴って調査された年ノ神6号墳のみである。後期古墳の多くは群集墳を形成している。なかでも小野市にまたがって所在する櫻山古墳群は150基以上の大規模な群集墳の総称で、数支群に分かれている。櫻山古墳群と同一丘陵の三木側には正法寺山、和田愛宕山・妙界寺・才神・年ノ神などと命名された古墳群が所在する。これらの古墳群を櫻山古墳群の支群として捉えるのか、あるいはそれぞれ独立した古墳群とするのかは確定はしていない。この付近の山陽自動車道に伴う調査が終了した時点で、新たな資料を加えて検討する必要があると思われる。その他、加佐、久留美・毛谷、与呂木・平井、吉田、広野古墳群等が三木市域を取り巻く台地の縁辺部に所在している。当地方の特徴として、これらの古墳群は内部主体は横穴式石室のものが比較的少なく、木棺直葬や箱式石棺が大半を占める傾向にある。木棺直葬墳は三木山1号墳、大池7号墳の調査で明らかのように、1墳丘に5主体部（三木山1号墳）、6主体部（大池7号墳）などと多重埋葬を特徴とする。横穴式石室の導入時期とその政治的意味と併せて興味深い特色である。

三木市内で発掘調査の行われたものとしては、吉田古墳群（昭和35年）、高木古墳群（昭和39年）、三木山1号墳（昭和58年）、巴1号墳（昭和59年）、窟屋屋ノ坂古墳（昭和61年）大池7号墳（平成3年）、加佐3・4号墳（平成4年）、年ノ神古墳群（平成5・6年）、正法寺古墳群（平成6年）、大年山古墳（平成8年）などである。また、耕地の開墾、宅地造成などで消滅した古墳も数多い。

加古川中下流域では奈良時代に入ると次々と寺院が建立されるが三木市域ではこの時期の寺院跡は知られていない。しかし、小和田神社裏遺跡から白鳳期とみられる埴が出土しており、当地域にも仏教の受容があったことは間違いない。志染町の志染中地区・戸田遺跡、細川町の東中遺跡・細川中遺跡、久留美の田井野遺跡では律令期の集落が確認されている。

三木市域を取り巻く台地縁辺には、9世紀から13世紀の長期にわたり須恵器及び瓦を生産した窯跡群が所在する。北部の山塊谷部には跡部・久留美窯跡群、南部の台地には吉田・宿原窯跡群、美濃川と志染川にはさまれた丘陵には平井・与呂木窯跡群がある。このうち、久留美窯跡群柳谷支群11~14号窯・跡部4号窯、西ノ谷窯跡が奈良時代のものである。平成5年に兵庫県が調査した法橋遺跡では奈良時代の土師器焼成窯1基が検出されている。平安時代の窯跡は瓦陶兼業窯が多く、ここで生産された瓦は平安京内の寺院に供給されていたことが指摘されている。

中世には東吉田遺跡・豊地遺跡・西中遺跡・久留美地区の門前・中筋・松ノ下・丈ノ越・上野ノ下遺跡等各地で集落が形成されている。なかでも、平成2~6年に、は場整備とともに調査された久留美地区の5つの遺跡は瓦葺きを想定させるものを含む掘立柱建物跡を合計31棟検出している。戸田遺跡では鎌倉時代とみられる集石墓が検出されている。

三木市街南側の丘陵上には中世後期に別所氏築造の三木城が所在する。城内は部分的に発掘調査が行われ、西ノ丸跡と推定される場所からは貯蔵庫とみられる大甕群等が検出されている。三木城を遠望できる丘陵上には鐵軍陣側が城攻めの際に築造した平井山本陣をはじめ陣城が展開する。このうち調査が行われたものとして、昭和63年に三木市が調査した君ヶ峰城跡、平成3~4年にかけて兵庫県が調査した加佐山城跡・慈眼寺山城跡がある。地誌「播磨鑑」に記載されている、「大塚町上君ヶ峰」・「加佐村ノ上」・「久留美村慈眼寺山頂」にそれぞれあたるものと考えられ、文献と整合した貴重な調査成果が得られている。

* 周辺の遺跡分布図作成及び遺跡の性格の記述については三本市教育委員会の松村正和氏の御教示に
負うところが大きい。

参考文献

- ・『三木市の古墳』三木市文化財保護委員会 岡村覚二・岡本道夫
- ・『三木市史』 兵庫県三木市 1970
- ・『兵庫県史』第1巻 兵庫県史編集専門委員会 1974
- ・『兵庫県大辞典』 神戸新聞出版センター 1983
- ・『社会教育活動状況報告書』 三木市教育委員会 1985～1990
- ・『三木市埋蔵文化財調査概報』昭和50年度～昭和59年度 三木市教育委員会 1986
- ・『久留美毛谷』～古窯跡群等の発掘調査報告書～ 毛谷古窯跡群埋蔵文化財文化財調査会 1990
- ・『御坂遺跡』兵庫県文化財調査報告第 132冊 兵庫県教育委員会 1994
- ・『与呂木遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 133冊 兵庫県教育委員会 1994
- ・『大池 7号墳』兵庫県文化財調査報告第 137冊 兵庫県教育委員会 1995
- ・『加佐山城跡・慈眼寺山城跡』兵庫県文化財調査報告第 144冊 兵庫県教育委員会 1995

第4図 周辺の道路

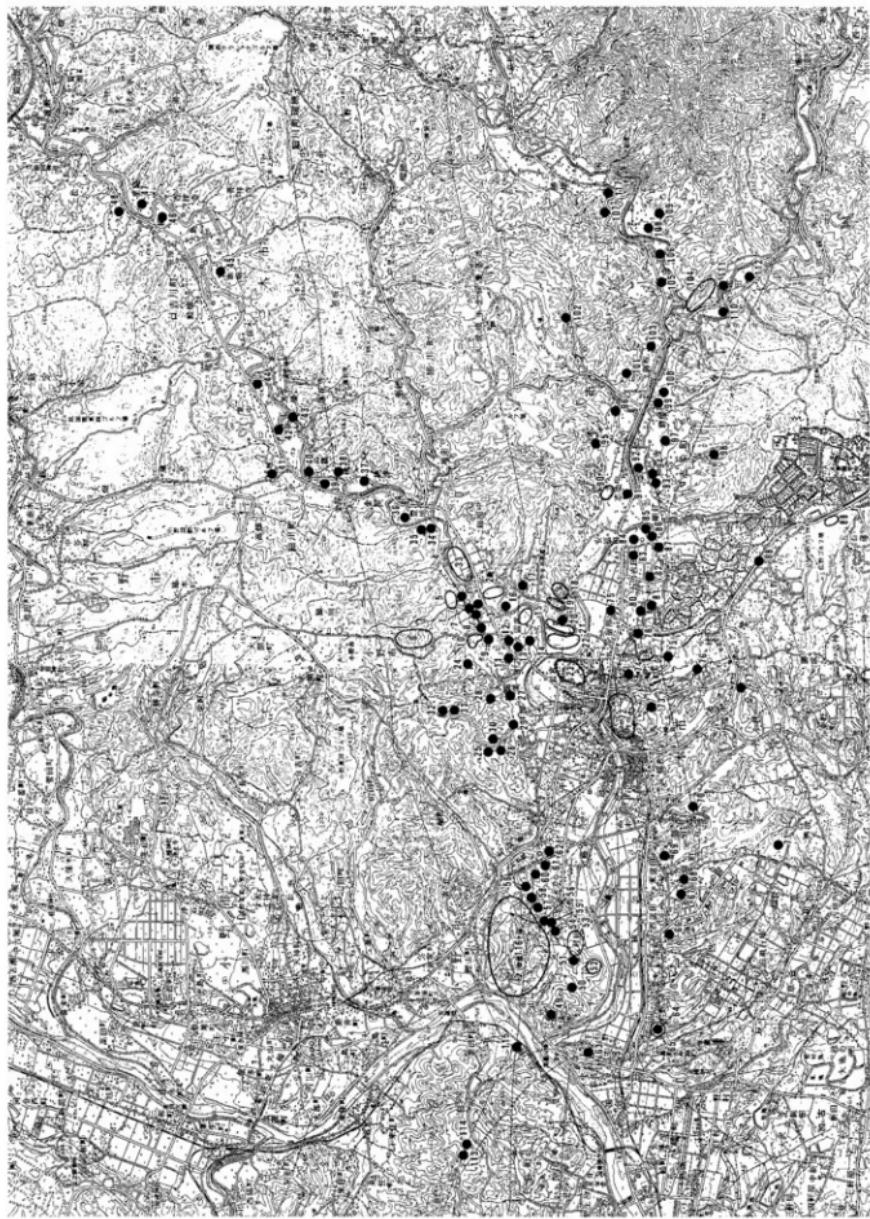


表1 周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	時期	概要
1	丹井野遺跡	古墳～平安	本報告遺跡
2	西ヶ原遺跡	弥生～古墳	弥生時代末の竪穴住居跡5軒、福立柱建物跡1棟、古墳時代後期の竪穴住居跡31軒福立柱建物跡1棟など。兵庫県文化財調査報告第151号『西ヶ原遺跡』
3	大池古墳群	古墳	7基の円墳からなる。現在は1・3号墳のみ、1号墳は横穴式石室塚。他は木棺直葬塚。兵庫県文化財調査報告第137号『大池7号墳』平版3年兵庫県調査
4	毛谷古墳群	古墳	直径4.5～12mの円墳4基。『三木の古墳』
5	右屋・女谷遺跡	弥生～奈良	弥生時代の住居跡2軒、古墳時代の住居跡3軒。他土塗。『久留美毛谷』
6	毛谷墓跡群	平安	平安時代の窓跡27基。瓦陶兼業窯。『久留美毛谷』
7	大池墓跡群	平安	久留美大池の北西域に所在する瓦陶兼業窯3基
8	宮の池盆地	平安	遺構の検出はないが、須恵器の土器・瓦が出土。平成4年兵庫県調査
9	久留美・宮の西遺跡	平安	掘立柱建物跡2棟。平成6年三木市調査
10	久留美墓跡群柳谷支群	奈良～平安	奈良時代の墓4基、平安時代の窓11基。瓦陶兼業窯。平成3・4年兵庫県調査
11	久留美門前遺跡	平安～鎌倉	縦柱掘立柱建物跡3棟、土塹13基。平成2年三木市調査
12	久留美中筋遺跡	平安末	掘立柱建物跡17棟、土塹14基、井戸2棲。平成6年三木市調査
13	久留美松ノ下遺跡	古墳～平安	掘立柱建物跡7棟、井戸3基、竪穴住居1軒。平成5年三木市調査
14	久留美史ノ越遺跡	古墳～中世	掘立柱建物跡5棟、竪穴住居1軒、古墳1基。他土塗、樋。平成5年三木市調査
15	久留美丁野ノ下遺跡	古墳～平安	掘立柱建物跡2棟、集石土塹2基、古墳1基、溝。平成3年三木市調査
16	平井遺跡	6世紀後半～7世紀初頭	方形状の竪穴住居跡1軒。昭和55年三木市調査。字義治尾屋に古墳1基
17	平井窯跡群	平安	平井埴輪内兩斜面に所在する3基の窯跡群
18	与呂木古墳群	古墳	東閑地（2）・東上野（6）・高越（23）・丸元（3）・高辻（8）の計40基
19	与呂木窓跡群	平安	野々池内に7基（消滅）、通り池内に2基（現存）
20	与呂木大畠遺跡	中世	中世の柱穴検出。昭和7年三木市調査
21	与呂木遺跡	弥生～鎌倉	弥生時代中期の円形竪穴住居跡、掘立柱建物跡、兵庫県文化財調査報告第133号
22	与呂木散布地	中世	三木市教育委員会分布調査による。中世の須恵器の散布が認められる。
23	寝當散布地	弥生～中世	段丘下段で試掘。段丘上段からの上器流れ込み。平成元年三木市調査
24	慈眼寺山城跡	室町	三木合戦の際の織田方の付城 平成4年兵庫県調査
25	加佐山城跡	室町	三木合戦の際の織田方の付城 平成3・4年兵庫県調査
26	加佐古墳群	古墳	3・4号は平成4年に兵庫県調査。他は消滅か
27	久留美西ノ谷遺跡	古墳	方形の竪穴住居跡2軒、講1条、柱穴を検出した。昭和58年三木市調査
28	西ノ谷窓跡	奈良	奥池の西側に所在する。須恵器の杯・瓶・盤・皿・壺・蓋が出土。平成3年兵庫県調査
29	鷹部1号窓	平安	三木高塚グランド・定池の東側
30	鷹部4号窓	奈良	奥池の西側
31	鷹部2号窓	平安	三木市清掃センター入り口の南東部
32	鷹部3号窓	平安	三木市清掃センターの北東盛土下
33	細川中遺跡	弥生～平安	奈良時代の掘立柱建物跡。昭和52年三木市調査
34	圓滿寺遺跡	古墳～鎌倉	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、塚、土塹。昭和61年三木市調査
35	細川中古墳群	古墳	直径11m前後の4基の山塚。円墳があったとされるが、現在は消滅
36	豊地遺跡	中世（鎌倉）	掘立柱建物跡5棟。昭和60年三木市調査
37	桃津遺跡 第1地点	鎌倉	柱穴、溝。昭和62年三木市調査
38	桃津遺跡 第2地点	鎌倉	柱穴、土塗。昭和62年三木市調査
39	高糀谷ノ郷遺跡	弥生～平安	掘立柱建物跡、鉄津洋土塗、溝、小銅鐸・須恵器。昭和63年三木市調査
40	高糀遺跡	平安～鎌倉	柱穴、溝。昭和63年三木市調査

表2 周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	時期	概要
41	黄金塚古墳	古墳	6世紀中頃。大型の横穴式石室。須恵器(180点)、鉄器、玉類。昭和初年乱掘
42	西中瀬跡	中世	溝、土塁、柱穴。平成2年三木市調査
43	衣笠城跡	宝町	三木合戦の際に三木方の城跡
44	東中瀬跡	奈良～平安	掘立柱建物跡6棟。楕円、溝。「鶴ふ家」の墨書き器。平成元年三木市調査
45	南畠遺跡	鍾倉	柱穴、溝。昭和61年三木市調査
46	横道跡	中世	柱穴、土塁、溝。平成5年三木市調査
47	里塙遺跡	鍾倉～宝町	柱穴、土塁、溝。須恵器、土師器、陶磁器、宋錢。平成4年三木市調査
48	久次遺跡	鍾倉	柱穴、土塁、溝。平成3年三木市調査
49	正法寺古墳群	古墳	7世紀初、13基の横穴式石室の円墳。平成6年三木市調査。1・5～9号墳が残存
50	御厨出土地点	弥生	明治27年頃出土「三木市史」
51	小和田神社裏遺跡	奈良	傳仏出土。寺院跡と考えられている。「三木市史」
52	和田愛宕古墳群	古墳	直径7～21m横穴式石室を主体とする15基の古墳群。巣山古墳群と同一山塊にあり
53	天王山・妙界寺古墳群	古墳	直径4.4～12.4mの横穴式石室を主体とする14基(妙界寺)・3基(天王山)の古墳群。天王山古墳群は小和田神社付近に、妙界寺古墳群は東側山麓に所在する。
54	和田神社遺跡	弥生	平成6年度兵庫県確認調査。平成8年度全画面調査予定
55	大年山遺跡	奈良	住居跡、土塁、掘立柱建物跡2棟検出。平成7年度兵庫県調査
56	大年山古墳	古墳	1号墳は5基の木棺直葬の主部。6世紀初頭の須恵器。平成7年度兵庫県調査
57	貝谷瀬跡 第2地点	弥生	弥生時代中期の土器棺1基、木棺墓6基検出。平成6年兵庫県調査
58	貝谷瀬跡 第1地点	弥生	弥生時代中期の土器棺4基、木棺墓29基、焼土壙2基検出。平成6年兵庫県調査
59	貝谷古墳群	弥生	弥生時代中期後半の土器棺1基、木棺墓1基検出。平成6年兵庫県調査
60	年ノ神古墳群	弥生～古墳	傾斜面地で横穴式石室墳2基、小石室墳3基。屋根上に木棺直葬4基を検出した。6号墳から西歓鏡、短刀、玉類などが出土。平成5・6年度兵庫県調査
61	年ノ神遺跡	弥生～古墳	弥生時代中期～古墳時代の堅穴住居跡15軒。奈良時代の掘立柱建物跡3棟、土器棺、溝、石造構造を検出。平成5・6年度兵庫県調査
62	大仁遺跡	弥生～古墳	良好な包含層から土器が出土。平成6年度兵庫県調査
63	下石野古墳群	古墳	全長95mの前方後円墳である愛宕山古墳を含む5基からなる古墳群。「三木市史」
64	皇子経塚	平安	地割りにより発見。須恵器の経筒、土師器の外舟器出土。
65	皇子山古墳群	古墳	直径5～14mの円墳14基からなる。10号墳は堅式石棺を持つ。
66	花尻・石野古墳群	古墳	直径4.5～11mの円墳8基(花尻)・12基(石野)からなる。破壊が著しい。
67	古谷古墳群	古墳	7基からなる古墳群。1号墳16×17mの方墳。木棺直葬。昭和59年三木市調査
68	土山街道古墳群	古墳	三木郡状態(土山街道)の東側に5基所在している。
69	衣田寺裏古墳群	古墳	直径7～15.5mの12基からなる古墳群
70	高木古墳群3・4支群	古墳	56基が存在したが、現在は第3・4支群の15基を残す。俺は昭和39年調査し清滅
71	興治古墳群	古墳	直径7～22mの14基からなる。内8～10号の3基全壙。10号は平成2年三木市調査
72	三木城跡	宝町	別所氏の居城。天文8年(1540)落城。数年にわたり三木市調査
73	三木山1号墳	古墳	直径10mの円墳に5つの木棺直葬を主体部とする。昭和58年三木市調査
74	君ヶ峰散布地	中世	『全国遺跡地図 兵庫県』(文化庁)による。
75	君ヶ峰城跡	宝町	三木城次の際に築いた城。土御門で礎石建物検出。昭和63年三木市調査
76	二位谷山城跡	宝町	三木城次の際に築いた城。土御門で礎石建物検出。
77	小林八幡神社遺跡	中世	三木合戦時の付城にともなう盛土と下層に掘立柱建物跡群。平成5・6年三木市調査
78	宿原城推定2地点	中世	土基を確認している。
79	宿原遺跡	弥生～奈良	弥生中期の方形周溝墓7基、古墳時代初期の堅穴住居跡2軒、後期の溝1条、奈良時代の方形土壙1基、鍾倉時代の掘立柱建物跡2棟検出。平成7年三木市調査

表3 周辺の遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	時期	概要
80	宿原中世墓	中世	現代の墓地内にあり
81	宿原墓群1~3	平安末	溝池の南斜面に所在する。
82	宿原墓群4~5	平安末	昭和52年三木市調査。瓦陶兼業窯
83	吉田南造跡	弥生~古墳	弥生時代後期の溝、古墳時代の住居跡を検出。昭和53年三木市調査
84	吉田東造跡	古墳~縄文初	弥生時代の堅穴住居跡確認。縄文初頭の柱穴・土壙検出。昭和57年三木市調査
85	吉田散布地	中世	三木市分布調査による。中世墓か
86	吉田村ノ上の墓	中世	『播磨圖』に記述の同名の付城か
87	吉田古墳群	古墳	北の15基(第1群)南の7基(第2群)。第1群の6基は昭和35年調査。木棺直葬
88	広野野々池沢古墳群	古墳	直径5~17mの9基が残る。大半は消滅。木棺直葬か
89	広野ゴルフ場内古墳群	古墳	ゴルフ場内に6基が残存する。直径6.5~14m。木棺直葬
90	志染中水谷造跡	奈良~平安	良好な包含層が残存し、墨書きと器、瓦、木器が出土した。昭和62年三木市調査
91	志染中造跡	古墳	カマドを持つ堅穴住居跡5軒と竪立建物跡1棟を検出。昭和62年三木市調査
92	窟聖麻木造跡	古墳	堅穴住居跡、柱穴、昭和59年三木市調査。逐上保存。
93	高男寺本丸造跡	縄文	掘立柱建物跡2棟、溝2条。昭和58年三木市調査
94	細目有田造跡	弥生末	方形の堅穴住居跡2軒、昭和59年三木市調査
95	井上経塚	平安	『全国遺跡地図 兵庫県』による。頂上付近に須恵器、石材散布
96	井上造跡	弥生	溝、土壙、弥生土器多量に出土。平成元年三木市調査
97	窟屋原ノ坂古墳	古墳	6世紀後半。直径約10mの円錐形で主体部は無袖横穴式石室。昭和61年三木市調査。
98	高男寺廐寺	室町	石組み溝、縁石、埴土面を検出。貞和2(1346)銘の新平瓦と鬼瓦が出土。付近より絆筒(1166)出土。昭和57年三木市調査
99	どっこいさん	古墳?	整地作業中、石棺の蓋が出土。昭和61年度に三木市が調査したが造塁なし。
100	寅屋道跡	中世	柱穴、土壙検出。平成4年三木市調査。
101	法灘造跡	奈良~平安	奈良時代の土器焼成窯1基、平安時代末の火葬墓2基検出。平成5年度兵庫県調査
102	伽耶院東造跡	室町	土壙21基、井戸2基、溝3条、柱穴多数を検出。平成元年三木市調査。
103	御坂造跡	弥生~江戸	縄文時代の水田、土壙、弥生時代の土壙、柱穴。兵庫県文化財調査報告第132号
104	三津田城跡	中世	三木合戦の際に畿田方の城跡。有馬氏入城と伝わる。
105	戸田造跡第1~2地点	弥生~縄文	弥生時代後半の土器を多量に出土した溝、土壙、平安時代前期の掘立柱建物跡2棟縄文時代後半の配石墓5基。現状保存。昭和55年三木市調査
106	戸田造跡第3地点	古墳	カマドを持つ1辺約4.6mの方形の堅穴住居跡1軒。平成3年三木市調査
107	戸田神宮寺造跡	縄文	柱穴検出。昭和57年三木市調査
108	小戸田造跡	弥生末~室町	堅穴住居跡5軒、集石土壙(室町)2基、土壙11基。平成2年三木市調査
109	小戸田山角散布地	中世	『全国遺跡地図 兵庫県』による
110	下明神造跡	平安~縄文	溝、土壙、柱穴を確認。現状保存。平成3年三木市調査
111	上明神造跡	中世	確認調査の結果、中世の須恵器、土師器が出土したのみ。平成4年三木市調査
112	三津田造跡	中世	掘立柱建物跡1棟、井戸1基、土壙を検出。平成2年三木市調査
113	白沢放山造跡	衆鳥~奈良	須恵器焼成窯1基と土壙9基を検出。平成5年度兵庫県調査
114	白沢3~5号窯	奈良	2基の須恵器焼成窯を検出。5号窯からは陶製人形が出土。平成5年兵庫県調査
115	勝手野古墳群	旧石器~古墳	11の古墳うち9基を測定。6号墳から装飾須恵器が出土。平成7年兵庫県調査
116	櫻山古墳群	古墳	三木・小野の市境の山塊に隣接する古墳群の総称で、150基以上とされる。三木市内の正法寺(オホミツ)古墳群との区別が不明瞭で、さらに山陽自動車道開通の調査が行われたのを契機に新たに名称を整備する必要性が認められる。
117	勝雄経塚	室町	鍛製の経筒、僧前焼の外容器。法華経8巻完存。1530年。平成7年兵庫県調査

第3章 確認調査

1. 調査の概要

第1章で述べたとおり、昭和61年度に実施した分布調査において遺物の散布がみられたため、平成元年度にNo.38 地点として確認調査を実施した。

調査は平成2年2月8日～14日まで間に実施した。路線計画のSTA.No240+20～STA.No238付近までの、延長約220m、幅50～70mの範囲を対象としている。確認調査の対象面積は約13,000m²である。

調査は2×2mの試掘坑を路線幅内に3ヶ所(北東端、中央、南西端)設置することを基本として、それらを約20m間隔で設定した。設置した試掘坑は合計36ヶ所である。

2. 調査の結果

調査対象地は美濃川の右岸に展開する更新世段丘面上に所在する。この段丘の標高は概ね75～85m内に収まり、南向きの緩斜面である。対象地の南側には溜池である「大池」があり、この大池に向かって南に開析する谷がSTA.No239+30にあり、現在は埋め立てられて水田となっているが、その平面形態は谷地形の痕跡をよく残している。現在は、水田としての土地利用がなされているが、緩やかとはいえ傾斜面を開拓して水田としているため、切土あるいは盛土を盛んに行っている。分布調査において遺物の散布がみられたものの後世のこのような土地利用のため、造構面に削平の影響が相当程度及んでいることはあらかじめ予想された。

調査は2×2mの方形の試掘坑を設定して、すべて入力によって掘り下げ、造構および遺物の検出に努めた。調査の結果、地形の変化は予想どおりで、水田1筆のなかで山側に設定した試掘坑では、表土である耕作土の下層には遺物を含んでいる包含層は全く存在せず、地山が検出された。逆に、谷側に設定した試掘坑では、1m程度の盛土をしている場合も認められた。

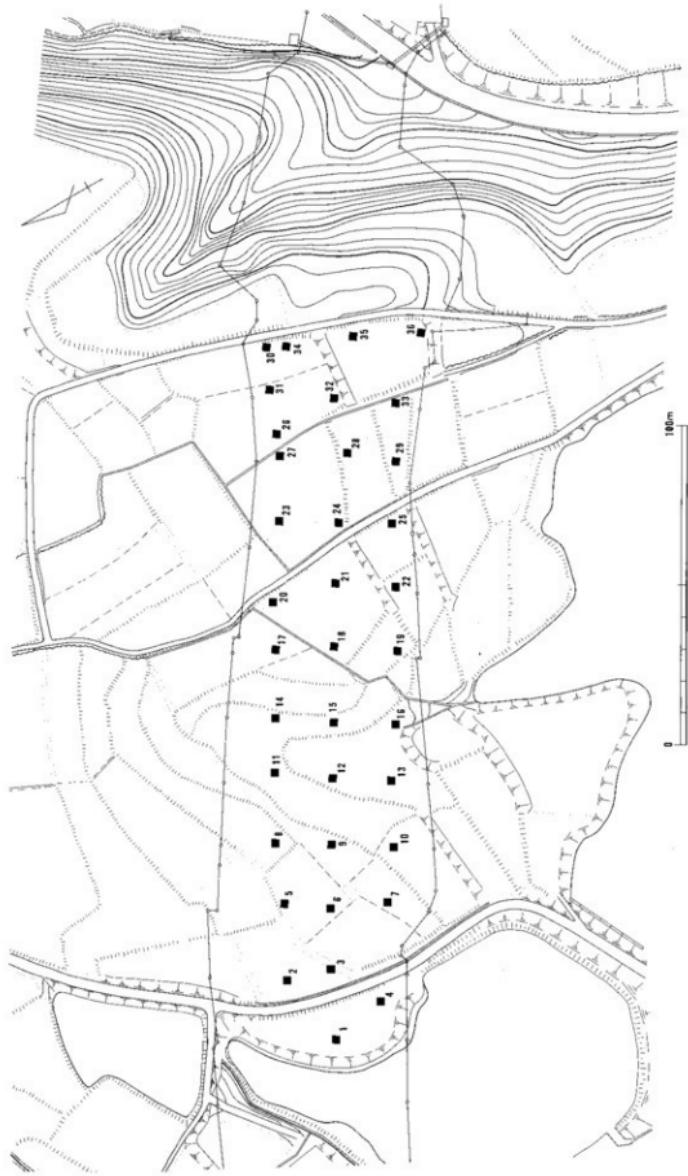
遺物は、大半の試掘坑から出土している。時期としては、主に奈良時代の須恵器を中心で、古墳時代後期の須恵器片、平安時代の須恵器片も若干混じっている。ただし、遺物の出土量としては少なく、36ヶ所の調査で28ℓ入りコンテナで2箱程度のものである。

農道の西側の地域に設定したNo.1～4グリッドからは造構、遺物とともにみられず、削平の状況も著しく、この区域には造構の存在は認められない。大池に注いでいた埋没谷から西側の区域に設定した、No.2・3・5～9グリッドからは溝・土壙などの遺物が確認されている。ただし、場所によっては削平されて造構が消滅している範囲もかなり存在すると思われる。埋没谷内に設定したNo.10～16グリッドは造構は検出されず、若干の遺物が出土している。最深部では地山に到達できなかった。埋没谷以東に設定したNo.17～36からは柱穴、溝、土壙などの造構と須恵器を主体とした遺物を検出している。造構密度は埋没谷以西よりも疎らで、削平の影響も大きいと考えられる。包含層の残りも少ない。

以上のような確認調査の結果、埋没谷の西側と東側で、奈良時代を中心とした集落遺跡の存在が認められたため、全面調査を実施することとした。調査面積は約7,300m²程度である。

埋没谷の部分については、造構の検出が全くみられなかつたが、若干の遺物が出土している。地山までの掘削が人力では不可能であったため、重機を使用したトレンチ調査で全面調査と並行して第2次の確認調査を実施することとした。

第5図 植認調査グリッド配置図



第4章 全面調査の成果

第1節 立地と調査前の状況

田井野遺跡は、舌状に南北へ張り出す段丘上に立地する。段丘とその周囲にはかなりの標高差が存在し、谷の開析部を閉塞して設けられた溜め池が取り囲む様に存在する。段丘の東南下方に広がる沖積地には古墳時代6世紀初めから後後にかけて営まれた集落跡である西ヶ原遺跡が、また段丘の縁辺には田井野・西ヶ原両遺跡を隔てるようだ池7号墳がそれぞれ立地する。

発掘調査は段丘の南側斜面を横切る形で行われている。調査区全体の総延長は南北70m・東西210m、A地区における南北の標高差は最大2mを測り、旧地形の復元等高線を見ても斜面の変化点付近を調査したことになる。

調査区の西側は現在溜め池（小池・カリス池）となっている毛谷の開析部によって、東側は段丘の縁辺部で隔てられている。また中央部には小規模な谷が存在し、地形的には南北に張り出す2ヶ所の段丘上に遺跡は立地する。全面調査ではこれらの地形的特徴を考慮し、谷の西側（A地区）と東側（B・C・D地区）に分割して調査を実施した。

A地区は調査面積2,092.6m²を測る。平成2年度に調査を行った結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土壤などを検出した。また一部の遺構が谷の肩部分へ延びることが明らかとなったため、調査範囲を広げて平成3年度に366.6m²の全面調査を実施した。

谷を隔てて西側に位置するB地区は、調査面積2,133.8m²を測る。平成3年度に全面調査を実施し、掘立柱建物跡・土壤などを調査している。

段丘の中央部にあたるC地区は、平成3年度に全面調査を行った。検出した遺構は、掘立柱建物跡・土壤などで、全体の調査面積は1,585.5m²である。

調査範囲の東端であるD地区は、南半部の403.2m²を平成3年度、北半部674m²を平成4年度にそれぞれ調査した。南半部については、後世の削平等によって大半の遺構が失われていた。北半部を中心に、掘立柱建物跡・土壤などを検出した。

全面調査では、古墳時代後期・奈良時代・中世の遺物が見られ、遺構から出土した遺物の示す年代観は、古墳時代後期と奈良時代の2時期に大別される。

古墳時代の遺構はA地区に顕著に見られた。この時代の遺構のなかでは竪穴住居跡が中心的な存在を占める。調査では3軒を検出したに過ぎないが、西ヶ原遺跡に後出する集落として位置づけられる。この時期に該当する遺物では、SH01出土の土師質土馬が目を引く。一方、奈良時代に該当する遺構の中心は掘立柱建物跡で、調査では合計15棟検出された。各調査区で確認されており、本来は広く段丘上に展開していたものと思われる。遺構からの出土遺物が少ない上に遺存状態も良くないことから、時期の決定には支障があるが、奈良時代後期を中心とする遺跡である。

調査前には斜面を切り開いて水田が営まれていたが、それぞれの水田面レベルの差は大きく、この地において大規模な地形改変を伴う造営が推定された。全面調査の結果、遺構の遺存状況にかなりの疎密が見られ、出土遺物も調査面積と比して寡少であった。後世の地形改変により遺構・遺物ともに大きな影響を受けたことを調査によって追認したと言える。遺跡の範囲は調査において確定できなかったが、それぞれ調査区外で同時期の遺物散布を確認しており、段丘上全面に展開するものであろう。

第2節 A地区の調査

全体の概況

調査区のうちでは最も西に位置し、B・C・D地区とは、南西方向へ開析する谷によって隔てられる。カリ又池西岸沿いの里道から谷部にかけての三角形部分を平成2年度、谷部の南肩部分を平成3年度に分割して発掘調査を実施した。

調査前の一带は、丘陵斜面を水平に段切りして設けられた水田であった。もともとの地形が急傾斜であったことを反映して、かなり大きな削平を受けている。検出面においてなお、1m近い段差の残る箇所もみられた。検出面直上の遺物包含層は非常に薄く、出土遺物も希薄であった。

平成2年度調査区では、南部に竪穴住居跡3軒・掘立柱建物跡5棟などの遺構が集中する。一方では中央に大きな空闊地があるなど遺構配置に粗密が見られ、削平で失われた遺構が少なくない。このほかには、土壙8基・溝9条・多数のピットなどが検出された。

平成3年度調査区は、隣接する平成2年度調査区と検出面に50cm前後のレベル差があった。SH03の南半部など、同一の遺構でも調査区を隔てて消失しているものが少くない。土壙3基・溝4条・ピットなどが検出されている。

出土した遺物は、調査面積と比較して見れば寡少であった。遺構と同様、後世の削平による影響が顕著に現れたといえよう。遺構から出土したものは古墳時代後期・奈良時代の2時期にわけられ、包含層からの出土品に中世の遺物が若干見られた。須恵器を中心に土器類が大半を占めるなか、SH01出土の土師質馬が特筆される。

竪穴住居跡

調査区の南部で3軒並んで検出された。いずれも方形住居で、方向は3軒ともに北西を指向する。規模はそれぞれ異なっているが、共通した方向にカマドを設けるなどの特徴は共通している。

全体の遺存状況は後世の削平による影響によって非常に悪く、周壁もわずかに遺存した程度である。住居跡群はさらに調査区外へも広がると推定されるが、遺構の遺存状況から見れば、検出できた遺構以外にもすでに消滅した住居跡の存在が想定できる。

SH01(図版4・25・26・28)

調査区の東部に位置する。3軒のうち最も東にあり、SH02の西12mで検出された。東周壁から床面の南半部にかけて、SB01が存在している。また南側では、周壁と並行するようにのびるSD03が近接した位置にある。

方形の竪穴住居で、南北7.36m×東西6.68mを測る。長軸をN-29°-W:南東方向へと向け、北周壁の中央部にはカマドが設けられている。長方形気味の床面は平坦で床面積は49.1m²、検出面は北から南へと緩やかに傾斜しているため、周壁の高さは北東西の中央部でそれぞれ21cm・18cm・19cmを測るのに対し、南周壁はわずかに10cmの遺存であった。

埋土は、中央に淡灰褐色シルト質細砂があり、周壁沿いには暗黄褐色シルトが存在する。周壁講の埋土は黄褐色シルト質細砂であった。

屋内施設には、カマド・周壁溝・柱穴がある。

カマドは両袖の造り付けカマドで、北周壁の中央部に作られている。周壁コーナーからカマド中心までの距離は、東側3.44m・西側3.48mである。カマドの主軸方向は、住居跡の南北軸とほぼ一致する。盛り土によって築かれ、奥行き186cm・焚口部の幅100cm・遺存する最大高28cmを測る。燃焼部から煙道部にかけて若干のくぼみがあるものの、底面は全体にはほぼ平坦であった。平面形は煙道部先端から両袖まで、「ハ」の字にまっすぐ開く。両袖の内側からは、火を受け赤化した石が検出された。周辺に焼土が見られることから、支脚として使われたものであろう。燃焼部ならびに東袖の前方からは、炭が検出されている。

なお、煙道部の東壁寄りから、数個の円碟がまとまって検出され、下からは直径24cmのピットが、礫に覆い隠されるように確認された。埋土は炭層であったが、礫に火を受けた様子がないことから、据立柱建物跡などで見られる石を内包した柱穴である可能性が考えられる。明確に対応する柱穴がない、検出時に埋土等に顕著な違いが見られなかった・カマドの底面も矛盾なく立ち上がる・などの点から、住居跡との関連も否定できないが、報告では後世の遺構である可能性を強調しておきたい。

周壁の基部に沿って、周壁溝を1条検出した。カマドより西では袖取り付け部からはじまり、東側は取り付け部から84cmほど間隔が開く。溝の幅は14~20cm・深さは平均して3cmを測り、途切れることなく4壁を取り囲む。

主柱穴は4個検出した。南東を除く3個で、柱根痕跡を確認している。掘り方の直径は48~60cmを測り、比較的バラツキが少ない。また深さは、30cm前後で收まり、極端な違いは見られない。柱間距離は北側列が3.72m・東側列は3.76m・南側列3.60mではほぼ等間隔に設けられている。南西の柱穴が若干北側に寄っているため、西側列の距離は3.02mと他に比べて短い。

出土遺物は、床面に近い埋土から須恵器の杯蓋(2、3、4)・杯身(6)・(85)、土師器の壺(100)などが出土している。またカマドの内部からは土師器の甕(101)など土師器が数多く見られた。南西の主柱穴に接する浅いピットからは、土師質の土馬(1)が出土した。

須恵器の杯蓋・身ともにかなり退化傾向がすんでいるが、基本的には蓋杯が逆転する以前の時期に該当する。6世紀末~7世紀初頭の時期に營まれていた住居跡であろう。

S H02 (図版5)

調査区の中央部やや南寄りにあり、3軒の中央に位置する。S H01の東12m・S H03の西17mで検出された。重なり合うようにS B02が、南周壁溝の中央を切る形でS K11が存在する。

平面は方形の竪穴住居で、南北4.52m×東西4.08mである。長軸はN-29°-W:南東方向へと向け、床面積は18.4m²を測る。検出した床面は比較的平坦であった。検出面は削平による影響を受けており、周壁の遺存状況は極めて悪い。高さは最も遺存する北辺で10cmを測る以外は、ほとんど残っていない状態であった。特に前平の著しい南部分では、周壁溝位置によって推定できたにすぎない。

埋土は茶褐色シルト質細砂であった。

屋内施設には、カマド・周壁溝・柱穴がある。

カマドは造り付けカマドで、盛り土によって築かれている。北周壁の中央部にあり、周壁コーナーからカマド中心までの距離は、東側2.03m・西側2.05mである。

両袖であるが西袖は短く、住居跡内部への突出はわずかであった。奥行き162cm・焚口部の幅174cm・遺存する最大高26cm測る。カマドの主軸はN-11°-Wと、住居跡の南北軸よりはさらに東に向けて設け

られている。

燃焼部の底面はほぼ平坦で、煙道部は上壌状に一段深くなる。燃焼部床面とのレベル差は、11cmを測り、内部からは焼土に混じって大量の炭が検出された。

東袖の内側からは、支脚として使用された石が立ったままの状態で検出した。また支脚の南側で、須恵器甕の体部が出土している。

南西部の周壁沿いに、周壁溝を1条検出した。遺存状態が悪いため、築造当初のプランが判然としないが、西周壁の中央から南周壁の中央まで確認できた。さらに南東隅へ向けて延びてゆくと思われるが、削平および後世の擾乱による影響が著しいため、続きは検出できなかった。溝の幅は12cm・深さは平均して3cmを測る。

主柱穴は4個検出した。うち北東および南西で柱根跡を確認した。掘り方の直径は北東・南西が58cm、残りの2ヶ所は32cmを測る。深さは、いずれも35cm前後で収まり、極端な違いは見られない。柱間距離は南北が2.20m・東西が2.50mで、若干東西方向が長いものの、ほぼ等間隔に設けられている。

出土遺物はカマド・柱穴掘り方を中心、須恵器・土師器が出土しているが、いずれも小片で、図化できた遺物はなかった。カマド内部からは、土師器の口縁部とみられる破片が1点あるものの（器種不明）大半は体部付近のみの残存である。また遺存状態が悪さを反映して、住居跡の埋土からも遺物の出土量は寡少であった。

出土遺物からは造構の存在時期を明確にすることが出来なかった。しかし造構の配置状況から見て、他の住居跡と時期的に大きく前後することはないであろう。

S H03 (図版 6・26・28・29)

調査区の中央部やや南寄りに位置する。2つの調査区の境をまたいで検出され、北半分を平成2年度の調査・南半分を平成3年度に分割して調査した。3軒ある住居跡では最も西端で、S H02の東17mにある。S H02との間にはS B03が存在する。

平面プランは方形の堅穴住居である。平成2年度に調査した北半部は検出ができたものが、平成3年度調査区に含まれる南半部では削平が床面にまで及んでおり、周壁の続きはほとんど失われていた。主柱穴の配置状況と、住居跡に伴うとみられる土壌の位置から推定して、南北6.80m×東西6.45m、床面積は45.8m²と考えられる。周壁の遺存状況は極めて悪く、最も遺存する北辺のカマド付近で8cmを測る。長軸はN-37°-W：南東方向へと向ける。

埋土は淡灰褐色シルト質細砂であった。

屋内施設には、カマド・周壁溝・柱穴・土壌がある。

カマドは造り付けカマドで、盛り土によって築かれている。北周壁の中央部は中央に造られ、周壁コーナーからカマド中心までの距離は、東側2.40m・西側3.80mである。

両袖を持ち、奥行き170cm・焚口部の幅94cm・遺存する最大高23cmを測る。カマドの主軸はN-40°-Wで、住居跡の南北軸にはば似通っている。燃焼部から煙道部にかけての床面は平坦で、煙出しの方向に向かって緩やかに傾斜する。平面形は煙道部先端から両袖まで、「ハ」の字にまっすぐ開く。

焚口部の中央からは、支脚として使われた石が立ったままの状態で検出された。また焚口部の周辺では、火を受けた形跡のある石が数点出土しており、周辺には炭層の分布が濃密に見られた。

周壁溝は、遺存状態の良かった北半部のみで検出した。北西部は西袖の付け根からはじまり、床面に

沿って直角方向に屈曲する。北東部では土壙の北東コーナー付近からはじまって、すぐに屈曲部をむかえるため、北東部周壁の3分の1程度にしか溝が存在しない。いずれもさらに南へと延びると考えられるが、削平および後世の擾乱による影響が著しいため、プランは検出できなかった。溝の幅は東周壁沿いが広く、西周壁沿いが狭い傾向がある。それぞれの最大幅42cm・18cmであった。深さはほぼ均一で3cmを測る。

土壙は住居跡の北東部と、南東部で1個づつ検出した。北東部の土壙はカマド東袖の東側、北周壁に沿って存在している。平面は台形を呈し、底面はおおむね平坦であった。長軸84cm、短軸60cm、深さ18cmをそれぞれ測る。

南東部の土壙は、南東主柱穴の南に位置する。平面形は隅丸の直角三角形にちかく、床面は平坦である。各部位の規模は、長軸128cm、短軸124cm、深さ25cmである。南辺が北側周壁と並行に延びており、この延長線上に南周壁を復元したプランも矛盾が少ないとから見て、住居跡の壁に沿って存在した可能性が高い。

主柱穴は4個検出した。すべてに柱根の痕跡を確認している。掘り方の直径は25cm前後を測り、深さも32cm前後とほぼ平均している。柱間距離は南北が3.36m・東西が3.50mで、若干東西方向が長いものの、ほぼ等間隔に設けられている。北西隅の柱穴が西周壁と近接しているため、僅かではあるが全体が西側に寄った印象を受ける。

遺物は、床面に近い埋土から須恵器の杯身(7)・甕(106)・土師器甕(113)を中心に出土した。また、北西コーナーに近い床面から甕(84)がほぼ完形に近い状態で検出されている。カマドの内部からは土師器が少量出土したのみで、住居跡内の土壙からの出土遺物はなかった。

出土した遺物のうち蓋杯は、立ちあがりを有するが高さは低い。宝珠ツマミ出現直前の形式である。他の出土遺物も全体に退化傾向が進んでおり、6世紀末～7世紀初頭の所産と考えられる。SH01の出土遺物と形態が似通っていることから、両者はほぼ同時期に營まれていたと考えられる。

掘立柱建物跡

調査において確認できた建物は5棟であった。他の造構と同様、調査区の南部で検出されている。全体の造存状況は、他の造構と同様に良いとはいえない。特に後世の開発による影響から、構成する柱穴の一部が亡失したものもある。検出した部分より南側は段丘の傾斜部にあたり、建物が存在したとは考えにくいか、北側は削平も著しく、本来建物が存在していた可能性も高い。

遺物の出土した柱穴が少ないため、それぞれの建物の時期決定は困難である。ただ建物の配置状況を見るならば、近接し建物の方向も揃っているSB01～03に緊密な関係が窺える。一方、小規模で主軸方向に統一性のないSB04・05は、後出するものであろう。

建物の柱穴と認識したもの以外にも、調査区には数多くのビットが検出されている。遺物の出土・性格を断定する証左などは得られていないが、当地において何らかの人的行為が活発に行われた痕跡と理解できる。

SB01(図版7)

調査区の東部に位置する。5棟のうち最も東にあり、SB02の西13mで検出された。東側柱穴列がSH01の南東壁を重なるように切るほか、南東隅の柱穴がSD03と・南西隅の柱穴がSK03とそれぞれ切り

合い関係を持つ。

梁2間×桁3間の長方形で、梁間3.65m・桁行き5.90mをそれぞれ測る。床面積は21.5m²である。長軸はN-24°-W：南北方向を指向する。梁間・桁行ともに柱間距離は1.80~2.20mで、おむね等間隔を保っている。

柱穴掘り方の形状はおむね正円形を呈するほか、一つだけ方形掘り方が存在する。掘り方の直径は50~70cmで、比較的バラツキが少ない。方形を呈する柱穴は一辺が62cmを測り、円形掘り方の直径と共通する。深さは60cm前後が多いが、間に位置するいくつかは半分近い深度にとどまっている。

構成する10個のうち、8個の柱穴から柱根の痕跡を確認できた。また拳大程度の石を1~数個包蔵している柱穴が、4隅および東列の1つで見られた。石は検出面直下にまとまっており、底部にまで達していない。柱の根がらみの役割を果たしたと思われる。

柱穴の深さや内包される石の存在から、4隅を意識した構造が窺える。

掘立柱建物跡を構成する柱穴内からは、出土遺物がほとんど見られなかった。須恵器を中心に数点出土したが、いずれも小片で器種など細部の特徴は判別できなかった。

S B02 (図版9)

中央部南寄りで検出された。S B01と03に挟まれた位置にあり、両者との距離はそれぞれ13m・8mを測る。またS H02と重なり合うように切り合い関係をもつ。調査区全体が北から南へと削平を受けていた影響を受け、南側の柱穴は一つしか検出されなかった。

北側で3個・西側で4個の柱穴を確認しており梁2間×桁3間の長方形建物と考えられる。梁間3.80m・桁行き5.90mをそれぞれ測る。床面積は22.4m²である。長軸はN-31°-W、南北方向を指向し、S B03とはほぼ直行する。梁間・桁行ともに柱間距離は1.80~2.00mで、おむね等間隔を呈する。

柱穴掘り方の形状は正円形を呈する。また柱穴の直径は40cm前後と80cm前後の2種に大別される。上面の削平が著しい南東部の柱穴は、底部付近がわずかに遺存しているだけであった。検出面からはばらつきが見られるものの、水準高から柱穴底までの深度は比較的近く、構築当初は各柱穴とも統一の取れた深さであったと考えられる。

検出できた8個のうち、柱穴痕跡の確認できたものは3個だけであった。一方内部から石が検出されたものは、規模の小さい柱穴を中心に5個を数える。柱穴の底部まで数段積まれているものは、柱根を囲んで積まれた様子を窺わせる。他の掘立柱建物跡と同様、根がらみの役割を果たすものであろう。

掘立柱建物跡を構成する柱穴内からは、出土遺物がほとんど見られなかった。須恵器を中心に数点出土したが、いずれも小片で器種など細部の特徴は判別できなかった。

S B03 (図版8・28)

中央部南寄りで検出された。S B02の西側8mと、近い位置に存在する。他の遺構との切り合いは認められない。南西隅にあたる柱穴の一部が、調査区の側溝で失われている。

梁2間×桁4間の長方形で、梁間4.20m・桁行き9.50mをそれぞれ測る。床面積は39.9m²と、A地区のなかでは最大規模の掘立柱建物跡である。長軸はN-58°-E、東西方向を指向し、S B02とは直交の関係にある。柱間距離は梁間と桁行で微妙に差が見られ、梁間方向1.90mに対し桁行方向が2.60mと幅広い。

構成する柱穴の掘り方はおおむね正円形で、直径32~84cmとバラツキが激しい。特に南桁行の柱穴列に、直径の小さなものが多い。柱穴の深さは25cm前後で統一がとれており、掘り方の径にかかわらず一定の深さで掘削がなされたと考えられる。

柱穴痕跡が確認されたものは、構成する柱穴12個のうち4個にすぎない。しかし石を内包した柱穴は多く、状況から柱根を想定できるものもある。特に東南隅の柱穴では石が3段に積み重ねられ、石で囲まれた中央に直径50cmの空間が存在した。柱根を囲んでいた状況が明らかにわかる。

掘立柱建物跡を構成する柱穴内部からは、須恵器の底部にあたる破片が1点出土した。この93は平底の壺と考えられるが、遺存状態が悪く細部の特徴については検討が困難である。このほかに、須恵器・土師器が数点出土したが、器種など細部の特徴は判別できるものはなかった。

S B 04 (図版 9)

調査区のほぼ中央部で検出された。S B 03の北側15mに位置する。南柱穴列がS D 12と切り合い関係を生じている。建物のさらに北側には削平の段が明瞭に残っている。

建物規模は、梁1間×桁2間と小さく、梁間2.20m・桁行3.80mをそれぞれ測る。床面積は8.36m²である。長軸はN-59°-W、南北方向を指向し、S B 03とは直行する。柱間距離は梁間2.20mに対し桁行1.90mで、わずかに梁間が広い。桁行の柱通りが西から東へそれぞれわずかに開くなど、平面形は乱れが生じる。

柱穴掘り方の形状は正円形を呈する。掘り方の直径は30cm前後、柱穴の深さも20cm前後をそれぞれ測り、上面の削平等で生じた若干のバラツキを除けば小規模ながら均整がとれている。建物を構成する6個の柱穴で、柱穴痕跡の確認できたものは3個であった。石は柱穴内部から検出されていない。

いずれの柱穴内からも、遺物は出土していない。S B 01~03と主軸方向が異なることから、時期的に後出するものであろう。小規模であり、一時的な使用を目的とした建物の可能性も考えられる。

S B 05 (図版 7)

調査区の西端部で検出された。東には削平による造構の空闊地が広がる。S B 03からは西へ32m・S B 04からは南西へ27mと、他の造構と大きく隔てられ、切り合い関係を生じる造構は認められない。造構は調査区外に延びる可能性がある。

南北に2個・東西に3個の柱穴を調査区内で確認しているが、規模があまりにも小さく不自然であることから、このままで建物が構成されているとは考えがたい。調査区外となる西側へ延びると推定し、中央にも柱を持つ梁2間×桁2間以上の掘立柱建物跡と推測する。

検出できた数値は、梁間3.15m・桁行は1.45m、現状の床面積は4.57m²を測る。長軸は梁間方向でN-5°-W、南北方向を指向する。梁間・桁行ともに柱間距離は1.40~1.60mで、おおむね等間隔に配置されている。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円形、直径は40cm前後・深さも30cm前後とバランスのとれた規模であった。6個の柱穴で、柱根の痕跡が確認できたものは3個を数える。内部に石を包蔵したものはみられなかった。

掘立柱建物跡を構成する柱穴内から、遺物の出土はなかった。

溝

調査区内において13条検出した。旧地形の傾斜を反映して北西から南東へと延びてゆくもの(S D01・04・05・09・12)と、それに直交する形で検出されたもの(S D02・03・06・07・08・11)に分れる。いずれも小規模であり、他の遺構との関係が明確なものや、用途が判断できたものはなかった。

また、遺物が出土した遺構も少ない。S D04の埋土中から、須恵器の杯B(61)および小片の土器が数点出土したほか、S D06からは立ち上がりを有する須恵器の杯身(9)が出土した。S D12からは須恵器の蓋杯(5)と瓶(98)の破片が出土している。その他固化しえなかつたが、S D02・03・05からそれぞれ須恵器、土師器が出土している。いずれも細片で、時期や器種は特定できなかつた。

出土遺物から、S D06・12は古墳時代後期で竪穴住居跡とはほぼ同時期と考えられる。またS D04は奈良時代の遺構である。

表4 A区検出 溝 一覧表 (単位:m)

遺構名	全長	最大幅	深さ	断面形状	流路方向	出土遺物・備考
S D01	6.9	0.3	0.12	U字	→南東	
S D02	7.7	0.7	0.12	U字		細片
S D03	16.3	1.3	0.20	逆台形		細片
S D04	7.2	0.5	0.11	逆台形	→南東	須恵器:杯B(61)
S D05	4.7	0.4	0.13	U字	→南東	細片
S D06	13.1	0.5	0.05	U字	→東	須恵器:杯身(9)
S D07	6.7	0.7	0.07	U字		S D06に切られる
S D08	7.1	0.9	0.14	逆台形	→西	
S D09	5.0	0.46	0.07	U字	→南東	S K05に接続
S D10	10.4	0.5	0.15	U字	→北西	
S D11	5.7	0.4	0.10	逆台形	→北西	
S D12	21.0	0.6	0.26	U字	→南東	須恵器:杯蓋(5)、瓶(98)
S D13	2.6	0.4	0.10	U字	→南西	S D12に接続

土壙

調査区内では数多くの土壙が検出されたが、出土遺物も持たないもの・不整形や小規模なものが大半を占める。遺物の出土した遺構について、報告の対象とした。

遺物の出土があった土壙は11基を数え、他の遺構と同じく調査区の南部に集中する。いずれも性格を明らかにする証左は、調査では得られなかった。

また、複数時期にわたる遺物を内包した土壙もあり、後世の開発・削平に伴う投棄の結果生じた土壙が含まれている可能性もある。

S K01 (図版12・26・27・28・29)

調査区の東部端で検出された。南にS D01が近接し、北部では切り合いが生じている。またS B01の東7mに位置する。

北東の一部が調査区外へ出てしまうため一部不明な点を残すが、外形は鋭角の二等辺三角形に近い。長軸を東西方向にとる。長軸の全長は5.23m最大幅は西辺付近で1.82m、現存の最大深度は0.32mをそれぞれ測る。底面は中心に向かって擣り鉢状を呈する。

埋土は、茶褐色中砂～細砂を呈する。

数多くの遺物が出土した。いずれも床面からではなく、埋土内からの出土である。立ち上がりを有する杯身(11)、退化した宝珠ツマミ・環状ツマミを持つ杯蓋(27～29)と杯(37、40、49、69)などの須恵器、頂部にツマミを持つ蓋(21)、底部に高台を持つ杯(81～83)、壺(104、105、112、116)、鍋(115)などの土師器が見られた。遺物の比率は土師器が高い割合を占める。

古墳時代の遺物が僅かに混入しているが、大半が奈良時代後半～平安時代初頭にかけての遺物で占められている。

S K02 (図版12・28)

調査区の東部端で検出された。S B01から南東8mに位置し、北西の一部をS D01に切られている。南側にはS D02が、長軸方向と並行して存在する。

外形は長楕円形で、僅かにS字の屈曲が見られる。長軸の方向は北東へ向け、長軸全長は4.34m、直交する中心付近の幅は1.36m、現存の最大深度は0.25mをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦であった。

出土した遺物には、土師器壺の口縁部(103)などがある。

S K03 (図版10・26・27)

調査区の東部南寄りで検出された。S H01から南東へ5mに位置する。遺構の中央をS D04が南北に継続するほか、S B01とともに切り合い関係が生じている。

外形はL字を呈し、二つの楕円形が組み合わさったような形状を呈する。長軸は南北方向で全長3.31m、東西方向の最大幅は2.34m、現存の最大深度は0.13mをそれぞれ測る。屈曲部は、東縁から中央部へ2.21mの部分で、南幅は1.36mであった。遺存する深度が浅いことから、上面はある程度削平を受けたものと見られる。底面は東側の縁付近で若干深い部分を除けば、比較的平坦であった。

埋土は、茶褐色礫混じりシルト1層の堆積である。

遺構の埋土には須恵器を中心とした遺物が含まれていたが、出土量は寡少であった。杯(38、39、41)、壺(77)の底部などがある。

S K04・S K05 (図版11・26・27・28・29)

調査区中央部北寄りに位置する。調査区のなかでは最も標高の高い部分にあたり、周辺にはS D08・09・10などがある。二つの土壠は南北に並んで、溝によって接続しており、ヒョウタン形を呈する。S K05は北西でS D09と接続し、S K04も北東方向の調査区外へさらに広がって行く。

S K04は東西に長軸をとり長軸長3.80m、直交する中心付近の幅は2.80m、残存する最大深度0.30mをそれぞれ測る。一方のS K05は長軸を北にとり、長軸長5.20m、直交方向の幅4.60m、残存する最大深度は0.20mであった。床面はいずれも平坦で、僅かにS K05が深いものの両者の深度はほとんど同じであった。

特異的な形状は、遺構の性格を暗示している可能性が高い。溝によって接続され、シルト質の強い埋土

などから、水との関連もある程度は推測できる。しかし構造を裏づける要素がさらに看取されなかつたため、その性格を明らかにするには至らなかった。

埋土は、SK04では北側において黄褐色シルト・南側で淡灰褐色シルト質細砂の2層を確認した。また、SK05は淡黄褐色シルト質細砂・淡茶褐色シルトの上下2層によって構成される。

SK04からの出土遺物は、宝珠ツマミを持つ須恵器の杯蓋(12)、杯身(14・16)、扁平化が進んだツマミのある蓋(20・32)のほか、鉢などの小片も出土している。

SK05の遺物には、杯身(15・18、60・62・63)、平瓶(97)、甕(86・108)などがあった。

出土遺物の示す時期は古墳時代後葉と奈良時代後半～平安時代初頭の大きく2時期にわけられる。

SK06(図版11・27)

調査区のほぼ中央部で検出された。造構の南部を、東西方向に走るSD11によって切られている。SH02の北5m、SK09の北東7mに位置する。

外形は楕円形を呈するが、南部は造構の切り合い・削平によって失われている。付近は削平が著しく、この土壤もかなりの影響を受けたと考えられる。長軸は南北を指向し全長11.3m(検出部のみ)、東西方向の最大幅は5.80m、現存の最大深度は0.12mをそれぞれ測る。床面は平坦で、周壁は底面から上方へ緩やかに立ち上がる。

埋土は、淡灰褐色シルト質細砂がわずかに堆積していた。遺存状況から見て検出部分は底面に近く、本来は上部の堆積があったものと思われる。

造構の遺存状況から比較すれば出土遺物は多く、杯(54～57)を中心に須恵器の破片が出土した。

SK07(図版11・27・28)

調査区のほぼ中央部で検出された。造構内の2ヶ所を後世のピットによって切られているほかに、他の造構との切り合い関係は見られない。SK06から南東へ6mにあり、SD05のが南端が近接する。他の造構ではSH02が西3mに位置する。

隅丸長方形の一部が飛び出したような外形を呈する。南縁の東3分の1が外方へと突出する。長軸を東西に向け全長2.22m、南北方向は突出部も含めた最大幅1.38m、突出の持たない西部で1.10mをそれぞれ測る。深さは0.14mで床面は平坦であった。周壁は底面から上方へ向けて緩やかに立ち上がる。

造構の埋土は、黄褐色シルト質細砂のみで構成されている。

出土遺物はいずれも埋土に含まれており、杯(50)、横瓶(87)などがある。

SK08(図版12・27)

調査区の中央部南側で検出された。SK10の東6mに位置し、北にはSD07が東西に走る。南は1mで調査区端に達する。他の造構との切り合い関係は見られない。

平面は精美な小判形を呈する。長軸は東西方向で全長19.8m、直交する中心部分の幅は0.63m、中心部での深度0.45mをそれぞれ測る。底面は平坦で周壁は底面から斜め上方へまっすぐに立ち上がる。

造構から出土した遺物は少なく、須恵器の杯(53・59)の2点だけが見られた。

S K08 (図版12・26・27)

調査区のほぼ中央で検出された。S B03の北6mに位置する。南肩を4つのピットによって切られている以外に、他の遺構との切り合い関係は見られない。

外形は不整な半円形で、「凹」字に類似した形状を呈する。長軸は東西方向で全長3.41m、南北方向は直交する中心付近で2.00m、現存の最大深度は0.17mをそれぞれ測る。左右それぞれの屈曲部における南北幅は、左2.56m・右2.24mであった。遺存する深度が浅いことから、上面はある程度削平を受けたものと見られる。底面は東側の縁付近で若干深い部分を除けば、比較的平坦であった。

埋土は、中央部に黄褐色シルト質細砂が堆積している。また北西の縁辺部付近には淡灰褐色シルト質細砂が見られた。

遺構の埋土からは、土師器の蓋(34)、須恵器蓋(35)および杯身(58)などが出土した。

S K10 (図版12・28)

調査区南西部で検出された。S B03の南7mにあり、東6mの地点にはS K08が存在する。他の遺構との切り合いは認められなかった。

外形は楕円形で、北側がやや尖り気味となる。長軸は東西方向で全長3.92m、南北方向の最大幅は中心よりやや南寄りで1.48mをそれぞれ測る。深度はそれぞれの縁付近で0.72mと、非常に浅い。上面は削平による影響がかなり大きいことを窺わせる。底面は南部が大きく掘りくぼまれ、この部分における最大深度は0.64mであった。

遺構の埋土には須恵器を中心とする遺物が含まれていたが、図化できた出土遺物は蓋(30)の1点だけであった。

S K11 (図版12・26)

調査区の中央部南側で検出された。S K09の南西8mに位置し、S B02と切り合い関係を持ち、南周壁溝の中央を破壊している。

平面形は精良な小判形を呈する小型の土壙で、長軸は東西方向で全長1.10m、直交する中心部分の幅は0.74m、中心部での深度0.48mをそれぞれ測る。底面中央には、もう一段ピット状の窪みを持つ。

出土した遺物は少ないが、埋土内から内面にカエリを持つ須恵器の杯蓋(13)があることから、住居跡に後出するものの、大きくは隔たらない時期に構築されたと考えられる。

どの遺構も、遺存状態の良好な資料の出土は少ない。存在時期を判断するのは、(性格と同様)容易ではないが、出土遺物の示す年代はほぼ单一である。2時期の遺物が混在するS K01・04・05を除き、S K01・11は古墳時代、S K02・03・06~10は奈良時代それぞれ比定できる。

第3節 B地区の調査

全体の概況

田井野遺跡は南西方向へ開析する谷を隔てて、西側の地区と東側の地区に大別できる。B地区はそのうち東側の地区にあり、西側のA地区とは谷をはさんで対面に位置している。調査は平成3年度に実施され、面積は2,133.8m²である。

調査前の一帯は、丘陵斜面を水平に段切りして設けられた水田であった。もともとの地形は特に急傾斜であるということはないが、後世の水田開発の際に1筆あたりの面積を増やす努力をかなり行っている。具体的には山側を大きく削り、谷側の盛りを多くすることである。遺構は、この山側を削るという行為によって、大きく削平を受けている。遺構検出面において、なお1m近い段差の残る箇所もみられた。検出面直上の遺物包含層は非常に薄く、出土遺物も少ない。

調査区には6筆の水田が存在している関係で、遺構検出面のレベルにはそれぞれ差が認められる。ただし、大まかには上・中・下の3段に大別される。

上段は比較的削平の度合いが大きく、遺構の検出された密度は低い。遺構の分布には、ばらつきは見られない。土壌・溝・ビットが検出されているが、検出したビットで掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

中段は当調査区内では最も遺構の密度が高い。特に中央部では土壌・柱穴が集中して検出され、削平の影響は比較的少ない。土壌・溝・ビットを検出しておらず、これらのビットから掘立柱建物跡3棟を復元している。

下段は中段とのレベル差が最大で1.5mを測り、削平の影響が非常に大きい。東側の南端でビットを1基検出したのみである。

遺物は面積に比して非常に少ないが、須恵器を主体とした奈良時代のものが大半を占めている。

掘立柱建物跡

当調査区において確認できた建物は3棟である。他の遺構と同様に調査区の中段で検出されている。遺構の遺存状況は、水田開発時の削平の影響を受けているよう上面が削られていると思われる。掘立柱建物跡は中段のほぼ中央部で検出しており、北からS B06・07・08とした。このうち、S B06と07は棟軸方向を同じくするものであるが、S B08のみがその方向をやや西側に振っている。これらの3棟は近接して検出されており、同時に存在していたことは考えられないが、柱穴内から遺物が出土していないため先後関係は不明である。大まかな時期は、総柱でないこと、柱穴の規模が比較的大きいことなどから奈良時代のものである可能性が高い。

ビットはS B06の北側に集中して検出され、また中段の南東隅で比較的まとまって検出されているが、掘立柱建物跡として復元できるものはなかった。上段、下段では検出されたビットの数が少なく、また疎らなため、ここでも掘立柱建物跡として復元できるものはなかった。

S B06 (図版14)

調査区の中段の北側に位置する。3棟のうち最も北にあり、S B07の北1mで検出された。

梁2間×桁2間の長方形で、規模は梁間2.75m・桁行3.00mをそれぞれ測る。床面積は8.25m²である。

長軸はN-10°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、平均で1.38m、桁行の柱間距離は、平均で1.46mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円形あるいは楕円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は35~60cmで、そのなかでも4隅の柱穴の掘り方の規模が大きい傾向にある。深さは15~30cmであるが、4隅の柱穴以外の4柱穴は比較的浅い傾向にある。

構成する8個の柱穴すべてに柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は20~30cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

S B 07 (図版14)

調査区の中段の北側に位置する。3棟のうち北から2番目にあたり、S B 06の南1mで検出されているが、真南に位置しているわけではなく、当遺構の方が西側に所在する。S B 06の西側柱穴列とS B 07の東側柱穴列がちょうど一直線に並んで検出されている。

梁2間×桁2間の正方形であるが、やや歪な平面形を呈しており、北西隅の柱穴がやや突出して検出されている。規模は梁間3.00m・桁行3.00mをそれぞれ測る。床面積は9.05m²である。長軸はN-10°-Wを指向しておりS B 06と全く同じ方向である。梁間の柱間距離は、平均で1.50m、桁行の柱間距離は、平均で1.50mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円形あるいは楕円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は40~60cmである。深さは15~30cmであるが、4隅の柱穴以外の4柱穴は比較的浅い傾向にある。

構成する8個の柱穴のうち6つの柱穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は20~30cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

S B 08 (図版15)

調査区の中段の中央部に位置する。3棟のうち最も南にあり、S B 07の南約2mで検出された。

梁2間×桁2間の長方形であるが、南側柱穴列の第2穴を欠失している。規模は梁間3.50m・桁行3.60mをそれぞれ測るが、南側の梁間が狭く3.25mである。床面積は12.1m²である。長軸はS B 06・07とはやや方向を違え、N-22°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、平均で1.75m、桁行の柱間距離は、平均で1.80mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は40~55cmで比較的よく揃っている。深さは15~40cmであるが、西側にしたがって削平が大きく柱穴の底部のみが残存しているのみである。

構成する7個の柱穴すべてに柱根の痕跡を確認できた。一方、内部から石が検出されたものは、南西隅の柱穴を除いた6個の柱穴である。ただ、南西隅の柱穴はその底部のみが残存しているのみの状況であるためその有無の確認は得られない。この石は柱根を囲んで積まれているものもあり、根がらみの役割を果たしていたものと考えられる。柱根の直径は15~30cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

土壤

調査区内では土壤はその多くを中段で検出している。中段での遺構の分布は、掘立柱建物跡群より東側、南側で比較的多くみられる。これは、削平の度合いが影響しているものと思われる。

当地区から出土した遺物の量は少なく、土壤からの出土は認められなかった。従って、これらの時期あるいは性格については明らかではないが、土壤の塊土が基本的には柱穴、ピット群と共にものであることから、奈良時代のものである可能性が考えられる。

S K12 (図版16)

調査区の北端で検出された。上段で検出されたもので、遺構は全体を検出することができなかつた。

調査区外に伸びている。

北東部が調査区外へ出てしまうため平面形状は不明な点が多い。全体として、北側は丸みを帯び、南側は直線的な傾向を示している。南側はさらに、底部が一段下がっており、2つの遺構が重複している可能性がある。長軸の方向は北東一南西へ向け、長軸全長は3.24m、最大幅は1.12m、現存の最大深度は0.38mである。

埋土は3層の堆積が認められる。下層に暗灰色細砂～極細砂混じりシルト、上層に暗褐色極細砂質シルトが堆積し、これらを切って褐色極細砂混じりシルトが堆積している。

S K13 (図版16)

調査区の上段で検出されたもので、S K12の南西約14mに位置している。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は長楕円形を指向していると思われるが、方形に近くやや隅円状である。長軸の方向は東一西へ向け、長軸全長は1.53m、最大幅は0.68m、現存の最大深度は0.09mを測る。断面形は皿状を呈しており浅く、かなりの削平を受けているようである。

埋土は1層のみが認められる。淡黄褐色の細砂混じり極細砂質シルトが堆積している。

S K14 (図版16)

調査区の中段で検出され、西端に位置している。S K24の西約10mに位置している。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は長楕円形を指向していると思われるが、方形に近くやや隅円状である。南片の一部が屈曲して検出されている。長軸の方向は北東一南西へ向け、長軸全長は1.97m、最大幅は0.79m、現存の最大深度は0.28mを測る。断面形はU字状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。淡褐色の小礫混じり極細砂質シルトが堆積している。

S K15 (図版16)

調査区の中段の北側で検出された。掘立柱建物跡であるS B06の東側で近接して検出されたが、切り合いは認められない。遺構は全体を検出することができた。

平面形状は長楕円形を指向していると思われるが、北側の端部が張り出した形状を呈している。長軸の方向は東北東一西南西へ向け、長軸全長は1.81m、最大幅は0.97m、現存の最大深度は0.18mを測る。

断面形は南側が深い形状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。淡褐色の極細砂質シルトが堆積している。

S K16 (図版16)

調査区の中段の中央部で検出された。据立柱建物跡であるS B06の南東、S K15の南約4.5mに位置している。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は長楕円形を指向しているが、中央部の幅がせまく、両端部が膨らんだ形状を呈する。長軸の方向は東北東-西南西へ向け、長軸全長は2.18m、最大幅は0.75m、現存の最大深度は0.15mを測る。断面形はU字状を呈している。

埋土は2層のみが認められる。灰黄色の極細砂質シルトを基本として、一部で灰色の極細砂質シルトが堆積している。当遺構は灰色系の埋土が堆積しており、他の土壤が灰褐色あるいは褐色系の土層が堆積しているのとは違いが認められる。

S K17 (図版16)

調査区の中段の中央部で検出された。据立柱建物跡であるS B07の南東、S K16の南西約5mに位置している。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は長楕円形を指向していると思われる。長軸の方向は北東-南西へ向け、長軸全長は2.37m、最大幅は0.97m、現存の最大深度は0.21mを測る。断面形は浅いU字形を呈している。

埋土は1層のみが認められる。直径1~3cmの砾を含む、淡褐色の極細砂が堆積している。

S K18 (図版16)

調査区の中段の中央部東側で検出された。S K17の東約11mに位置している。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は長楕円形を指向していると思われるが、屈曲しており、不整形に近い。長軸の方向は東-西へ向け、長軸全長は1.81m、最大幅は0.83m、現存の最大深度は0.20mを測る。断面形はU字形を呈しているが、上部が削平されている印象を受ける。

埋土は1層のみが認められる。褐色の極細砂混じりシルトが堆積している。

S K19 (図版16)

調査区の中段の南東部で検出された。S K18の南東約5.5mに位置する。S K19~21の3基は比較的近くして検出されており、そのなかで最も東側に位置している。遺構は全体を検出することができたが、ピットと重複して検出されている。

平面形状は楕円形を指向していると思われるが、やや歪である。北東部はピットに切られている。長軸の方向は東-西へ向け、長軸全長は1.92m、最大幅は1.00m、現存の最大深度は0.21mを測る。断面形は皿状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。淡褐色のシルト質極細砂が堆積している。

S K20 (図版17)

調査区の中段の南東部で検出された。S K19の南西約2mに位置する。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は不整形であるが長細い形状を示す。長軸の方向は東北東－西南西へ向け、東北東側が若干広く緩傾斜で、西南西側が狭く傾斜が急である。長軸全長は2.13m、最大幅は0.83m、現存の最大深度は0.19mを測る。断面形は浅いU字状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。淡灰褐色のシルト質極細砂が堆積している。

S K21 (図版17)

調査区の中段の南東部で検出された。S K19の西約3mに位置する。遺構は全体を検出することができ、ピットと重複して検出されている。

平面形状は不整形ぎみであるが、梢円形を指向しているようである。長軸の方向は東－西へ向け、長軸全長は1.60m、最大幅は0.94m、現存の最大深度は0.15mを測る。断面形は浅いU字状を呈している。北西部でピットと重複して検出されており、これに切られている。

埋土は1層のみが認められる。淡褐色の細砂混じりシルト質極細砂が堆積している。

S K22 (図版17)

調査区の中段の中央部で検出された。S K21の西北西約5mに位置する。遺構は全体を検出することができ、ごく浅い溝状の遺構と近接して検出されているが、切り合い関係は認められない。

平面形状は不整形であるが、西北西側がややひろがっている。長軸の方向は東南東－西北西へ向け、長軸全長は1.82m、最大幅は0.95m、現存の最大深度は0.23mを測る。断面形は浅いV字状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。直径3～10cmの礫を含む、褐灰色の極細砂が堆積している。

S K23 (図版17)

調査区の中段の南東部で検出された。S K22の南南東約8mに位置する。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合い関係は認められない。

平面形状は不整形であるが、梢円形を指向しているようである。底部は西側部分でさらに一段下がっている。長軸の方向は東－西へ向け、長軸全長は1.53m、最大幅は1.03m、現存の最大深度は0.25mを測る。断面形はテラス部分は浅い皿状、下がった部分はU字状を呈している。

埋土は1層のみが認められる。直径3～5mmの礫を含む淡褐色のシルト質極細砂が堆積している。

S K24 (図版17)

調査区の中段の中央部南側で検出された。掘立柱建物跡であるS B08の南、S K25の北に近接して位置しているが切り合い関係は認められない。遺構は全体を検出することができた。

平面形状は不整形で溝状を呈し、中途で「く」字状に屈曲している。長軸の方向は、ほぼ東－西へ向け、長軸全長は5.35m、最大幅は1.32mと当地区の土壙のなかでは最も規模が大きい。現存の最大深度は0.23mを測り規模に比して浅い。断面形は皿状を呈する。

埋土は2層が認められる。上層に褐色極細砂質シルト、下層に直径3~5cmの礫を含む、灰色の細砂混じりシルト質極細砂が堆積している。

S K25 (図版17)

調査区の中段の中央部南側で検出された。S K24の南に近接して位置している。遺構は全体を検出することができた。

平面形状は不整形であるが底部は楕円形を呈している。長軸の方向は、北東~南西へ向け、長軸全長は1.44m、最大幅は0.94m、現存の最大深度は0.27mを測る。断面形は浅いU字状を呈する。

埋土は1層のみが認められる。直径3~10cmの礫を含む灰褐色のシルト質極細砂が堆積している。

S K26 (図版17)

調査区の中段の中央部南端で検出された。S K25の南約5.5mに位置している。当遺構以南は1.2m程度削平され、下段に至る。遺構は南側の一部を削平で欠失しているが、ほぼ全体を検出することができた。

平面形状は不整形であるが底部は楕円形を呈している。長軸の方向は、北北東~南南西へ向け、長軸全長は1.40m、最大幅は1.05m、現存の最大深度は0.35mを測る。断面形はU字状を呈する。

埋土は1層のみが認められる。直径10cm以上の礫を含む褐色のシルト質極細砂が堆積している。

S K27 (図版17)

調査区の上段の北東部で検出された。S K12の南東約16mに位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

平面形状は不整形である。長軸の方向は、ほぼ東~西へ向け、長軸全長は1.23m、最大幅は0.67m、現存の最大深度は0.21mを測る。断面形は浅いU字状を呈する。

埋土は1層のみが認められる。褐灰色の細砂混じり極細砂質シルトが堆積している。

ピット

当地区の主に中段で比較的多く検出されている。大半が柱穴となるものであると考えられるが、掘立柱建物跡として復元できるものは少ない。そのなかで遺物の出土したものを、P 4、P 5とした。

P 4

中段の中央部北壁で検出している。水田の溝のため、北側の一部が削平されているが、直径が45cmのものである。柱痕の直径は18cmを測り、掘り方の深さは26cmである。遺物は掘り方内埋土から出土した。須恵器の高杯の脚部(95)で端部は欠失している。

P 5

中段の南東端で検出している。直径が30cmのものである。柱痕の直径は10cmを測り、掘り方の深さは15cmである。遺物は掘り方内埋土から出土した。須恵器の杯身(19)で、蓋の可能性も考えられる。

この他に包含層から出土した遺物のうち73の須恵器の杯と114の土師器の甕を図化している。図化していないものには、須恵器の甕、土師器の甕などがある。量としては須恵器が多い。

第4節 C地区の調査

全体の概況

田井野遺跡は南西方向へ開析する谷を隔てて、西側の地区と東側の地区に大別できる。C地区はそのうち東側の地区に所在する。両脇のB・D地区とは農道により便宜的に区別しているに過ぎない。調査は平成3年度に実施され、面積は1,585.5m²である。

調査前の一帯は、丘陵斜面を水平に段切りして設けられた水田であった。もともとの地形は特に急傾斜であるということはないが、後世の水田開発の際に1筆あたりの面積を増やす努力をかなり行っている。具体的には山側を大きく削り、谷側の盛りを多くすることである。遺構は、この山側を削るという行為によって、大きく削平を受けている。当調査区について言えば、上段と下段の間において大きな削平が行われており、両者には最大で90cmを測る。検出面直上の遺物包含層は非常に薄く、出土遺物も希薄であった。

調査区には4筆の水田が存在している関係で、遺構検出面のレベルにはそれぞれ差が認められる。ただし、大まかには上・中・下の3段に大別される。

上・中段は比較的削平の度合いが小さく、検出された遺構の大半はこの上段からのものである。上段は三角形の小さい面積、中段は当地区で最大の面積をもつ。上段と中段の検出面のレベル差は少ない。土壠・溝・ピットが検出されており、ピットから掘立柱建物跡を6棟復元することができた。

下段は削平の影響を受けており、遺構の密度は低い。特に、ピット類の検出がみられず、主に土壠を主体としている。検出した土壠も、その底部のみが残存しているといった印象が強い。ただし、南側に従って残存状況は好転している。

遺物は面積に比して非常に少ないが、須恵器を主体とした奈良時代のものが大半を占めている。

掘立柱建物跡

当調査区において確認できた建物は6棟である。他の多くの遺構と同様に調査区の中段で検出されている。中段は現農業用水路をはさんで上段と区別されている。掘立柱建物跡は6棟とも中段で検出している。

掘立柱建物跡は中段のうちでも中央部以北で5棟を検出しており、西から順にSB09~14とした。このうち、SB09と14はそれぞれ単独で検出されている。SB10と11は中央部で、SB12と13は東部で、重複あるいは近接して検出されている。SB14の1棟のみが、他の掘立柱建物跡と離れて検出されている。柱穴内から遺物の出土がないため、先後関係は明らかではない。大まかな時期は、包含層出土の土器や他の遺構から出土した土器から考えて奈良時代のものではないかと考えている。

上段でもピットは多数検出しているが、掘立柱建物跡として復元されたものはなかった。

SB09(図版15)

調査区の上段の西部に位置する。6棟のうち最も西にあり、SB11の南西10mで検出された。

梁2間×桁1間の長方形で、規模は梁間2.80m・桁行3.40mをそれぞれ測る。床面積は9.55m²である。長軸はN-16°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、平均で1.41m、桁行の柱間距離は、平均で3.42mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円形あるいは楕円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は35~55cmである。深さは30~40cmである。

構成する6個の柱穴のうち、5穴で柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は15~25cmを測る。

当遺構の北側で溝状の造構を検出している。北側柱穴列に沿って掘削されており、北東隅の柱穴部分で屈曲して南下している。この溝状の造構は柱穴を意識して掘削されており、重複することはない。地形は北から南に傾斜しており、水の排除を目的とした溝と考えられる。

P 3から土師器の甕が出土しているが、小片のため図化はできなかった。

S B10 (図版19・27・29)

調査区の中段の中央部に位置する。S B11と南側の一部を重複して検出されている。

梁1間×桁3間の長方形で、細長い建物である。東側の柱穴列は直線的に通っているが、西側のものは、北側からの第2、3穴が外側に膨らんで、直線的とはいえない。規模は梁間2.50m・桁行5.55mを測る。床面積は13.9m²である。長軸は、ほぼ北を指向しており、これはS B12と全く同じ方向である。梁間の柱間距離は、平均で2.50m、桁行の柱間距離は、平均で1.83mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は20~30cmである。深さは7~25cmであるが、北側のものが浅い傾向にある。

構成する8個の柱穴のうち2つの柱穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は10~15cmを測る。

P 6より須恵器の椀(80)と鉄製の刀子(F 2)が出土している。平安時代前期のものと考えている。P 3からは土師器の甕が出土しているが小片ため図化していない。

S B11 (図版19)

調査区の中段の中央部に位置する。S B10と北側の一部を重複して検出されている。

梁1間×桁3間の長方形である。西側柱穴列が比較的通りがよいのに対して、東側柱穴列はP 2・3が内側に入っている。規模は梁間3.18m・桁行4.55mをそれぞれ測る。床面積は14.5m²である。長軸はS B10とは方向を違え、N-16°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、平均で3.20m、桁行の柱間距離は、平均で4.60mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。直径は20~50cmで個別の差が大きい。深さは10~20cmであるが、かなりの削平を受けているようである。

構成する8個の柱穴のうち、6穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は10~30cmを測り、特にP 1が小さいのが目につく。

獨立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

S B12 (図版20)

調査区の中段の東部に位置する。S B13と近接して検出されたが、切り合は認められない。

梁2間×桁3間の長方形である。南側の梁の中間柱を欠いている。規模は梁間4.20m・桁行5.35mをそれぞれ測る。床面積は22.5m²である。長軸はS B13とは方向を違え、ほぼ北方向を指向し、S B10と同一の方向である。梁間の柱間距離は、平均で2.10m、桁行の柱間距離は、平均で1.80mである。

柱穴掘り方の形状はおおむね円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は

40~50cmで比較的揃っている。深さは7~20cmであるが、かなりの削平を受けているようである。

構成する9個の柱穴のうち、6穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は15~30cmを測る。

P2の掘り方内から須恵器の蓋と高台の付くタイプの杯が出土している。ごく小片であるため図化は出来なかったが、いずれも奈良時代のものである。

S B13 (図版20)

調査区の中段の東部に位置する。S B12の南東部に近接して検出されたが、切り合い関係は認められない。

梁1間×桁2間の正方形に近い建物である。建物跡の中心部に柱穴を1穴検出している。他の掘立柱建物跡はないものであるが、当造構に関連しているものとする。規模は梁間3.40m・桁行3.40mをそれぞれ測る。床面積は11.6m²である。長軸はS B12とは方向を違え、N-6°-Eを指向する。梁間の柱間距離は、平均で3.35m、桁行の柱間距離は、平均で1.74mである。

柱穴掘り方の形状はおむね円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は30~45cmで比較的小さいものである。深さは7~12cmとかなりの削平を受けているようである。

構成する7個の柱穴のうち、4穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は15~20cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

S B14 (図版21)

調査区の中段の南端に位置する。上段で検出された掘立柱建物群とは離れて位置している。上段と下段の境界部にあり、S B13の南約15mに位置しているが、造構は残りが悪く、全体を検出しているわけではない。造構の大半は水田開発の削平によって失われている。他の造構との切り合い関係は認められない。

梁2間の建物である。桁方向は東側で半うして1間分が残存しているのみである。規模は梁間2.95m・桁行は残存長で2.25mである。長軸はS B12とは方向を違え、N-15°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、平均で1.48m、桁行の柱間距離は、2.00mである。

柱穴掘り方の形状はおむね円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は30~45cmで比較的揃っている。深さは10~30cmであるが、梁の3穴は25~30cmの深さを持っている。P2のみが10cmと浅い。

出土した4個の柱穴のうち、3穴に柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は15~25cmを測る。

P3の掘り方内より土器が出土している。土師器の甕と思われるが小片のため図化はできなかった。外面に縦方向の細かいハケ、内面にナデが観察され、古墳時代のものである可能性も考えられる。

土壤

調査区内の土壤は比較的均等に分布している。しかし、削平の影響を受けていることは否定できず、山側には少ない。

土壤内から出土した遺物は、量として多いとは言えない。また小片のものがほとんどで図化したもののが限られている。奈良時代の須恵器の出土が多いようである。

S K28 (図版21)

調査区の上段の北端で検出された。調査区境に位置しているため、遺構は全体を検出することができなかった。調査区外北側に伸びている。柱穴と重複して検出された。

遺構が調査区外へ出てしまうため平面形状は不明な点が多いが不整形を呈している。北側の調査区境付近では土壠底が10cm程度下がり、南側はテラス状を呈する。2つの遺構が重複している可能性も考えられる。長軸方向は、ほぼ南一北方向へ向け、長軸検出長は4.40m、最大幅は2.86m、現存の最大深度は0.28mである。

埋土は2層の堆積が認められる。黄灰色の土器を包含する中細砂、上層に灰褐色の土器を包含する中砂～極細砂が堆積している。

出土した遺物は小片のため団化していないが、須恵器が出土している。器種としては杯・甕などで、杯の底部の形態から奈良時代後半から平安時代にかけてのものと考えられる。

S K29 (図版21)

調査区の中段の西端で検出された。調査区境に位置しているため、遺構は全体を検出することができなかった。遺構は調査区外西側に伸びている。他の遺構と切り合い関係が認められ、S K30と重複して検出されており、これを切っている。

遺構が調査区外へ出てしまうため平面形状は不明な点が多いが、検出した範囲内では梢円形を指向しているようである。長軸の方向は北東一南西へ向け、長軸全長は1.30m、最大幅は1.50m、現存の最大深度は0.13mを測る。断面形は皿状を呈しており、平面規模に比して浅い。

埋土は基本的に1層の堆積で、黄灰色の膠泥じり中砂～細砂質シルトが堆積している。

出土した遺物は小片のため団化していないが、近世の陶磁器、中世の擂鉢、奈良時代の杯、土器器片があり、時期差が著しい。

S K30 (図版21・26)

調査区の中段の西端で検出された。調査区境に位置しているため、遺構は全体を検出することができなかった。遺構は調査区外西側に伸びている。他の遺構と切り合い関係が認められ、S K29と重複して検出されており、これに切られている。

遺構が調査区外へ出てしまうため平面形状は不明な点が多いが、検出した範囲内では梢円形を指向しているようである。長軸の方向は北一南へ向け、長軸全長は2.68m、最大幅は検出した範囲内では1.79m、現存の最大深度は0.13mを測る。断面形は皿状を呈しており、平面規模に比して浅い。

埋土は3層が認められるが、黄褐色の細砂～極細砂を基本としている。

出土した遺物は須恵器の杯(42)がある。この他のものは小片のため団化していないが、須恵器の甕、土器器片の甕が出土している。時期としては奈良時代のものと思われる。

S K31 (図版22)

調査区の上段の南部で検出された。遺構は全体を検出することができ、他の遺構との切り合い関係は認められない。

平面形は梢円形を呈している。長軸の方向は北北西一南南東へ向け、長軸全長は1.01m、最大幅は0.67

m、現存の最大深度は0.18mを測る。

埋土は1層が認められる。暗褐色灰色の粗砂～細砂が堆積している。

出土した遺物は小片のため固化していないが、須恵器の蓋が出土している。奈良時代のものと考えられる。

S K32 (図版22)

調査区の中段で検出され、西側に位置している。S K30の南東約7mに位置している。遺構は全体を検出することができたが、S B09と重複して検出されている。切り合い関係はなく、先後関係は明らかではない。

平面形状は楕円形を呈している。長軸の方向は東～西へ向け、長軸全長は1.07m、最大幅は0.67m、現存の最大深度は0.15mを測る。断面形は浅いU字状を呈している。

埋土は2層が認められる。下層に暗褐色の土器・炭化物を含む細砂～極細砂が、上層に灰白色の灰層が堆積している。

褐色の小礫混じり極細砂質シルトが堆積している。

出土した遺物は小片のため固化していないが、土師器の甕と須恵器の蓋が出土している。土師器の甕は内外面とともにハケが観察される。奈良時代のものと考えられる。

S K33 (図版22)

調査区の中段で検出され、西側に位置している。S K32の西約3.5mに位置している。遺構は全体を検出することができた。柱穴と重複して検出されているが、先後関係は明らかではない。

平面形状は不整形を呈している。長軸の方向は北～南へ向けている。長軸全長は1.57m、最大幅は1.21m、現存の最大深度は0.20mを測る。断面形は皿状を呈している。

埋土は1層が認められる。土器を包含する暗褐色灰色の細砂～極細砂が堆積している。

出土した遺物は小片のため固化していないが、須恵器の蓋と甕、土師器の破片が出土している。須恵器の蓋は7世紀の初頭のもであると考えている。

S K34 (図版22)

調査区の中段の南部で検出されている。S K33の南東約10mに位置している。遺構は全体を検出することができた。柱穴と重複して検出されており、これに切られている。

平面形状は不整形を呈している。長軸の方向は東北東～西南西へ向けている。長軸全長は2.18m、最大幅は0.95m、現存の最大深度は0.33mを測る。断面形はU地状を呈している。

埋土は基本的に1層が認められる。淡褐色灰色の砂礫層である。当遺構を切っているピット内は暗褐色の粗砂～細砂が堆積している。

遺物は出土していない。

S K35 (図版22)

調査区の中段の南部で検出されている。S K34の東南東約10mに位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は不整形を呈しているが楕円形を指向しているようである。長軸の方向は東一西へ向けている。長軸全長は1.73m、最大幅は1.07m、現存の最大深度は0.23mを測る。底部は2段の掘り込みがみられ、東側が深く、西側はテラス状になっている。両者の段差は約10cm程度である。断面形は東側の深い部分で浅いU字状を呈している。

埋土は2層が認められる。下層に暗褐色の粗砂～細砂が、上層に淡褐色の中細砂が堆積している。
遺物は出土していない。

S K36 (図版22・27)

調査区の中段の中央付近で検出されている。S B11の西に近接して位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は楕円形を呈している。長軸の方向は東一西へ向けている。長軸全長は0.71m、最大幅は0.68m、現存の最大深度は0.15mを測る。

埋土は1層が認められる。土器片、炭化物を包含する暗褐色の直径5cmの礫を含むシルト混じり細砂～極細砂が堆積している。

埋土内からは須恵器の甕・椀、土師器の甕などが出土しているが、固化しているのは79の須恵器の椀の1点のみである。平安時代前期のものと考えられる。

S K37 (図版22)

調査区の下段の中央付近で検出されている。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は短い溝状を呈している。底の深さは一定ではなく、南西側が一段低くなっている。両者のレベル差は約15cmである。長軸の方向は北東一南西へ向けている。長軸全長は2.18m、最大幅は0.77m、現存の最大深度は0.30mを測る。

埋土は1層が認められる。礫を含む茶灰色の細砂混じりシルトが堆積している。
遺物は出土していない。

S K38 (図版22)

調査区の下段の中央北部で検出されている。S K37の北約7mに位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は不整形の楕円形を呈している。長軸の方向は東一西へ向けている。長軸全長は0.95m、最大幅は0.58m、現存の最大深度は0.08mを測る。断面形は浅い皿状を呈している。当遺構は中段と下段の段差に最も近いため、かなりの削平を受けているものと思われる。

埋土は1層が認められる。暗褐色の極細砂が堆積している。
遺物は出土していない。

S K39 (図版22)

調査区の下段の中央部で検出されている。S K37の南約3mに位置している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は不整形を呈している。長軸の方向は東一西へ向けている。長軸全長は0.81m、最大幅は0.69m、現存の最大深度は0.20mを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋土は1層が認められる。直径3cm以下の礫を含む、暗茶褐色の粗砂～中砂が堆積している。

遺物は出土していない。

S K40 (図版22)

調査区の下段の南西部で検出されている。S K39の西約7mに位置している。遺構は全体を検出することができたが、現在の水田の境界にあるため、南側が一部削平され、検出した平面形に影響がみられる。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は隅円の方形を指向しているようである。長軸の方向は北東一南西へ向けている。長軸全長は1.44m、最大幅は1.16m、現存の最大深度は0.35mを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋土は2層が認められる。下層に暗茶褐色の中砂～極細砂質シルト、上層に直径5cm以下の礫を含む、茶褐色の細砂混じりシルトが堆積している。

遺物は出土していない。

S K41 (図版22・28)

調査区の下段の東南部で検出されている。S K40の東南東約13mに位置している。遺構は全体を検出することができたが、現在の水田の境界にあるため、南側が削平されている。その範囲は半分を越えていくと思われる。他の遺構との切り合いは認められない。

平面形状は削平のため明らかではないが、橢円形を指向していたようである。長軸の方向は北一南にとっていたようである。長軸残存長は0.73m、最大幅は1.29m、現存の最大深度は0.35mを測る。断面形は逆台形を呈する。

埋土は2層が認められる。下層に直径5cm以下の礫を含む、暗茶褐色の中砂～極細砂質シルト、上層に直径3cm以下の礫・土器片を含む、茶褐色の細砂～中砂混じりシルトが堆積している。

土器のみが出土している。須恵器の杯、土師器片などが出土しており、そのうち8個の須恵器の杯を図化している。

ピット

当地区の主に上・中段で検出されている。大半が柱穴となるものであると考えられるが、前述した5棟以外に掘立柱建物跡として復元できるものはない。そのなかで遺物の出土したものを見るとP 6とした。

P 6

上段の南端で検出している。直径が60cmのものである。柱痕の直径は20cmを測り、掘り方の深さは24cmである。遺物は掘り方内埋土から出土した。須恵器の甕(109)が出土している。

この他に包含層から出土した遺物のうち70個の須恵器の杯と75個の須恵器の椀を図化している。図化していないものでは、須恵器の甕・杯・椀、土師器の甕などがある。時期としては奈良時代後半～平安時代初頭のものが多いが、古墳時代後期の須恵器も少なからずみられる。

第5節 D地区の調査

全体の概況

田井野遺跡は南西方向へ開析する谷を隔てて、西側の地区と東側の地区に大別できる。D地区はそのうち東側の地区に所在する。そのなかで最も東側に位置している地区である。調査は平成3年度に下段の部分を実施し、上段は翌年の平成4年度に実施した。面積は1,077.2m²である。

調査前の一帯は、他の地区と同様に、段切りして設けられた水田であった。D地区に限れば、下段にあたる部分の水田の削平がかなり大きい。具体的には遺構検出面のレベルで上段と下段の間には最大で1.2mの段差がみとめられる。検出面直上の遺物包含層は非常に薄く、特に下段の山側は耕土の直下に遺構検出面があり包含層は全く存在しない。出土した遺物も少ない。

調査区には2筆の水田が存在している関係で、遺構検出面のレベルにはそれぞれ差が認められる。呼び方として山側の水田にかかる部分を上段、谷側の水田にかかる部分を下段としている。

上段は比較的削平の度合いが小さく、検出された遺構の大半、遺物の大部分はこの上段からのものである。土壠・溝・ビットが検出されており、ビットから掘立柱建物跡を1棟復元することができた。

下段は削平の影響を大きく受けており、遺構の密度は低い。わずかに南端部で土壠を検出しているが、出土した遺物がないため、時期は明らかではない。

掘立柱建物跡

当調査区において確認できた建物は1棟である。他の多くの遺構と同様に調査区の上段で検出されている。ただし上段の南端で検出されているため段差により削平されている。

S B15(図版24)

調査区の上段の南東部に位置する。遺構は全体を検出することはできず、南側を欠いている。

検出した範囲では梁1間×桁2間の長方形で、規模は梁間2.50m・桁行3.10mをそれぞれ測る。床面積は検出した範囲で7.50m²である。長軸はN-35°-Wを指向する。梁間の柱間距離は、2.50m、桁行の柱間距離は、平均で1.93mである。

柱穴掘り方の形状はおむね円形あるいは楕円形を呈する。方形掘り方のものは認められなかった。掘り方の直径は30~55cmである。深さは25~35cmである。

構成する5個の柱穴のすべてに柱根の痕跡を確認できた。柱根の直径は20~25cmを測る。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、遺物は出土していない。

土壠

調査区内の土壠も圧倒的に上段で検出されたものが多い。下段は削平の影響が大きく、かろうじて南端で3基検出したにすぎない。

土壠内から出土した遺物は、量として多いとは言えない。また小片のものがほとんどで団化したものの数も限られている。奈良時代~平安時代にかけての須恵器の出土が多いようである。

S K42 (図版24)

調査区の上段の北西部で検出された。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

平面形状は長楕円形を呈している。長軸方向は、ほぼ北東—南西方向へ向け、長軸検出長は1.55m、最大幅は0.73m、断面の形状は浅いU字形を呈する。現存の最大深度は0.25mであるが、北東側は一段浅くテラス状である。

出土した遺物は当地区的ものとしては比較的多い。須恵器の蓋・甕、土師器の甕などが出土している。ただし、小片が多く図化しているのは94のみである。須恵器の短頸壺の蓋である。時期としては奈良時代のものである。

S K43 (図版24)

調査区の上段のほぼ中央部北よりで検出された。遺構は全体を検出することができた。他の遺構と切り合い関係は認められない。

検出面での平面形状は不整形を呈している。長軸の方向は北—南へ向け、長軸全長は1.48m、最大幅は0.84mである。現存の最大深度は0.14mと浅い。断面形は皿状を呈している。

遺物は出土していない。

S K44 (図版24)

調査区の上段のほぼ中央部で検出された。S K43の南約3.5mにあり、遺構は全体を検出することができた。他の遺構と切り合い関係は認められない。

検出面での平面形状は不整形を呈している。ただし、これはごく浅い部分での形状であり、全体としては円形を呈するものと考えられる。長軸の方向は北—南へ向け、長軸全長は0.80m、最大幅は0.72mである。現存の最大深度は0.75mと深い。断面形はU字形を呈している。

埋土中から須恵器の椀・蓋、土師器の甕、焼土など比較的多くの遺物が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。時期は須恵器の椀から平安時代初頭のものと思われる。

S K45 (図版24)

調査区の上段の北東隅で検出された。遺構は全体を検出することができた。南半部でビットと重複して検出されているが、先後関係は明らかではない。

検出面での平面形状は不整形を呈しているが長楕円形を指向しているようである。長軸の方向は北東—南西へ向け、長軸全長は2.00m、最大幅は0.89mである。現存の最大深度は0.18mと浅く、断面形は浅いU字形を呈している。

埋土中から須恵器の片が少量出土しているが、図化はできなかった。

S K46 (図版24)

調査区の上段の中央部で検出された。S K44の東約2mに位置し、遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

検出面での平面形状は椭円形を呈している。長軸の方向は東—西へ向け、長軸全長は1.08m、最大幅は

0.81mである。現存の最大深度は0.23mを測る。断面形は浅いU字形を呈している。

埋土中から須恵器の甕、土師器の甕、移動式のカマドの破片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。他には焼土塊が出土している。

S K47（図版24）

調査区の上段の中央部で検出された。S K46の西に近接している。遺構は全体を検出することができた。他の遺構との切り合い関係は認められない。

検出面での平面形状はやや歪ながら円形を呈している。長軸の方向は北—南へ向け、長軸全長は0.72m、幅は0.56mである。現存の最大深度は0.26mを測る。断面形はU字形を呈している。

埋土中から須恵器の甕など須恵器を主体として出土しているが小片のため図化できなかった。他には焼土塊が出土している。時期としては奈良時代末～平安時代初頭と考えている。

ピット

当地区の主に上段で検出されている。調査区全体に偏りなく検出されており大半が柱穴となるものであると考えられるが、S B15以外に規則性のある並びは見いだせず、掘立柱建物跡として復元できるものはなかった。そのなかで遺物の出土したものを見るとP 7～9とした。

P 7

上段の北西隅で検出している。直径が60cmのものである。深さは6cmと非常に浅いものである。埋土中から、土師器の甕が出土している。

P 8

上段の北西部で検出している。掘り方は楕円形で、長軸65cm、短軸40cmを測る。柱痕の直径は25cm、掘り方の深さは28cmを測る。遺物は掘り方の埋土中から須恵器の杯・甕などが出土している。小片のため図化していないが、古墳時代のものと考えている。

P 9

P 8の南東約2mに位置する。掘り方の直径は30cm、柱痕の直径は25cmで、掘り方の深さは16cmを測る。掘り方の埋土中から須恵器の長頸壺の肩部と土師器の甕の破片が出土している。

溝

上段で2条の、下段で1条の溝を検出している。そのうち上段の2条から少量であるが遺物が出土している。S D14・15とした。

S D14

北—南に方向をとる短い溝である。長さは5m、最大幅は40cm、深さは5cm程度と非常に浅いものである。須恵器の甕と杯の破片が出土しているが、小片のため図化はしていない。奈良時代の遺物と考えている。

S D15

北東—南西に方向をとる溝である。長さは17m、最大幅は1m、深さは10cm程度である。須恵器の破片が出土している。

第6節 出土遺物

全体の概況

調査面積と比較して、出土した遺物は少なかった。中でも東部の調査区（B・C・D地区）における遺物量が寡少で、後世の開発による影響が大きく現れている。各地区の主要遺物としては、A地区では須恵器（杯・蓋・甕・壺など）、土師器（壺・杯・蓋など）および鉄器（紡錘車）、B地区では須恵器（杯・高杯・甕など）と鉄器（刀子）、C地区では須恵器（杯・甕など）が、D地区では須恵器（杯・壺・甕・蓋など）がそれぞれ出土した。なお出土遺物には、残存した部位によって図化できなかった資料も少くない。

各地区ともに後世の削平によって包含層がほとんど遺存していなかったが、出土遺物もこれを反映している。報告する遺物は、一部の包含層出土を除いて大半が遺構からの出土である。

以下、それぞれの遺物について種別・器種ごとに分類して記述する。なお遺存状態が悪く反転復元した資料の一部は、あえて分類を避けている。

須恵器

a. 杯

古墳時代に該当するものと奈良時代に属するものに大別される。前者では、短小な立ち上がりを有する杯身と、宝珠ツマミ付きの蓋に対応する杯身が出土した。また後者は、高台の有無から2形態に大別される。

・杯H（6～11）

古墳時代の杯身である。いずれも内湾気味の短い立ち上がりを有している。遺存状態が悪く反転復元した個体もあるが、全体に口径も一致し形態的な特徴も類似している。

立ち上がりは、6のように口縁付近で外反気味に屈曲するものもあるが、大半は内湾したまま口縁へ達する。受部はほぼ水平に近い。

手法における特徴のうち、内面についてはいずれも回転ナデ調整を行い、中心部分で仕上げナデを施す。仕上げナデは、回転を止めて一方向にならせるものが多いが、10は底部内面の広範囲にわたって複数方向に施す。

底部付近はヘラ削りを施すものが多い。底部が残存するものはヘラ切りの痕跡をとどめ、中心付近までヘラ削りで調整したものは11のみであった。底部中央は、ヘラ切りを未調整のまま体部との境界付近のみをヘラ削り調整するもの（7）と回転ナデで調整するもの（8）がある。

・杯G（14～19）

宝珠ツマミを有する蓋に対応する。底部に高台を持たず、口径・器高とも小さい。形態は、比較的平坦な底部から体部に向かって丸みを持つが、17のように屈曲して体部との間に明瞭な境界をなすものがある。口縁端部はいずれも丸くおさめる。

手法の特徴は、内面が回転ナデによる調整を施す。内面の中央には仕上げナデとして一方向にならせるもの（19）と、回転ナデのまま未調整のもの（15・16）が見られた。底部外面は大半がヘラ切りの痕跡を明瞭に残し、粗い回転ナデによって調整する19以外は未調整。ヘラ切り痕跡がウズマキ状を呈し、クロ回転を利用して切り放す手法が大半であるが、19は底部中央にヘラ起こしの痕跡を残し途中で回転

を静止して切り放す。

・杯A (37~53)

底部に高台を持たない杯身で、底部と体部の境界がなく緩やかに広がる形態（a類）と、平坦な底部と体部の境界が明瞭で口縁部へ直線的にのびる形態（b類）に分類できる。a類はさらに口縁端部の形態から、I：そのまま上方を指向するもの・II：外反するものがある。

a-I類 (37~40・43・44・47~49) のうち、37・38は平坦な底部を有する。体部は内湾しながら開き、口縁付近で上方へと屈曲する。端部は丸くおさめる。また39・40・47は広い底部から、体部へわずかに内湾気味にのびる。39の口縁には、端部外面に強い横ナデが施され、屈曲気味となる。43・44も底部を欠くが残存部位の特徴は類似する。47は底部と体部の境界が丸いが、体部は急にたちあがる。48は口径に対して器高が大きく椀に分類すべき形態である。49は体部が内湾気味に大きく開く。いずれも端部は丸くおさめる。体部は内外面ともに回転ナデによる調整、底部は回転ヘラ切りの後に粗い回転ナデを施す。

a-II類 (50~51) は平坦な底部から斜め上方に聞く体部を持つ形態で、口径に対して器高が低く、やや扁平な印象を与える。50・51ともに口縁に向かって外反気味となる。52は、S字状にわずかに屈曲する口縁を持ち、端部は丸くおさめる。50・51は体部内外面が回転ナデ調整、底部外面は回転ヘラ切りの後にナデによって調整を行う。52は底部に糸切りの痕跡をとどめ、形態的にも後出する時期の遺物と考えられる。

b類 (41・42・45・46) はいずれも回転によるヘラ切りで切り放したのち、底部を調整して平坦な底部をついている。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。ヘラ切り後の底部調整はナデで、41は不定方向へ丁寧に施している。内面は回転ナデ調整を行う。中心部に仕上げナデを施すもの（41・45）も見られた。

53は底部を欠損しており高台の有無はわからない。底部に残存する沈線が、高台を貼りつける時に生じた可能性もある。

・杯B (54~72)

いずれも底部に高台を有する形態である。高台は下方へ真っ直ぐ立つものと、外側にふんばる形態に分かれる。体部の形態は底部から口縁へ直線的にのびるものが多い。また器高と比較して口径の大きい形態から皿として分類可能なものもあるが、いずれも反転復元していることから、本項にまとめて記述した。

54は、体部が内湾気味に真っ直ぐ上方へ立ち上がる。高台の内面は極端に外方へふんばり、断面は直角三角形を呈する。底部内面には回転ヘラ切り痕跡を明瞭にとどめる。55~57は体部が斜め上方へのび、口縁付近でわずかに外反する。いずれも外方へしっかりとふんばる高台を持つ。57は口縁に焼成段階で生じた歪みがある。

58は、底部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。口縁端部は丸くおさめ、器壁も全体に厚い印象を与える。59は器高に対して口径が大きく、高台は内側に付される。

60~65は、口縁部が平坦な底部から直線的に立ち上がる。60は口径が小さく、高台は外方へとふんばる。62は口縁部の真ん中付近で軽い屈曲が見られる。61・63は高台の退化が著しく、底部の中心は大きくなつたわみ、高台と同じ高さになる。64は垂下する高台を持つ。口縁付近はわずかに外反気味である。65も高台が大きくふんばり、口縁端部がわずかに外反する。

66は口縁部が大きく屈曲し、外面に明瞭な稜線がある。断面形が菱形をなす高台は、外方へのふんばりが顕著である。71も屈曲による稜線が見られる。高台は低くなり、極端にふんばる。

72は皿状の形態で、口縁端部で緩やかに外反する。

69・74は底部中央ならびに口縁端部付近を、70は底部のはば全体を欠損する。高台付近のみが遺存する73は底径の復元から皿の可能性があるが、大半を欠損しているため判断できない。

・椀B (78~80)

杯として認識できるもののほかに、口径に対して器高が大きく柄として捉えられるものが数点出土している。いずれも底部の高台を付す。底部と体部の境界がなく、緩やかに広がる形態と、平坦な底部と体部の境界が明瞭で口縁部へ直線的にのびる形態がある。さらに口縁端部付近の様子から、79のように上方を指向するものと80のように外反気味のものがある。

また底部のみが出土した76・77は、器壁や形態から長頸壺の可能性もあり、識別が困難である。

b. 蓋

古墳・奈良の時代に属する遺物が出土している。古墳時代は杯の状況に対応し、ツマミを持たない形態と、天井部に宝珠ツマミ・内面にカエリを持つものがある。奈良時代以降では、口径が大きく皿の蓋と考えられるものがある。また杯に対応する蓋以外には、特異な形態を持つ短頸壺の蓋が1点ある。

・杯H蓋 (2~5)

立ち上がりを持つ杯身に対応した、天井部にツマミを持たない形態である。天井部は平坦で、口縁にかけて丸くのびる。回線を巡らせた2以外には、天井部と体部の境界が明瞭ではない。作り方は粗雑で、口縁端部に歪みを生ずるものもある。口縁端部は丸くおさめる。

内面は回転ナデで調整し、天井部で仕上げナデを施す。天井部外面は回転ヘラ切りの痕跡をそのまま残すもの(3・5)と、外面をナデによって調整するもの(2・4)がある。ヘラ切り後未調整のものは、いずれも周開をヘラ削りによって調整している。口縁部周辺は回転ナデにより調整を行う。

・杯G蓋 (12・13)

宝珠ツマミを有する形態で、両者とも内面にカエリを有する。先端は口縁内部に収まり、口縁端部よりも低い。うち13はツマミ部分を欠損する。

天井部は口縁部にかけて丸くのびるものと、口縁部付近で湾曲するものがある。この湾曲は、カエリ接合時に生じたと考えられる。口縁端部およびカエリ端部は丸くおさめる。天井部外面の調整のうち、口縁付近は回転ナデ調整を施す。中心から3分の2の範囲を回転ヘラ削りし、宝珠ツマミ周辺には貼りつけのナデ痕跡が見られる。内面は回転ナデによる調整を行う。

・杯B蓋 (20・22~33・35・36)

高台を持つ杯に対応するもので、天井部に扁平なツマミを有する。20は天井部が扁平で低く、口縁付近で覗く屈曲する。22・23は天井部が高く笠形の形態である。口縁部は内傾気味に垂下する。24は笠形の形態が顕著となり、口縁部は段を持たずにそのまま垂下する。25は口径が大きく、大型の杯または皿に対応するものと考えられる。

29は天井部に環状ツマミを有する。口縁付近で大きく屈曲し、端部は垂下する。ツマミを欠損する30もほぼ同形態の口縁である。

31~33は天井部のツマミ付近を欠損している。口縁部の屈曲は見られず、口縁端部は内傾気味に垂下

する。

35・36も同じく天井部を欠損するが、反転復元による口径が大きいことから、皿の蓋と考えられる。口縁部がわずかに屈曲し、端部は肥厚する。

・短頭壺蓋（94）

ツマミの中央に円盤状の突出を持つ特異な形状である。天井部はわずかに屈曲を持ち、口縁部で垂下する。両者の境界は鋭い稜をなし、口縁端部はわずかに内傾する。久留美毛谷23号墓跡において、類似した特徴の遺物が出土している。

c. 雄（84・85）

84は、ほぼ完全な形で出土した。竪穴住居跡の床面上から検出されており、遺構の時期を決定する資料の一つである。

頸部の大型化が進んでおり、口縁部にかけてラッパ状に広がる。口縁部は屈曲を持たないが、途中で外面に稜をつくりだす。口縁端部は丸くおさめる。肩部から頸部にかけて鈍い凹線を3条めぐらす。肩部から側面上部の位置に直径1.5cmの円孔が開けられている。

口縁部の外面は回転ナデによる調整を施す。頸部内面は回転ナデが及ばず、綫方向へなでつけた痕跡がある。底部は回転ヘラ削り後、ナデ調整を行う。ヘラ削りは底部のはば全面に施されており、体部の回転ナデを切っていることから、体部整形後に底部の調整を行ったことがわかる。

85は頸部から上を欠損している。また穿孔は大半が失われ、径もわからない。焼成も軟質のため、表面の剥落が著しく調整も観察できなかった。

体部はより球形を指向し、肩部には鈍い凹線が1条めぐる。体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ削りのあとナデによる調整を施す。

d. 横瓶（87）

口縁部だけが残存する。体部との接合部分が湾曲することから、口縁の復元径とあわせて器形を推定した。口縁は外反気味で、端部は丸くおさめる。体部内面にはタタキ目が残る。

e. 壺（88～93）

広口壺・長壺などがある。大半は口縁のみの出土であり、全体の様子がわかるものは少ない。また底部のみ出土した土器の中に、壺の破片と考えられるものがあった。

86は中型の壺で、口縁部から体部の一部にかけて遺存している。口縁部は外方に開き、端部を上へわずかに屈曲させる。端部外側は屈曲部付近で強い横ナデを施すため、境界に凹線状の段差をなす。横ナデ整形後、クシ描きの波状文を施す。また口縁部内面には「十」のヘラ記号を付す。

口縁部は内外面ともに回転ナデによる調整、体部はタタキで整形後、外面は粗いカキ目、内面は頸部との境界付近のみを粗い回転ナデで調整を行う。内面のナデは、口縁内部の調整と一連の工程で施していく。

88は広口壺で、底部を一部欠くものの、ほぼ完全な形に復元できた。比較的平坦な底部から、胴張りの体部へ続く。体部の中心からやや上寄りで最大径を測り、径を減じつつ頸部に至る。体部と頸部の境界にはヘラ描きの沈線が2条めぐる。口縁は短く、真っ直ぐ斜め上に開く。頸部から体部にかけてタタ

きによる整形を行い、その後ナデですり消している。内面は同心円の当て具痕を粗い回転ナデで調整する。底部はヘラ切り後にヘラ削りを行う。ヘラ削りは体部下半にも施され、方向は一定であるが、ロクロ回転によらない粗いケズり痕を呈している。

90も同じく広口壺であるが、時期的に新しい形態である。大きく張り出す肩部と、大きく外反させる口縁部を持つ。内外面ともに回転ナデにより調整する。

89は長頸壺の口縁部である。頸から端部に向かって大きくラッパ状に開き、途中外面には凹線を2条めぐらす。

他に底部付近のみ遺存したものがある。いずれも器形は断定できないが、91は90のような広口壺、92、93は長頸壺の可能性が考えられる。

f. 高杯 (95・96)

スカシが消失し、脚部の小型化が進んだ形態である。杯部～口縁部を欠損しており、脚部のみ出土した。口縁を欠損する95は、杯部は外面を回転ヘラケズリ、内面を回転ナデで脚部は内・外面ともに回転ナデによる調整をおこなう。脚の中央付近には2条の横線を巡らす。壺部は大きく開き、端部は外側に面をもつ。96は杯部・脚部とともに壺部を欠損している。脚部は下方へと大きく開く。

g. 平瓶 (97)

口縁部付近のみが出土した。内外面には自然釉の付着が著しい。口縁は外方へ直線的に広がり、端部は丸くおさめる。

h. 壺 (106～111)

完形で出土したものは見られない。図化できた口縁部または底部の破片以外に、体部の一部と思われる破片が大量に出土している。

口縁付近の形態は、106・107が直に立ち上がる口縁をもち、端部で外方へ屈曲させる。107の体部外面は平行タタキのあと、粗いカキメ調整を行う。内面には同心円のタタキ目を明瞭に残す。108は口縁が外反する形態で外面に凹線を1条巡らす。端部は丸く収める。109・110も外反する口縁を持つが、口縁端部で肥厚する。109は器壁が厚く、端面は内傾する。110の端面は垂直になる。それぞれ端部をさらに上方へつまみ出す。頸部から、大きく外反するものである。

111は平底の破片で、中央付近を欠損する。

土師器

a. 杯 (81～83)

いずれも底部に高台を持つ器形である。81は高台付近のみの残存であり、細部の形態はわからない。比較的厚い器壁をなす。82はゆるやかなS字状の体部を持ち、口縁端部は丸く収める。83は折り返した口縁部と体部の境界が稜線となる。

b. 蓋 (21・34)

高台付きの杯に対応するもので、頂部に扁平な宝珠ツマミを付す。21は高い天井部をもち、口縁はわずかながら折り返しが見られる。34は口縁付近を欠損するほか、軟性で内面の剥落が著しい。

c. 壺 (100~102)

100は小型の丸底壺で、ほぼ完形に復元できた。球形の体部を持ち、口縁部はゆるやかに外反する。端部付近ではさらに小さく内溝させる。他は口縁部から頸部にかけてのみ遺存している。

d. 壺 (103~107、112~116)

図化できたものは口縁付近のみで、全体が遺存している遺物は出土していない。103は口縁部は、「く」の字に外反する。端部はそのまま丸く収める。104・107も外反する口縁を呈する。104の壺部は肥厚し、垂直な端面をなす。

112は口縁がゆるやかに外反し、体部は丸みを持つ。大きく外反した口縁を持つ106・113・114・116は長頸壺の一部と考えられ、うち105・115・118は口縁端部が垂直面を呈する。また106・116の端部は上方へ内溝気味に丸く収める。115は底部付近の形状がわからないが、広い口径と大きく外反する口縁部から鏡の可能性を残す。

その他の遺物

a. 土馬 (1)

土師質で、手づくねによって成型ののち、部分的にナデによる調整を施す。喉から両前脚にかけてはハケ目痕が明瞭に残され、毛並みの表現効果を意図したと考えられる。四肢ならびに頸部の一部を欠損する以外はほぼ完形に遺存していた。

背部には鞍を造りだし、頭部にかけて粘土紐を貼りつけて手綱を形づくり。尾部も同様に粘土紐で尻繩の表現が見られる。また鞍の両側には鏡の表現と思われる粘土紐が垂下しているが、先端を欠損しているため鏡そのものの表現については不明である。

頭部は右目から鼻面の中心にかけてわずかに欠損する以外はよく遺存している。竹管文風の刺突で眼を、先の尖った工具による刺突で鼻孔をそれぞれ表現する。また口は径0.5cmほどの円孔で表す。目の後ろには粘土と刺突孔によって耳が表現されているが、左耳は剥落している。

頭部から体部にかけて幅が増し、鞍の中心部分で最大幅となる。鞍は体部とは別に製作しており、体部を成型後、板状の粘土を載せて接合している。尾部に向かって幅を減じ、尾は体部を絞りこんで表現する。

馬具による装飾の表現そのものは、細部を省略した退化傾向が窺える。しかし装飾を個々に製作して接合している点や、顔などはリアルな表現がなされることなどから、比較的古式の特徴を残している。また住居跡からの出土は、その性格を考える上での一視点を提供したといえる。

全長23.3cm・残存部分での器高は頭部で7.9cm、尾部で4.8cm・胴部における最大幅8.0cmをそれぞれ測る。

b. 不明土製品 (99)

須恵質では半球体を呈する。一方に平坦な底部を持ち、頂部中央から底部へ直径0.5cm円孔が貫通する。また頂部の円孔から溝状の切り込みが放射線状に8条施され、底部へと達する。切り込みの断面はV字形で、溝を切った後に面取りがなされている。深さは最も深い最大径部付近で1.1cmを測る。谷部の確認トレンチから出土した。

c. 砧石 (S-1)

三角柱の石材を用いている。両表面を使用しており、使用痕の方向はほぼ一定しており、片側では二方向を使用する。粒子は細かく、仕上げ用の砧石と考えられる。

d. 金属器 (F-1・2)

F-1は鉄製の紡錘車で、腐食が著しいが紡輪部分は円形と考えられる。また断面円形の鉄製軸部が一部遺存している。紡輪の残存径は3.5cm・厚さ0.3cmを測り、軸の直径0.4cm・残存長1.2cmである。F-2は鉄製刀子である。鋸角の先端近く刃部は背部とは並行に延び、基部に向かってその幅を減じる。基部の端を欠損するが、遺存状態はおおむね良好であった。断面三角形の片刃と見られる。全長6.1cm・最大幅1.1cmを測る。

以上、田井野遺跡の調査で出土した遺物の観察を加えてきた。最後に出土遺物の傾向について、土器を中心に若干触れておきたい。

出土遺物で中心を占めるのが須恵器である。形態等の特徴から、古墳時代と奈良時代以降の2つの時期に大別できる。

出土した蓋杯をみると、古墳時代の形態を持つものは短小化の進んだ立ち上がりを有するものと、宝珠ツマミを有する蓋をもつものが見られ、田辺昭三による須恵器編年のTK-209~217形式に比定できる。時期的には6世紀末から7世紀前期の遺物である。

A地区の竪穴住居跡を中心とする遺構に伴うものと考えられるが、SH01・03からは宝珠ツマミを有する蓋杯は出土しておらず、同じ遺構から出土した他の遺物もほぼ対応する形態を呈する。時期的には先行するものと考えられる。一方宝珠ツマミを有する蓋杯が出土したSK01からは、逆転前の形態は出土しておらず、各遺構における存続時期には若干の前後関係が存在する。

奈良時代以後の遺物は、掘立柱建物跡を中心とする遺構に相当すると見られる。出土した杯A・Bの底部技法を見ると、回転糸切り技法を用いているものは2点だけで、大半は回転ヘラ切り技法を用いている。底部切り放し後の調整は回転ナデを施すものが若干あるが、省略するものがほとんどであった。形態的にも底部から口縁部にかけての立ち上がりが急になり、高台の外方へのふんばりも顕著になっている。また杯B蓋は扁平化の進んだ宝珠ツマミを持ち、器高が高く笠形の形態を呈するものが多い。

これらの特徴から、一部包含層出土の遺物に10世紀以降にくだらものが見られるが、遺構にともなう遺物は8世紀後期~9世紀初頭が中心である。

土師器は点数が少ないが、須恵器と同様に2時期に大別される。古墳時代に該当する遺物はわずかで、SH01出土の壺・甌ならびにSH03出土の甌がある。奈良時代以降の遺物としては杯B・蓋・甌などがある。杯Bは高台の退化傾向が顕著で、須恵器とは同時期の所産と考えられる。

表5 出土土器観察表

No	器種	出土遺構	種別	口径	器高	底径	調整及び備考
2	杯H蓋	A SH01	須恵器	13.7	4.4	—	天井部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰色。
3	杯H蓋	A SH01	須恵器	13.0	4.0	9.0	天井部回転ヘラ切り未調整、体部との境界付近のみヘラケズリ。内面回転ナデ。淡灰色。
4	杯H蓋	A SH01	須恵器	11.2	4.0	5.7	底部ヘラ切り未調整、ヘラ起こし痕あり。内面回転ナデ。灰白色。
5	杯H蓋	A SD12	須恵器	15.0	3.4	—	天井部回転ヘラ切り未調整、体部との境界付近のみヘラケズリ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
6	杯H	A SH01	須恵器	15.4	4.1	—	底部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。灰白色。
7	杯H	A SH03	須恵器	12.5	3.7	—	天井部回転ヘラ切り未調整、体部との境界付近のみヘラケズリ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰色。
8	杯H	C SK41	須恵器	11.7	3.8	6.3	底部回転ヘラ切り後、体部との境付近をナデで調整。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
9	杯H	A SD06	須恵器	13.2	3.1	—	底部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。灰色。
10	杯H	A 包含層	須恵器	12.0	2.9	—	底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ。内面回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。灰色。
11	杯H	A SK01	須恵器	12.5	3.7	—	底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ。内面回転ナデのち仕上げナデ。淡灰褐色。
12	杯G蓋	A SK04	須恵器	10.1	2.7	—	天井部回転ヘラケズリ。灰白色。
13	杯G蓋	A SK11	須恵器	13.4	1.7	—	天井部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。灰オーリーブ色。
14	杯G	A SK04	須恵器	11.4	4.1	—	底部ヘラ切り未調整。内面回転ナデ。灰白色。
15	杯G	A SK05	須恵器	9.5	3.0	—	底部ヘラ切り未調整。内面中央はそのまま未調整。灰色。
16	杯G	A SK04	須恵器	10.2	3.2	—	底部ヘラ切り未調整。内面中央は回転ナデのまま未調整。灰白色。
17	杯G	A SH03	須恵器	13.1	3.0	10.3	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
18	杯G	A SK05	須恵器	10.0	2.6	6.6	底部ヘラ切り未調整か？灰白色。
19	杯G	B P-5	須恵器	11.4	3.6	6.3	底部回転ヘラ切り後粗い回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰色。
20	杯B蓋	A SK04	須恵器	14.7	1.8	—	天井部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
21	杯B蓋	A SK01	土師器	16.5	2.5	—	外外面ともに剥離が著しく調整不明。淡橙色。
22	杯B蓋	A 包含層	須恵器	15.3	2.9	—	天井部回転ヘラ切り未調整。内面は回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。淡灰色。
23	杯B蓋	A 包含層	須恵器	15.8	3.1	—	天井部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰色。
24	杯B蓋	A 包含層	須恵器	14.7	3.5	2.7	天井部ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。灰白色。
25	杯B蓋	A 包含層	須恵器	18.7	3.2	—	天井部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰色。
26	杯B蓋	A 包含層	須恵器	14.8	2.1	—	天井部回転ヘラ切り。内面回転ナデ。灰白色。
27	杯B蓋	A SK01	須恵器	19.7	3.2	—	天井部回転ナデ。内面回転ナデ後不定方向ナデ。灰白色。

No	器種	出土遺構	種別	口径	器高	底径	調整及び備考
28	杯B蓋	A SK01	須恵器	15.2	2.5	9.9	天井部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ後仕上げナデ。焼成は軟質。乳白色。
29	杯B蓋	A SK01	須恵器	14.8	2.3	—	天井部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ後不定方向ナデ。灰色。
30	杯B蓋	A SK01	須恵器	15.5	2.0	—	天井部回転ヘラ切り。内面回転ナデ。灰白色。
31	杯B蓋	A P-2	須恵器	14.9	2.1	—	天井部回転ヘラケズリ後、口縁付近にかけてナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。明灰オリーブ色。
32	杯B蓋	A SK04	須恵器	16.3	2.5	—	天井部回転ヘラケズリ後、口縁部にかけてナデ、内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
33	杯B蓋	A 包含層	須恵器	16.9	2.1	—	天井部回転ヘラ切り後、粗い回転ヘラケズリ。内面回転ナデ後不定方向ナデ。灰白色。
34	杯B蓋	A SK09	土師器	—	2.7	—	内外面とともに剥離が著しく調整不明。
35	杯B蓋	A SK09	須恵器	24.7	1.7	—	天井部内外面とともに丁寧なナデ調整。
36	杯B蓋	A P-3	須恵器	27.6	1.8	—	天井部回転ヘラケズリ後、口縁付近にかけてナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰色。
37	杯A	A SK01	須恵器	9.8	2.9	7.2	底部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
38	杯A	A SK03	須恵器	12.0	3.4	7.2	底部外面ヘラ切り後ナデ。内面は回転ナデ。暗灰色。
39	杯A	A SK03	須恵器	11.4	3.6	8.7	底部外面ヘラ切り後不定方向ナデ。内面は回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
40	杯A	A SK01	須恵器	13.3	3.8	9.1	底部ヘラ切り後不定方向ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰色。
41	杯A	A SK03	須恵器	14.1	3.9	11.0	底部回転ヘラ切り後不定方向のナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
42	杯A	C SK30	須恵器	14.9	2.8	11.9	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
43	杯A	A P-1	須恵器	12.9	3.3	9.4	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
44	杯A	D 包含層	須恵器	12.9	3.1	8.2	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。淡灰色。
45	杯A	A 包含層	須恵器	14.9	3.0	11.7	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
46	杯A	A 包含層	須恵器	13.3	3.6	10.5	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
47	杯A	A 包含層	須恵器	13.7	4.0	—	底部ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
48	杯A	A 包含層	須恵器	13.0	5.2	9.6	底部回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。灰色。
49	杯A	A SK01	須恵器	14.5	3.4	7.8	底部回転ヘラ切り後不定方向ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰色。
50	杯A	A SK07	須恵器	12.2	2.7	7.3	底部ヘラ切り後一定方向のナデ。内面回転ナデ。灰色。
51	杯A	A 包含層	須恵器	12.3	2.3	—	底部ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
52	杯A	B 包含層	須恵器	15.2	4.0	6.7	底部回転糸切り。内面回転ナデ。灰色。
53	杯A?	A SK08	須恵器	14.8	4.0	—	底部欠損のため調整不明。体部内外とも回転ナデ調整。灰色。

No	器種	出土遺構	種別	口径	器高	底径	調整及び備考
54	杯B	A SK06	須恵器	13.0	5.0	10.1	底部回転ヘラ切り未調整。内面回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。灰色。
55	杯B	A SK06	須恵器	11.9	4.0	8.3	底部調整不明。内面は回転ナデ。暗灰白色。
56	杯B	A SK06	須恵器	13.7	4.4	8.7	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。灰色。
57	杯B	A SK06	須恵器	13.5	4.6	8.4	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面は回転ナデ。焼成時に口縁部が著しく歪曲。灰白色。
58	杯B	A SK09	須恵器	13.4	4.2	10.2	底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整。内面回転ナデ。灰白色。
59	杯B	A SK08	須恵器	17.0	4.2	11.6	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後不定方向ナデ。灰色。
60	杯B	A SK05	須恵器	12.3	4.7	8.4	底部回転ヘラ切り後ナデ、爪形圧痕がわずかに遺存。内面回転ナデ。焼成時に口径が歪曲。灰白色。
61	杯B	A SD04	須恵器	15.3	5.0	11.3	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後不定方向ナデ。灰白色。
62	杯B	A SK05	須恵器	16.8	5.3	12.5	底部回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。灰色。
63	杯B	A SK05	須恵器	16.7	5.8	13.7	底部回転ヘラケズリ、爪形圧痕跡あり。内面は回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。灰色。
64	杯B	A 包含層	須恵器	15.7	4.4	9.7	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後不定方向の仕上げナデ。灰色。
65	杯B	D 包含層	須恵器	14.1	4.4	10.4	底部回転ヘラ切り後粗い回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。焼成は軟質。淡灰白色。
66	杯B	A 包含層	須恵器	14.9	3.9	10.2	底部は剥離が著しく調整不明。内面は回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
67	杯B	A 包含層	須恵器	14.2	4.4	9.7	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。ヘラ記号有り。灰白色。
68	杯B	A 包含層	須恵器	14.0	3.7	9.7	底部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ。灰色。
69	杯B	A SK01	須恵器	—	4.0	11.5	底部回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。灰色。
70	杯B	C 包含層	須恵器	15.1	4.1	10.8	底部欠損のため調整不明。体部内外面ともに回転ナデ調整。灰白色。
71	杯B	A 包含層	須恵器	16.3	4.1	10.8	底部ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。灰白色。
72	杯B	C SK36	須恵器	13.0	3.1	5.0	底部回転ヘラ切り未調整。内面回転ナデ。暗灰色。
73	杯B	B 包含層	須恵器	—	3.1	16.8	底部欠損のため調整不明。体部内外面ともに回転ナデ調整。灰色。
74	杯B	D 包含層	須恵器	—	5.8	10.6	底部回転ヘラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。淡灰褐色。
75	杯B	C 包含層	須恵器	12.7	4.9	5.8	底部ヘラ切りのち浅いナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰オリーブ色。
76	壺	D 包含層	須恵器	—	4.8	13.0	底部欠損のため調整不明。体部内外面ともに回転ナデ調整。灰白色。
77	壺	A SK03	須恵器	—	2.6	8.2	底部ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。淡灰褐色。
78	椀B	D 包含層	須恵器	—	5.8	6.3	底部回転ヘラ切り未調整。内面回転ナデ。灰白色。
79	椀B	C SK36	須恵器	16.0	5.6	7.6	底部回転ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。

No	器種	出土遺構	種別	口径	器高	底径	調整及び備考
80	椀B	C P-10	須恵器	15.1	6.2	6.8	底部へラ切り未調整。内面回転ナデ後仕上げナデ。灰白色。
81	杯B	A SK01	土師器	—	2.9	11.3	外面部ナデ調整。内面は剥離が著しく調整不明。灰褐色。
82	杯B	A SK01	土師器	14.9	3.9	—	器面に丹塗りの痕跡あり。内外面ともナデ調整か。淡橙色。
83	杯B	A SK01	土師器	15.9	3.5	12.4	器面に丹塗り。内外面ともナデ調整。淡橙色。
84	甌	A SH03	須恵器	12.9	15.9	10.5	口縁部～体部にかけて回転ナデ。底部外面は回転へラケズリ後ナデ。灰白色。
85	甌	A SH01	須恵器	—	6.8	6.6	底部回転へラケズリ後ナデ。体部回転ナデ。灰色。
86	壺	A SK05	須恵器	14.3	7.3	—	頭部内外面ともに回転ナデ。肩部外面は平行タタキの後、粗いカキメ調整。内面は同心円タタキ。灰色。
87	横瓶	A SK07	須恵器	14.3	7.3	—	口縁部回転ナデ。体部内面同心円タタキ。灰色。
88	壺	A 包含層	須恵器	11.8	15.1	11.8	口縁部回転ナデ。体部外面は平行タタキ後横方向ナデ。内面は同心円タタキ後回転ナデ。底部回転へラ切り後、体部下半部にかけて不定方向へラケズリ。灰白色。
89	壺	A 包含層	須恵器	14.7	11.4	—	口縁一頭部のみ遺存。内外面ともに回転ナデ調整。
90	壺	A 包含層	須恵器	18.9	13.9	—	口縁部から底部にかけて、回転ナデ調整。
91	壺	A 包含層	須恵器	—	8.6	10.7	底部回転へラ切り後ナデ。体部回転ナデ。底部内面に自然釉が付着。灰白色。
92	壺	A 包含層	須恵器	—	6.6	13.8	底部を欠損しており調整不明。体部内外面とともに回転ナデ。灰白色。
93	壺	A SB03	須恵器	7.4	19.7	14.6	体部内外面ともに回転ナデ。底部外面は回転へラケズリ。
94	短頸壺蓋	D SK42	須恵器	8.2	3.1	—	天井部回転へラ切り後回転ナデ。内面回転ナデ。暗灰色。
95	高杯	B P-4	須恵器	—	6.7	—	杯部内面回転ナデ。脚部は回転ナデ調整。灰色。
96	高杯	A 包含層	須恵器	—	6.7	6.8	杯部外面回転へラ切り、内面回転ナデ。脚部回転ナデ調整。灰色。
97	平瓶	A SK05	須恵器	7.6	6.5	—	頭部付近のみ遺存、内外ともに回転ナデ。
98	把手付甌	A SD12	須恵器	—	16.4	22.8	内外面とも肩から体部にかけてナデ。底部付近は格子タタキ。内面は同心円タタキ。焼成不良。灰白色。
99	不明土製品	A 確認	須恵器	7.2	8.9	—	手づくね成形の後、指ナデ調整、頭部下半のみハケメ。暗灰褐色。
100	壺	A SH01	土師器	10.9	10.2	12.0	剥離が著しいが、内外面ともにハケ目調整。底部付近に指頭圧痕が残る。赤橙色。
101	甌	A SH01	土師器	12.8	6.2	—	外面部剥離が著しく調整不明。内面は横ナデか。橙色。
102	甌	A SB03	土師器	15.0	3.7	—	内外面とも調整不明。橙色。
103	甌	A SK02	土師器	21.9	3.5	—	口縁部横ナデ。体部外面は縦方向のハケ調整。淡灰白色。
104	甌	A SK01	土師器	14.4	4.6	—	外面部剥離が著しく調整不明。頭部内面は横方面のヘラナデ。灰褐色。

No	器種	出土遺構	種別	口径	器高	底径	調整及び備考
105	甕	A SK01	土師器	15.5	4.9	—	口縁部剝離が著しく調整不明。体部外面はタテハケ、内面は横方向のヘラケズリ。黄橙色。
106	甕	A SH03	須恵器	20.4	6.9	—	頸部内外面ともに回転ナデ。体部外面平行タタキ、内面は同心円タタキ後横ナデ。灰白色。
107	甕	A 包含層	須恵器	21.4	11.6	—	口縁部回転ナデ。頸部から体部の外面平行叩き後カキメ、内面同心円タタキ後横ナデ。暗オーラブ灰色。
108	甕	A SK05	須恵器	21.6	8.1	—	頸部内外面ともに回転ナデ。肩部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキ後粗いナデ。灰白色。
109	甕	C P-6	須恵器	26.6	7.9	—	口縁部ナデ調整。頭部外面に粗いカキメ。体部外面は平行タタキ。淡灰褐色。
110	甕	A 包含層	須恵器	27.3	7.5	—	口縁部横ナデ。体部外面平行タタキ後横方向ナデ、内面同心円タタキ。灰白色。
111	甕	B 包含層	須恵器	—	5.1	16.4	底部欠損のため調整不明。体部外面は平行タタキ、内面には指頭圧痕。黄灰色。
112	甕	A SK01	土師器	26.9	6.5	—	口縁部回転ナデ調整。体部外面タテハケ、内面は横方向の板ナデ。
113	甕	A SH03	土師器	22.5	5.7	—	口縁部から頸部付近に指頭圧痕。体部は剝離が著しく調整不明。灰黄橙色。
114	甕	B 包含層	土師器	20.6	6.3	—	口縁部横ナデ。体部外面緩ハケ、内面は横方向のハケ調整。淡褐色。
115	甕	A SK01	土師器	35.9	8.5	—	外面剝離が著しい。口縁部横ナデか。内面には指頭圧痕。灰褐色。
116	甕	A SK01	土師器	22.5	4.6	—	口縁部ナデ調整。頸部外面に指頭圧痕。灰褐色。

第5章 まとめ

今回は、段丘上に立地する田井野遺跡の南部を帶状に発掘調査したことになる。堅穴住居跡3軒・掘立柱建物跡15棟・土壙47基・溝・ピットの遺構を検出した。これらの遺構は、出土遺物から古墳時代後期と、奈良時代後期から平安時代前期の2時期に大別できる。それぞれの遺構は同一面で検出された。

後世の削平による影響が著しく、調査面積に比して検出遺構は寡少である。遺構の分布状況から、すでに削平等により失われたものも少なくないであろう。遺跡の性質を解明する要素は、十分得られたとはいえないが、この調査以後も、周辺における発掘調査が進み、当遺跡を理解するデータは着実に集まりつつある。

最後にこの調査で得られた知見について整理し、若干の考察を加えてまとめとする。

第1節 遺構について

1. 古墳時代の遺構

堅穴住居跡・土壙・溝などを検出した。これらは有機的な関連を持って遺跡を形成していたと考えられるが、土壙・溝など単独で性格が観定できるものはなかった。このため、遺跡の性格を考える上で中心を占める、堅穴住居跡について出土状況を振り返っておく。住居跡は3軒確認した。検出段階ですでに上面を削平され、わずかに床面付近が遺存していた。床面積が小さいSH02を挟んで、谷の縁辺に沿って並列に位置している。近接して存在するものの、住居跡間の切合い関係はみられなかった。

住居跡の平面は、コーナーが明瞭な方形を呈する。床面の状況について全体が遺存していたのはSH01だけがあるが、丘陵の緩斜面を削り込んで平坦な床を構築しており、他の住居跡も同様の構造と見られる。主柱穴は4本で、各コーナーに均等に配置されていた。またSH01では、それぞれの主柱穴と至近で切り合う柱穴が検出された。周壁など基本的な部分は共有していることから、小規模な建て替えが考えられる。

屋内施設として、カマド・周壁溝と、住居内に設けられた土壙がある。

カマドは「ハ」の字状に袖を配する構造で、一般的な形態といえる。袖の中央には石を支脚として用いている。立ったままの状況を確認したSH02のほか、開口部付近からは焼土・炭屑とともに赤化した石が検出されている。それぞれ住居跡での配置や主軸方向が共通しており、特に煙道が北東を指向する点はそれぞれの住居への配慮と、谷と反対に向かれた地形への意識が表れている。周壁溝はすべて検出したが、全周するのはSH01だけで周壁とほぼ並行に巡らされる。あと2軒は床面の削平とともに亡失しているが、SH03は全周していた可能性が高い。性格を特定できるような証左は得られていないため、一般に指摘されている排水溝としての機能を想定している。

住居内土壙はSH03で確認した。後世の遺構が床面より深く達しているが、床面精査の段階で検出できたものについて検討を加え、住居跡との関係を導き出した。カマド東袖の東側と、南東主柱穴の南に存在する。いずれも主袖から東寄りで、周壁に接するように配置される。貯蔵穴と考えられるが、いずれも底面は平坦、埋土にも特徴は見られなかった。今回検出した3軒の住居跡は、①北東に主軸をとる。②方形の平面プランを呈する。③4本の主柱穴を有する。④北西壁中央に作りつけのカマドを持つ。な

どの共通した特徴が見られる。また切り合いを持たず、屋内施設の位置が共通している点からも、各住居跡は互いに近接した時期に営まれたと考えられる。

住居跡から出土した遺物のうち、SH01・03から出土した須恵器は、形態の特徴から田辯昭三による須恵器編年のTK-209形式に比定でき、住居跡の時期は6世紀末と考えられる。このうち蓋杯は立ち上がりを有するものだけが見られ、カエリ・宝珠ツマミを有する蓋は出土していない。しかし古墳時代の造構であるSK01からは、つまみ付の蓋が見られた。失われた造構が少なくない検出状況から見ても、古墳時代の造構はTK217まで存続する可能性が高い。

2. 奈良時代後期から平安時代にかけての造構

掘立柱建物跡・土壙・溝などを検出した。各造構のうち、掘立柱建物跡を中心に状況をまとめる。

今回検出した掘立柱建物跡は全部で15棟である。各地区の検出状況はA地区5・B地区3・C地区6・D地区1となり、調査区全域に分布していたことを裏付けるものである。それぞれの建物は存続時期に幅があると思われるが、時期決定となる出土遺物がほとんどなく、明瞭な前後関係がつかめない。また疎らな分布状況は、擾乱の影響を反映した結果となった。各地区ともに造構そのものが検出できない箇所が多く、特に谷より東側にあたるB・C・D地区では削平が1mを超えるなど、建物の群構成復元に一層の困難さを与えている。

各建物の主軸方向は、谷を挟んで東西で異なり、西側のA地区は北東方向、東側のB～D地区は北西方向を指向する。これは谷の開析方向と一致し、地形との関連を重視した立地をとっている。当時の集落はこの谷を取り囲むように形成されていたと考えられる。

A地区からは5棟の建物を検出した。谷を臨むかたちで並ぶSB01・02・03は主軸方向がほぼ共通しており、近接した時期に営まれたと考えられる。すべての建物で、柱穴の一部に根がらみ石を配し、丁寧な構造を施している。またSB02・03は長軸が直交する形で配置され、北側の柱通りを描えていることから同時期に存在したものと見られる。SB01は主軸方向に差が存在し、各柱穴の規模が大きく平面プランも整備であるなど、SB02・03と若干の違いがある。柱穴から遺物の出土があったのはSB03だけであるが、これらの状況から3棟とともに、奈良時代後期を中心とした時期と考えられる。3棟の南側は谷の急傾斜が迫っており、建物が広がるとは考えられないが、北には段丘上に広がる緩らかな斜面地が続き、建物群の展開には適した地形であったと思われる。A地区で検出した建物は、集落の南端に近いものと推定される。

SB04・05は遺物が出土しておらず時期は不明だが、主軸方向を大きく違えており後後出する時期とみられる。SB04は短小な規模から一時使用のために造られた可能性も考えられる。

B～D地区では、確認したすべての掘立柱建物跡で柱根が遺存していた。柱穴はいずれも正円形を呈し、平面プランに亂れが生じているものも多いことから、奈良時代後半から平安時代にかけて形成されたと思われる。各地区検出の建物は、主軸をほぼ真北から西へ30度程度の範囲に向いている。A地区的建物群とは対称的で、南東へ開析する谷に対する意識が窺える。

B地区では3棟の掘立柱建物跡がある。うちSB06と07は主軸方向が一致しており、位置関係から見ても同時期に存在した可能性が高い。C地区では造構の重複して検出された。SB10と11で前者は柱穴から、平安時代前期の遺物が出土している。またSB12と13も近接し、同時併存とは考えがたい。SB12の柱穴からは奈良時代の遺物が見られた。いずれも直接造構が切り合っているわけではなく、SB10・12以外

は出土遺物がないため、明瞭な前後関係はつかめない。D地区では1棟検出されたにすぎず、建物の関連を把握するのは困難である。

非常に断片的な状況ではあるが、これらの建物の関係について。いくつかの検討を加える。建物群の関係をとらえる手がかりとして、C地区の状況が注目される。検出された6棟のうち、特にSB10と11は完全に重なり合っているため、明らかに存続時期を異にする。SB10はほぼ北に主軸を向けるが、これはSB12と一致する。一方、SB11は16°西に振っておりSB09と共通する。またSB14の長軸も、半分近くが失われ不明な点を残すものの近い値を示す。以上の点からC地区の建物群はSB10と12、SB09と11と14の2群にグループ化ができる。両者の前後関係については状況から類推するしかないが、規模が大きく精緻な平面形態を有するSB10・12のグループが先行すると思われる。B地区で検出されたSB06と07は、主軸方向がちょうど兩グループの中間に収まり、対応の判断に苦しむ。

今回調査した掘立柱建物跡は、奈良時代後半から平安時代初めにかけて営まれたと考えられる。規模や構造ではA地区の建物群に若干の優位性がある。他の遺構では、SB09で雨落ち溝が伴う以外には建物との直接関連を持つ遺構は見られないが、掘立柱建物跡の示す時期と大きく異なるものではなく、集落時代の存続時期は奈良時代後葉～平安時代前葉と考えられる。

3. 田井野遺跡の発掘調査～三市教育委員会の調査成果～

山陽自動車道建設と前後して、久留美地区（田井野）団体営は場整備事業が実施された。事業地は山陽自動車道の北側一帯にあたり、田井野遺跡の調査結果からこの部分に遺跡の範囲が及んでいることが想定できた。

平成3年には三市教育委員会が調査主体となり、事業予定地全城を対象とした確認調査を実施。その結果、県教育委員会で調査したA地区の北側9,000m²・D地区の北側1,500m²について遺構の存在が確認された。引き続いて平成4年度には全面調査が行われ、掘立柱建物跡を中心に堅穴住居跡・土壙などが検出された。この調査で、田井野遺跡が段丘上に広く展開していたことが明らかになった。

以下、三市教育委員会が実施した調査の成果について略述する。なお記述にあたり、三市教育委員会松村正和氏よりご教示ならびに資料の提供をうけた。

確認調査の結果、遺構は県教育委員会調査のA地区北方へ大きな展開をみせることがわかった。段丘上に大きく広がる緩斜面地で、調査前は水田であった。県教育委員会の調査区と同様に、段丘上も後世の水田形成に伴なって大きく地形の変化が行われている。影響が遺構面にも及び、削平によって失われた遺構も少なくない。調査で確認した遺構は堅穴住居跡・掘立柱建物跡・櫛列・土壙・溝・ピットなどがある。遺構の中心をしめるのは、29棟確認された掘立柱建物跡である。

調査は水田の段差によって、3地区に分割して調査を行った。以下各地区ごとに概要を記すが、三市教育委員会調査の地区名は、南から北へa・b・c地区と呼称する。

a地区はA地区的北方3mに位置する。わずかな未調査部分を挟んで、両者の検出面は1m近くあり、比較的急傾斜面に立地する。検出された掘立柱建物跡は7棟で、特筆すべきものとして、中央に束柱を持つSB04、2間×2間の総柱建物であるSB05がある。

b地区では後世の削平が著しく、調査区の西半部は削平の影響で生じた空隙地が大きく広がる。調査面積と比較して検出された遺構は少なく、掘立柱建物跡6棟を検出した。

c地区は最も北方に位置し、調査区全面で掘立柱建物跡を検出している。計16棟の建物が広がるほか、

調査区の北端では棚列、東端近くで竪穴住居跡を1軒確認した。SB02は検出された建物の中で最大規模を誇るほか、比較的大きな建物が存在する。

掘立柱建物跡群は、概ね奈良時代に形成されたものと思われる。それぞれの掘立柱建物跡における造営時期は、今後の整理作業の結果を待つ必要があるが、建物の主軸方向からグルーピングが可能である。主軸はいずれも北東、もしくはそれに直交する方向を指向し、磁北から東へ30・60・80度前後の振れに大別できる。以下、それぞれI・II・IIIグループとして各群の特徴を見る。

各グループを構成する建物数は、I：2棟、II：7棟、III：6棟を数える。IIグループが調査区のa・b区と、南側を中心に分布するのに対して、IIIグループはc区を中心に検出されている。

II・IIIグループは、柱穴列を揃えるなど整然とした配置を見せる。それぞれの内容をまとめると、IIグループは 2×3 間の建物群が中心をしめ、床面積が $25m^2$ と $15m^2$ の2つにまとまりを見せる。b区のSB01とSB02は直交し、それぞれに対応する棚列が存在する点が注目される。またIIIグループは、 3×5 間の規模を持つc区SB02をはじめ大規模な建物が多い。また構成する柱穴も方形を呈し規模も大きい点が特色として看取される。また上記いずれも含まれない建物が存在することから、さらに建物群が營まれた可能性も残されている。

これらの建物群は3時期以上の形成過程を経ている。出土遺物の整理を待つ必要があるが、遺構の重複からある程度の前後関係を考えてみたい。c区南東部のSB13とSB14で、桁行きの柱穴2基で、I3の柱穴がI4を切っている。前者はII・後者はIIIグループにそれぞれ含まれることから、IIIがIIに先行する建物群と判断できよう。建物数の少ないIグループは把握が困難であるが、各建物の構造から見てさらに後出するものと推測できる。

4. 結語

県教育委員会の調査では部分的な検出にとどまったが、三木市教育委員会の調査成果とあわせ、田井野遺跡は段丘上に大きく広がる集落跡であることが明らかとなった。

両者の成果から、田井野遺跡で検出された遺構の位置づけを行う。

(1) 古墳時代

竪穴住居跡は三木市調査で1軒検出されている。方形の住居跡でb地区東部に位置する。遺存状況が悪いため不明な点が多いが、一辺3.5mの方形住居で、周壁溝が検出されている。A地区検出の竪穴住居跡と比べてかなり小さい。

住居跡群の広がりという点からみれば、両者の距離は82mと大きく離れており、間に削平により失われた住居跡の存在を否定はできない。また谷によって隔てられるB～D地区では、遺構そのものは検出されていないが、B区包含層中から完形の杯身が出土しており、この部分にも遺構が存在した可能性もある。

しかし、遺存する住居があまりに偏在し、現時点では大きく展開していたとはいいがたい。また遺物が示す年代観もバラツキは少なく、短期間に営まれた集落と考えられる。

周辺の古墳時代の集落として、段丘下に立地する西ヶ原遺跡がある。平成2年度の県教育委員会による調査では、方形でカマドを有する31軒の竪穴住居跡が検出され、古墳時代後期の大規模な集落跡と判明した。これらの住居跡は、TK47古段階～TK217の時期に営まれているが、その中心はIV～VIの時期と考えられている。一方田井野遺跡と同じ時期の住居跡は、1軒検出確認されたにすぎず、しかも出土遺

物の大半がさらに古い様相を持っていることなどから、先行する可能性が高い。このように見ると両者の関係は、西ヶ原遺跡の衰退以後に田井野遺跡の出現がある。

集落規模から見れば、田井野遺跡がそのまま後続することは考えがたい。沖積地に立地する西ヶ原遺跡は、河川による影響を受け短期間で造構が変遷すると調査結果から導かれている。集落の一部が段丘上に移動することで、田井野遺跡を形成した可能性は少なくないと思われ、両遺跡を考える上で注目すべき点といえよう。

(2)奈良～平安時代

県教育委員会の調査では15棟の掘立柱建物跡を検出しているが、北方の段丘上で行われた三木市教育委員会の発掘調査の結果、掘立柱建物跡群は段丘上に大きく展開することが明らかとなった。

小規模な谷の左右に広がる建物群は、開析に対応する形で「ハ」の字に主軸を向ける。それぞれの建物はさらに細かくグルーピングが可能であるが、削平の影響から検出できた建物が少なく残念ながら詳細な検討は困難であった。建物の規模・構造から谷の西側に立地するA地区が先行すると考えられる。

建物群はさらに北部の段丘中央に広がる。三木市教育委員会の調査で検出された建物は29棟を数え、立地や建物規模から集落の中心をしめるものであろう。建物は主軸方向によるグルーピングから、集落は少なくとも3時期以上で形成されている。前後関係については今後整理調査の進展で明らかになるとと思われるが、造構の切り合い関係によってIIIはIIに先行すると判断できた。兵庫県教育委員会調査の掘立柱建物跡では、A地区SB02・SB03がIIグループの主軸と一致しており、同時併存していた可能性が考えられる。

これらの建物群の時期については、良好な出土遺物が少なく時期決定に困難を伴っている。A地区的建物については一部不明なものもあるが、奈良時代後葉が中心、B～D地区は奈良時代後葉～平安時代前葉の時期に営まれたと判断できる。

今回は大きな時間幅で捉えざるを得ないが、調査の進展がすすめば厳密な集落の変遷が明らかになるであろう。田井野遺跡の掘立柱建物跡は、新たな成果とともに性格が再論されなければならない。今後の調査結果に大きな期待を寄せたい。

第2節 遺物のまとめ～SH01出土の土馬を中心～

それぞれの時期に伴う遺物は調査面積に比べて大変少ない。個々に観察を加えた遺物については第4章第6節にて検討を加えたため、最初に実測出来なかった遺物についての傾向を簡単に触れておく。

出土遺物のうち、図化が可能であったものは出土遺物の2割程度である。特に土師器の窓部と見られる破片は実測できないものが多かった。大まかな傾向として、須恵器が全出土土器の7割を占める。

土器以外で特筆すべきものとして、SH01出土の土師質土馬が挙げられる。出土状況からその性格を推定する資料と考えられるため、この土馬について位置づけと性格の一端に迫ってみたい。

1. 土馬の性格

土馬＝土製の馬形模造品は、古くから注目を集める遺物であったが、祭祀遺物として認識したのは大場磐雄である。1937年に大場は、各地で出土した土馬を集め成し、祭祀または信仰関係の遺物と考えた。その後さらに出土遺跡や共伴遺物について検討を加え、意見の補強を行った。これによって土馬が祭祀

に関連する遺物として認識された。

その後、前田豊邦は、各遺物の形態差に着目し、形式分類を試みた。馬具装飾の有無、表現の稚拙から形式編年の可能性を指摘している。さらに泉森 皎、小笠原好彦の両氏は、出土遺構の検討を通じて形式変化をより明確にするとともに、水靈祭祀との関連を指摘した。また水野正好は、これらの馬が災いをもたらす神の乗り物と考え、多くの出土例に共通する破砕行為は、災いの拡散を防ぐ意図によるものと考えている。金子裕之を中心とする全国規模の祭祀遺跡集成の結果、幅広い分布と各地域における状況が明らかになりつつある。

土馬の形態は、装飾の表現を持つ「錦馬」と装飾を持たない「裸馬」の2類に大別される。一般的には古墳時代後期に出現し、8世紀代に出土例が増大する。9世紀にはいって小型化が進み10世紀前半には消滅する。

古墳時代の土馬は錦馬が多く、馬形埴輪と同様に粘土紐で鞍・手綱などを表現する。両者は形態の大小で区別され、時期的には馬形埴輪衰退期と前後して、小型の馬形土製品が出現すると考えられているが、系譜関係については不明な点が多い。天王塚古墳（福島県）やハシホ塚古墳（鳥取県）など、古墳からの土馬出土例はあるが、埴輪消滅後の性格の変遷など、土馬祭祀の起源を考える上で注目すべき問題点である。

8世紀代には「大和型土馬」が出現する。三日月形の頭部と特徴的な体部を有し、古代都城の周辺に分布する点や1遺跡で出土する個体数が著しく多いなど、都城における祭祀と密接な関係がある。一方地方では独自の様相が想定されており、系譜の多様性が指摘される。

9から10世紀には出土量の減少とともに小型化・抽象化が進んで、馬と認識しがたい形態のものへと変化してゆく。

以上のような変遷から、都城ならびにその周辺では、古墳から律令期への祭祀の変革過程で性格を変化させてゆくことが窺える。一方、各地方においては中央の状況に対応しつつ、多様なバリエーションを見せる。当時の祭祀が複雑な背景をもっていると言えよう。

2. 田井野遺跡出土の土馬とその性格

土馬が出土した遺構はSH01で、南西の主柱穴に接する浅いピットから出土している。共伴する出土遺物から、6世紀末から7世紀初頭の時期に営まれていた住居跡と考えられる。

住居跡の床面は直上まで後世の削平が及んでいたが、かろうじて全面が遺存していた。ただ後世の掘立柱建物跡SB01が切り込んでいるうえ、ピットなど後世の遺構が床面より深く達しており、住居跡との関連を明確に認識できがたい状況にある。

土馬の出土したピットは、床面精査段階に検出できた。南の主柱穴に接して検出しており、深さは住居跡の柱穴などと大きく矛盾しない。一方掘立柱建物跡をはじめ、後世の遺構はすべて住居跡床面よりも50cm前後深く掘り込まれているため、住居跡との関係で捉えることに矛盾はない。

3. 兵庫県下の出土例

さて兵庫県下では、37遺跡で土馬の出土例がある。採集品や包含層からの出土遺物も少くないが、出土遺構のある程度判明するものを列挙すると溝3・住居跡2・窯跡2となる。また播磨国府推定地にあたる本町遺跡や布施駅家跡とされる小犬丸遺跡などの官衙遺跡、および官衙的性格が濃厚な原小学校

(有年原田中遺跡)・西木ノ部遺跡・などで出土している点が注目される。時期は不明なものが多い中、確実押さえられる遺物として6世紀後半の豊穴住居跡より出土した東有年・沖田遺跡、窯跡出土の白沢5号窯(7世紀)・御坊山1号窯(8世紀)がある。また溝からの出土ではあるが、下小名田遺跡溝出土資料・吉田南遺跡は共伴資料から8世紀の年代が与えられる。他の資料は時期が困難である上に、全体の形状が判定できないものも多いが、小型化が著しい上郡町西野山出土例は、最も後出するものと考えられる。

住居跡から出土した例として、赤穂市東有年・沖田遺跡がある。現市街地の北方、千種川の中流域の盆地に立地し、绳文時代後期から縄文・室町時代まで続く集落跡と判明した。

土馬が出土したのは古墳時代後期の方形住居跡で、共伴する遺物から6世紀後半の住居跡と見られる。土馬は土師質で装飾を持たない「裸馬」である。全長12cmを測り、頭部から体部にかけて遺存する。手づくねで耳・たてがみを、刺突によって目を表現するなど、リアルな表情を持つ。四肢は折られ、うち3本は失われている。

田井野遺跡出土の土馬と比べれば、全長が約半分にとどまる点や、装飾の有無といった違いが見られる。他の出土遺物からも、若干先行する時期と考えられる。

豊穴住居跡からの土馬出土例は全国でも少ないなかで、同じ古墳時代でもあるだけに貴重な事例といえよう。土馬は住居内埋土からの出土ではあるが、住居跡との密接な関係を窺わせる。田井野遺跡と同様に住居跡における土馬を利用した祭祀の一例と考えられる。

また、神戸市の上脇遺跡では平成7年度の発掘調査において古墳時代の土馬が5頭出土している。比較的まとまって出土しており、その性格が注目される。

4. 土馬についてのまとめ

田井野遺跡の土馬は豊穴住居跡からという、特異な出土状況を呈している。主柱穴に接したピットからの出土で、床面よりも深いことから住居跡に伴うことが確実と判断される。

段丘上に立地する住居跡からの出土は、これまで一般的にいわれてきた水の祭祀とは異なる特徴といえる。県下における出土遺跡は溝・窯跡など多種多様で、土馬祭祀の多様性を示している。

県下の出土遺物について、その性格を総括した大平茂は、田井野遺跡ならびに東有年・沖田遺跡の土馬について、特異な出土状況に注目して保管例・または住居廐棄時の祭祀の可能性を指摘された。田井野遺跡の場合、①四肢を欠いており使用段階の状況を呈していること、②住居の主柱穴横のピットから出土していることなどから保管されていたものとは考えがたい。主柱穴に近似していることや当時の床面を意識して埋納されている点からも、住居廐棄時に用いられたと思われる。

全国的に見ても、住居跡から土馬が出土している例は少ないが、田井野遺跡出土の土馬は住居廐棄に伴う祭祀遺物と位置付けたい。

表6 兵庫県下土馬出土遺跡地名表

No.	遺跡名	所 在 地	焼成	遺 構	装飾	出土時期・備考
1	小戸	川西市小戸	土師		—	大和型。8世紀。
2	猪名川川床	尼崎市	土師		—	
3	三条九ノ坪	芦屋市三条町	土師 土師	包含層 包含層	飾? 裸	東部のみ残存。6~9世紀。 体部のみ。頭・尾・四肢欠損。
4	貴志	三田市貴志			—	
5	南台	三田市南台	須恵	包含層	飾	四肢を欠く。体部のみ出土。
6	下小名田	神戸市北区	上師 土師	溝 包含層	飾? 飾	奈良期? 首部分のみ出土。 体部:後足周辺のみ出土。
7	吉田南	神戸市西区森友	上師 土師	溝 包含層	飾 飾	奈良期。四肢を欠く。 体部のみ出土。
8	玉津田中	神戸市西区		洪水砂中	—	頭部のみ。
9	?	明石市明石公園内			—	
10	田井野	三木市久留美	土師	住居跡	飾	7世紀初頭 四肢を欠く。
11	今福	加古川市尾上町	土師		—	
12	白沢5号窯	加古川市白沢	須恵	窯跡	飾	7世紀初頭 四肢を欠く。
13	出土地未詳	加古川市			—	
14	?	姫路市船津町			—	
15	?	姫路市船津町我女房			—	
16	?	姫路市船津町清水池			—	
17	辻井	姫路市辻井			—	
18	本町	姫路市本町		包含層?	飾	播磨国府推定地。
19	御坊山1号	姫路市太市	須恵	窯跡	—	8世紀代?。
20	小丸	龍野市揖西町小丸	須恵		—	布施駅家跡。
21	?	上郡町西野山	土師	採集	裸	
22	東有年沖田	赤穂市東有年沖田	土師	住居跡	—	6世紀後半。足3本を欠損。
23	原小学校	赤穂市有年原田中	須恵		飾	頭・尾・脚3本を欠損。
24	西木ノ部	西紀町西木ノ部	須恵	包含層	飾	頭~胴部のみ残存。
25	?	山東町滝田	土師		—	
26	米里	八鹿町	土師	溝	裸	ほかに出土地点不明の破片3点。
27	伊佐	八鹿町伊佐	須恵 土師		—	各1点づつ採集。
28	?	日高町久斗	須恵	採集	—	
29	立石	豊岡市立石			—	
30	宮井	豊岡市宮居	須恵		裸	
31	市尾	豊岡市森尾			—	
32	袴狹	出石町袴狹字内田	土師	包含層	飾	頭部のみ残存。
33	上脇	神戸市西区伊川谷町	土師	包含層	飾	5体分出土。7世紀代。
34	芝崎	神戸市西区				兵庫県教育委員会調査。
35	高丘3号窯	明石市	土師	窯跡		
36	?	姫路市四郷町見野				
37	大市山	豊岡市賀陽	土師			豊岡市教育委員会調査。

表7 握立柱建物跡一覧表（三木市教育委員会調査分）

西a区

造構名	間数	梁間長	桁行長	床面積	主軸方向	検出状況・備考
S B01	2×4	3.8	6.8	25.8	N-60°-E	S B03を切る
S B02	3×4	4.0	6.8	27.2	N-80°-E	隅柱穴に根カラミ石
S B03	2×3	3.8	5.8	22.0	N-88°-E	
S B04	2×3	3.4	3.3	11.2	N-66°-E	梁と桁の柱間距離が異なる
S B05	2×2	3.0	3.1	9.3	N-40°-E	総柱
S B06	●2×4	3.4	4.5★	15.3	N-28°-E	削平で東・南柱穴列を失う
S B07	●2×4	2.0★	6.3★	12.6	N-32°-W	一部、調査区外へ延びる

西b区

造構名	間数	梁間長	桁行長	床面積	主軸方向	検出状況・備考
S B01	2×3	4.3	6.0	25.8	N-60°-W	北西隅柱穴に根カラミ石
S B02	2×3	4.8	6.8	32.6	N-30°-E	
S B03	2×2	3.0	3.2	9.6	N-27°-W	
S B04	2×3	3.4	4.5	15.3	N-26°-W	4隅柱穴に根カラミ石
S B05	2×3	3.3	4.9	16.2	N-46°-E	
S B06	●2×2	3.1★	3.7★	11.5	N-74°-E	削平で南柱穴列を失う

西c区

造構名	間数	梁間長	桁行長	床面積	主軸方向	検出状況・備考
S B01	2×5	3.6	7.5	27.0	N-77°-E	
S B02	3×5	5.0	9.0	45.0	N-81°-E	
S B03	2×3	3.0	3.9	11.7	N-83°-W	北東隅柱穴が調査区外
S B04	2×3	4.0	6.3	25.2	N-80°-E	
S B05	2×3	4.6	6.6	30.4	N-80°-E	
S B06	3×4	4.5	6.7	30.2	N-48°-E	
S B07	2×2	3.4	4.4	15.0	N-47°-W	中央にツカ柱
S B08	●2×3	1.8★	2.7★	4.9	N-84°-E	削平で南柱穴列を失う
S B09	●2×4	4.6★	3.5★	16.1	N-70°-E	削平で南柱穴列を失う
S B10	●3×4	4.8★	4.0★	19.2	N-68°-E	削平で南柱穴列を失う
S B11	2×3	3.4	6.9	23.5	N-87°-W	北隅柱穴が調査区外
S B12	2×3	3.4	3.9	13.3	N-62°-E	
S B13	2×3	3.0	3.9	11.7	N-66°-E	
S B14	2×3	3.6	5.7	20.5	N-72°-E	
S B15	3×3	4.8	4.8	23.0	N-48°-E	
S B16	2×3	3.8	6.3	23.9	N-9°-W	

表8 摂立柱建物跡一覧表（兵庫県教育委員会調査分）

造構名	間数	梁間長	桁行長	床面積	主軸方向	検出状況・備考
S B01	2×3	3.65	5.90	21.5	N-24°-E	根ガラミ石あり。
S B02	2×3	3.80	5.90	22.4	N-31°-W	根ガラミ石あり。
S B03	2×4	4.20	9.50	39.9	N-59°-E	根ガラミ石あり。
S B04	1×2	2.20	3.80	8.36	N-59°-W	
S B05	●2×2	3.15	1.45	4.57	N-5°-W	総柱。桁方向調査区外へ。
S B06	2×2	2.75	3.00	8.25	N-10°-E	柱根遺存。
S B07	2×2	3.00	3.00	9.05	N-10°-W	柱根遺存。
S B08	2×2	3.50	3.60	12.1	N-22°-E	柱根遺存。根ガラミ石。
S B09	2×1	2.80	3.40	9.55	N-16°-W	柱根遺存。排水溝を伴う。
S B10	1×3	2.50	5.50	13.9	N-0°-W	柱根遺存。
S B11	1×3	3.18	4.55	14.5	N-16°-W	柱根遺存。
S B12	2×3	4.20	5.35	22.5	N-0°-W	柱根遺存。
S B13	1×2	3.40	5.40	11.6	N-6°-E	柱根遺存。東柱あり。
S B14	●2×1	2.95	2.25	6.63	N-15°-W	桁方向は調査区外へ。
S B15	●1×2	2.50	3.10	7.50	N-35°-W	柱根遺存。

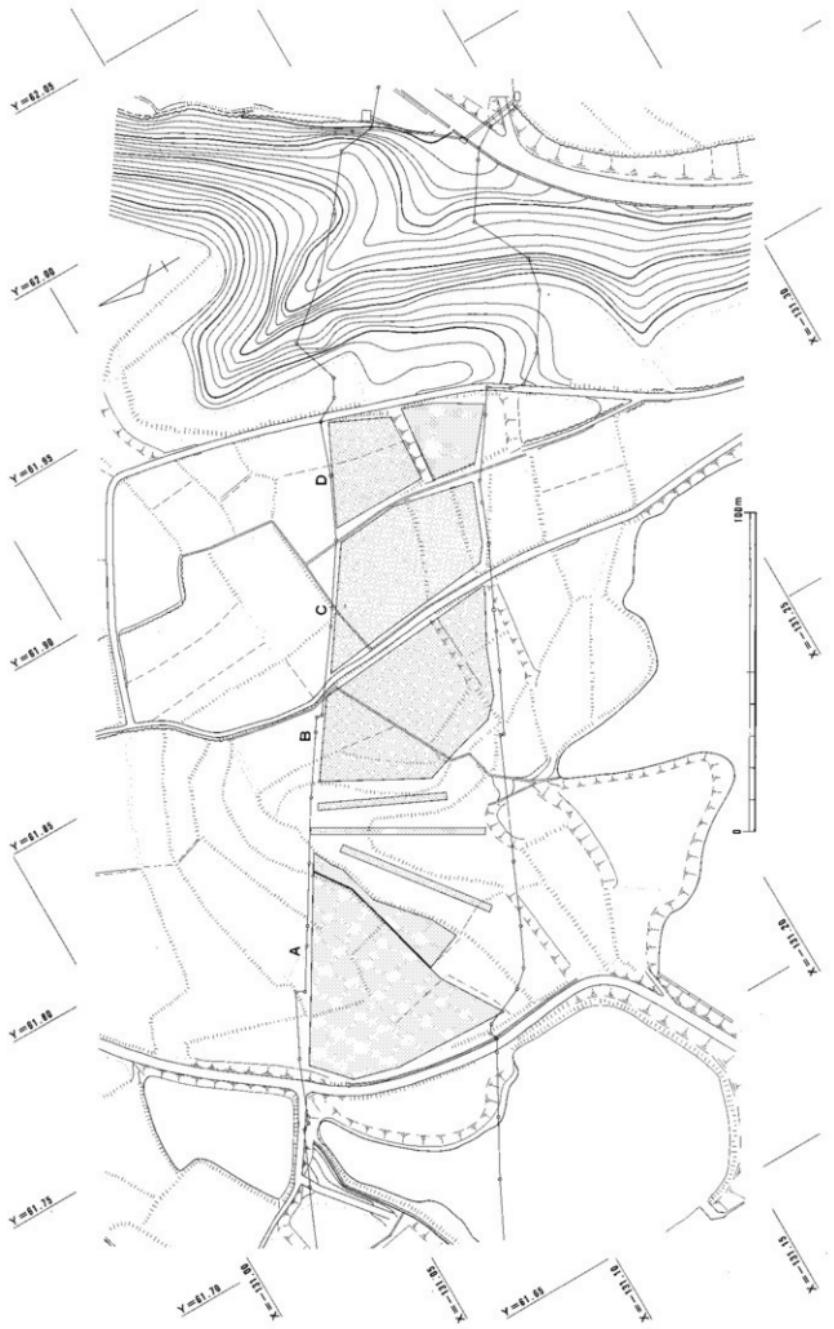
●は調査区外に造構がのびるもの

★は残存長

<参考文献>

- 大場磐雄「上代馬形遺物に就いて」『考古学雑誌』27-4 (1937)
- 大場磐雄「上代馬形遺物再考」『國學院雑誌』67-1 (1967)
- 前田豊邦「土製馬に関する試論」『古代学研究』53号 古代学研究会 (1968)
- 小笠原好彦「土馬考」『物質文化』(1975)
- 泉森 岐「大和の土馬」『槇原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』槇原考古学研究所 (1975)
- 水野正好「馬・馬・馬—その語りの考古学ー」『文化財学報』II 奈良大学文学部文化財学科 (1983)
- 小田富士雄 真野和夫「土馬」『神道考古学講座』第3巻 (1983)
- 「祭祀関係遺物出土地地名表—共同研究[古代の祭祀と信仰]附篇」「国立歴史民俗博物館 研究報告 第7集」国立歴史民俗博物館 (1985)
- 大平 茂「考古学上からみた馬の祭祀」『兵庫の絵馬』兵庫県立歴史博物館 (1986)
- 金子裕之「土馬」「律令祭祀遺物集成」(1988)
- 大平 茂「播磨の祭祀遺跡—風土記にみる神まつりの背景ー」『風土記の考古学』(1994)
- 赤穂市教育委員会「東有年・沖田遺跡現地説明会資料」(1990)
- なお調査成果について、赤穂市教育委員会 藤田忠彦氏のご教示をうけた。

図 版



全面調査区・確認調査トレーンチ配置図

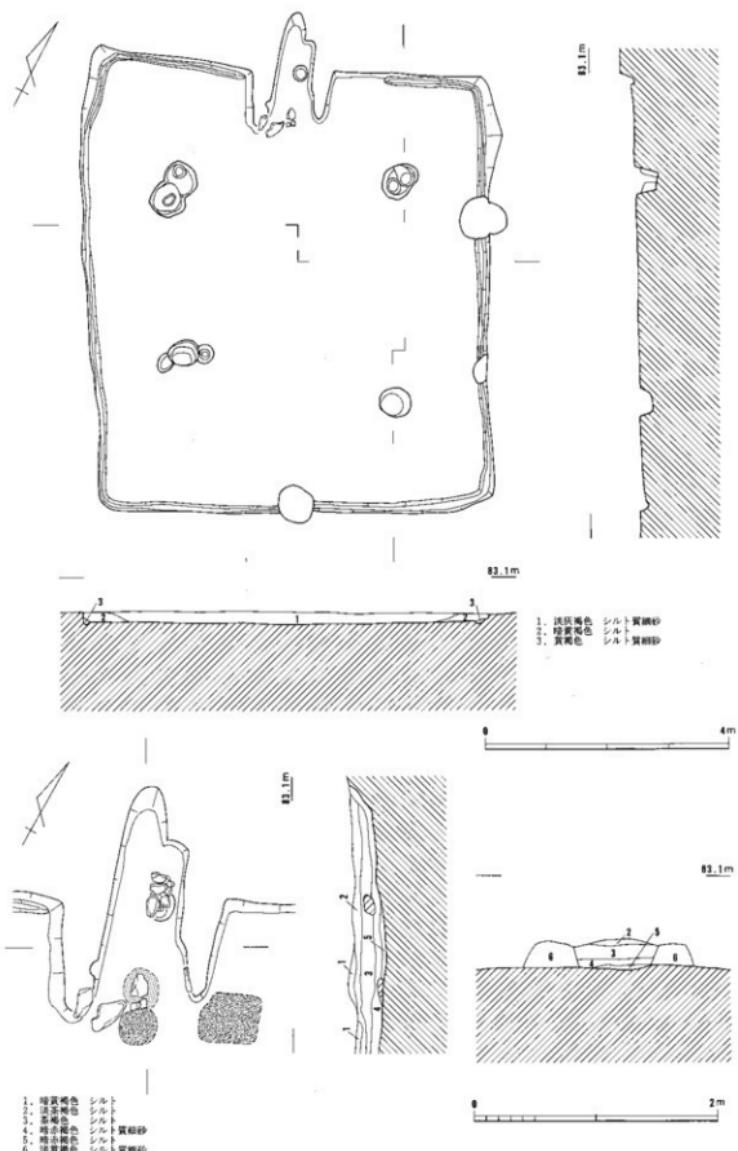
図版 2



田井町造跡全体図 (三木市調査分合)

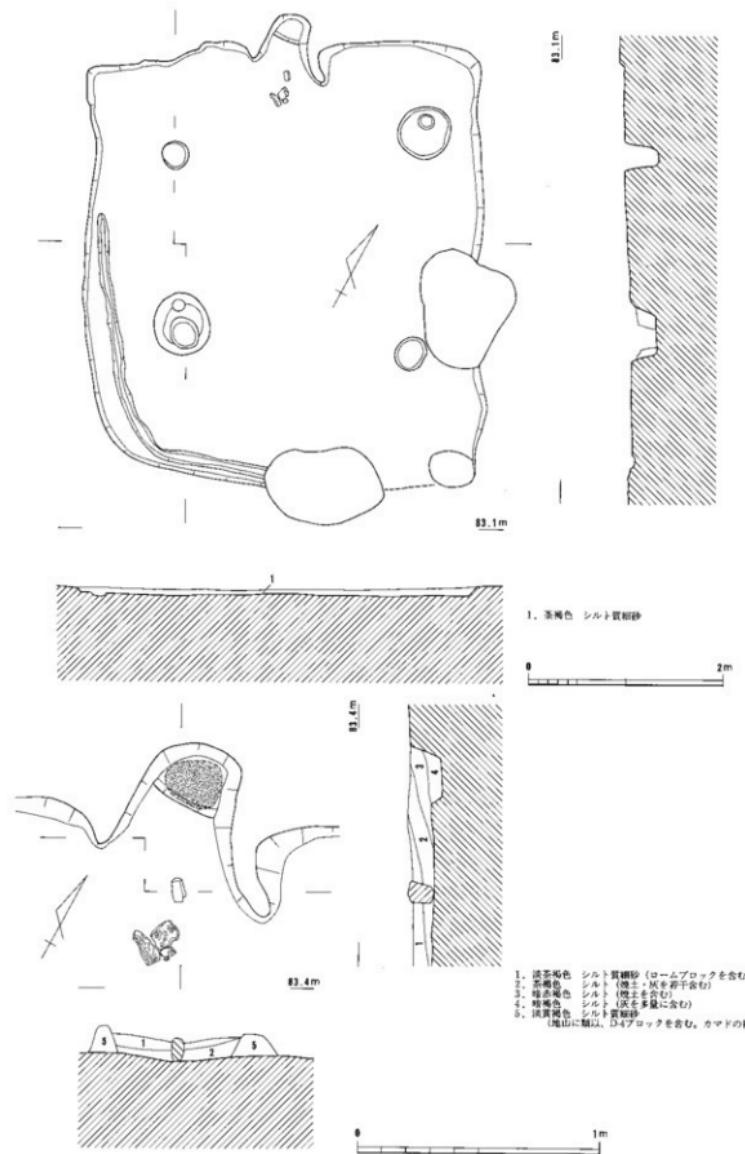


A地区全体図

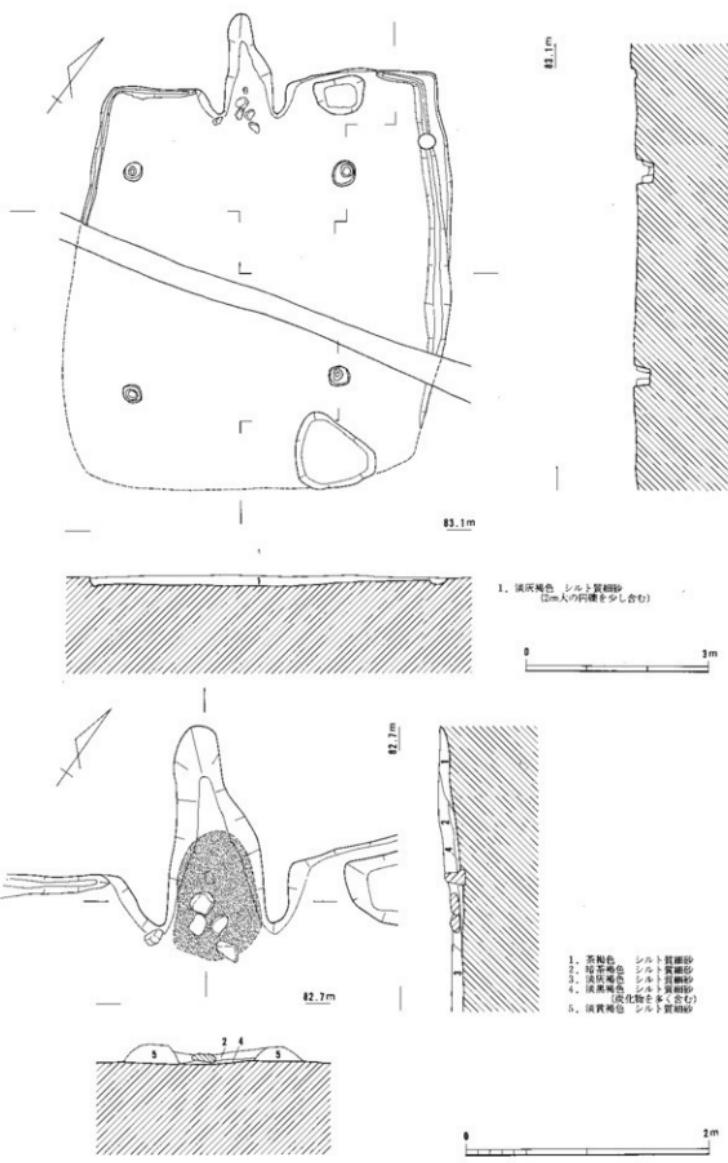


SH01

図版 5

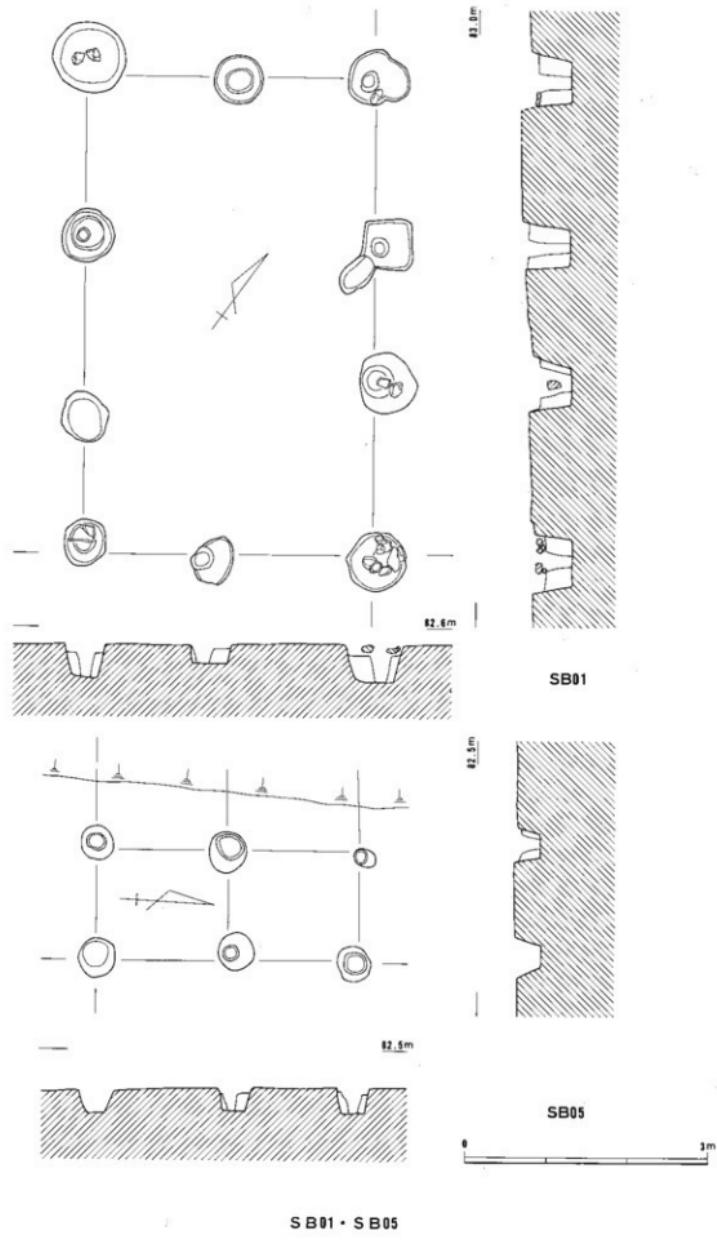


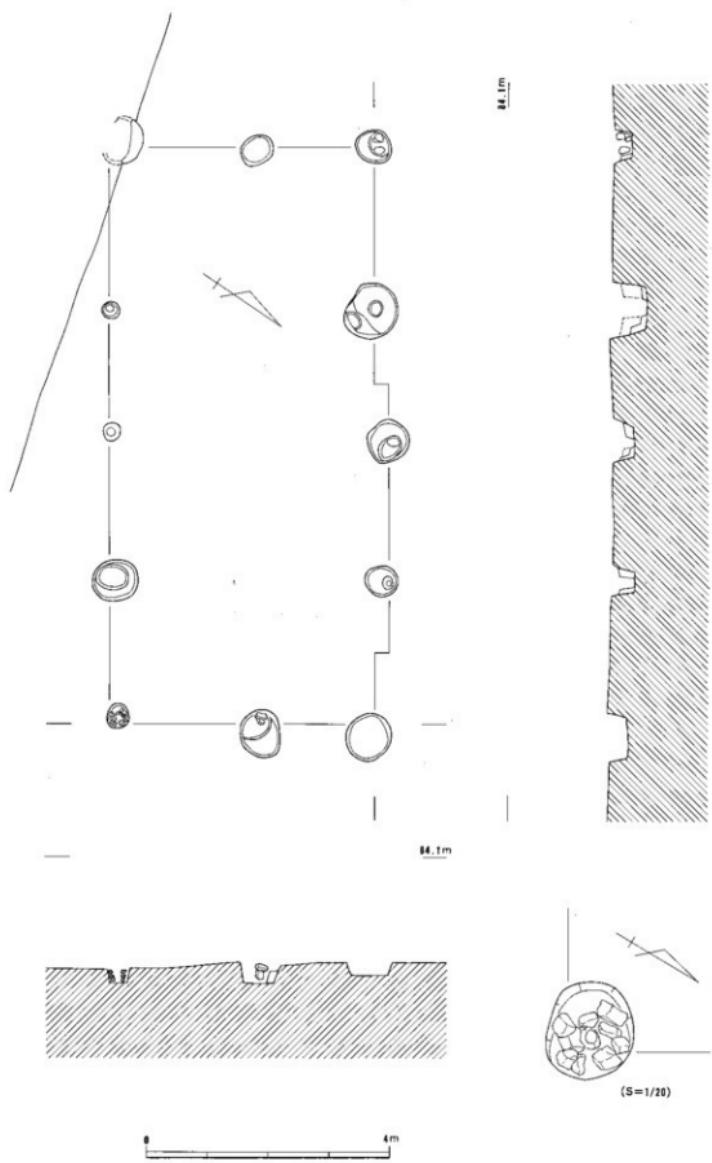
SH02



SH03

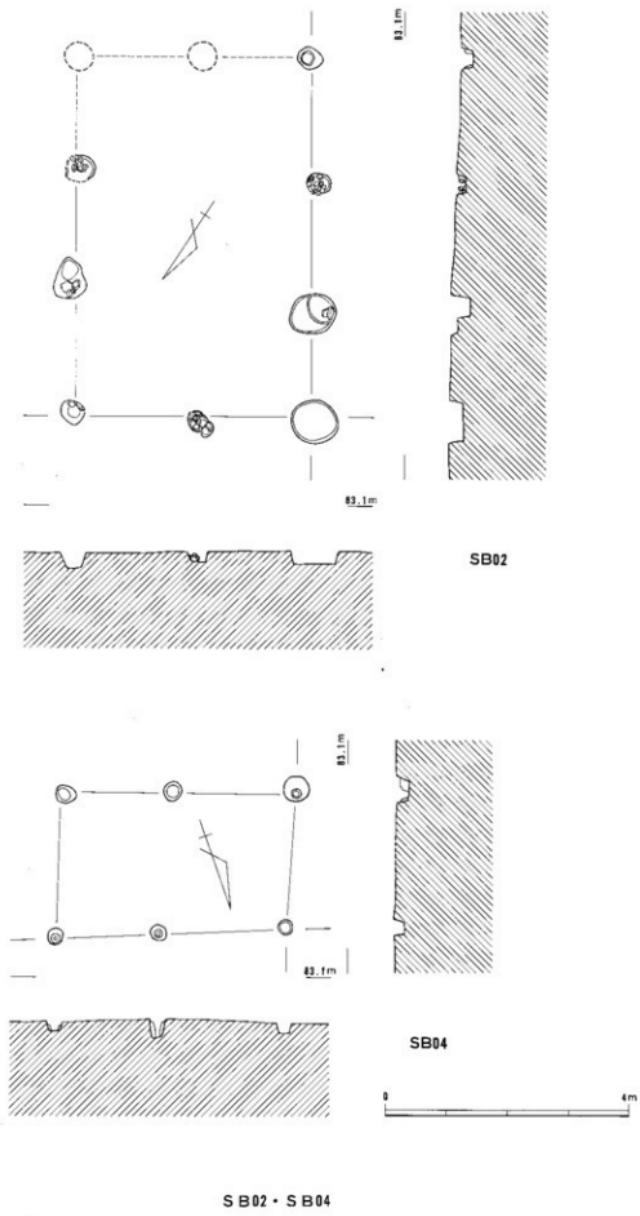
図版 7

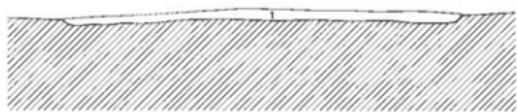
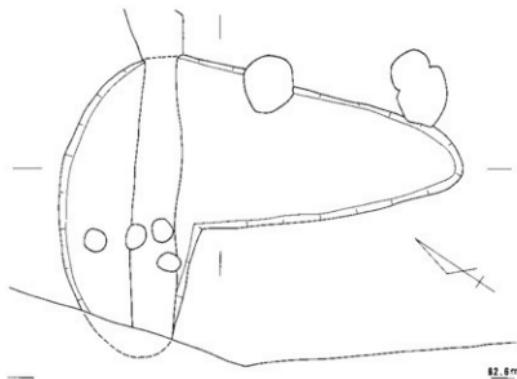




SB03

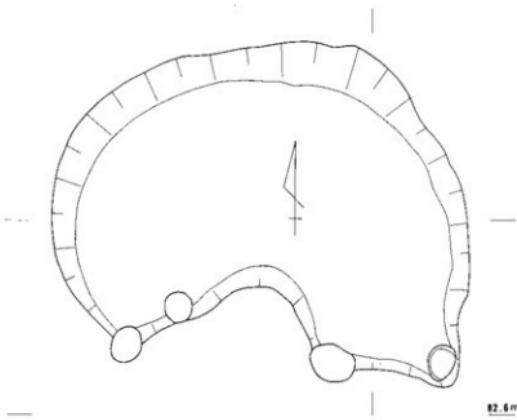
図版 9



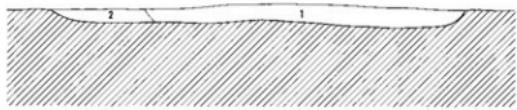


SK03

1. 黄褐色 硫化シルト



2.6 m



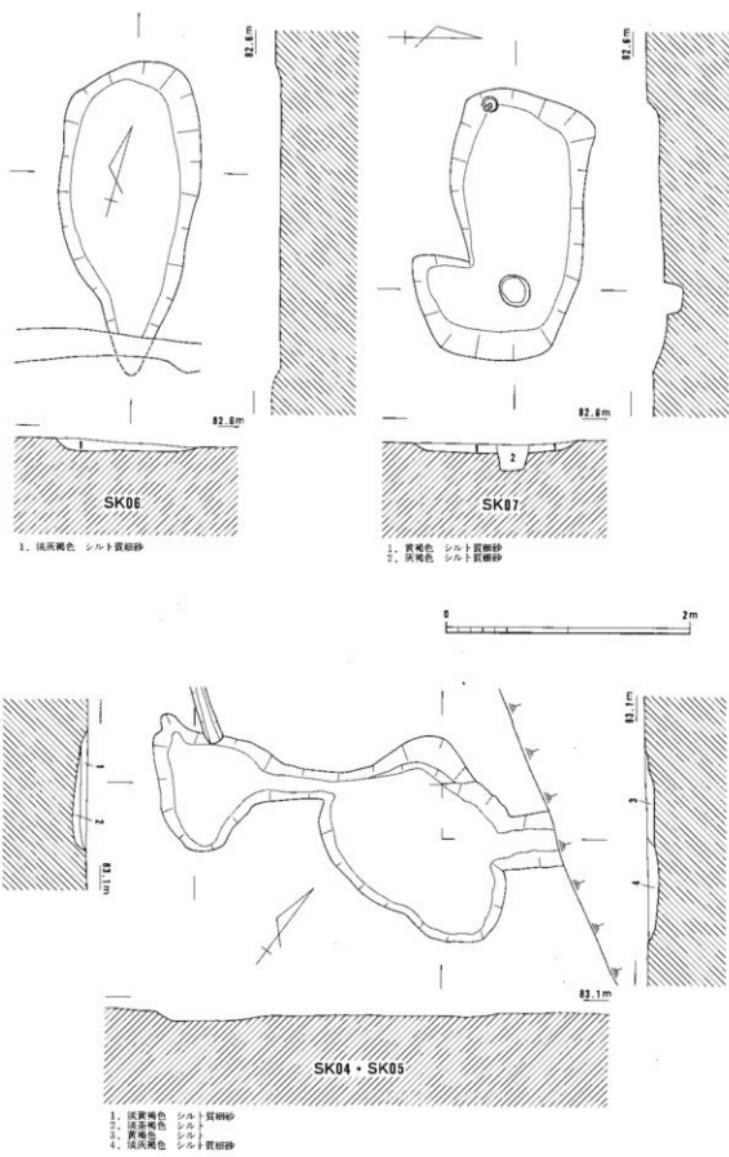
SK08

1. 黄褐色 シルト質粘砂
2. 黄灰褐色 シルト質粘砂

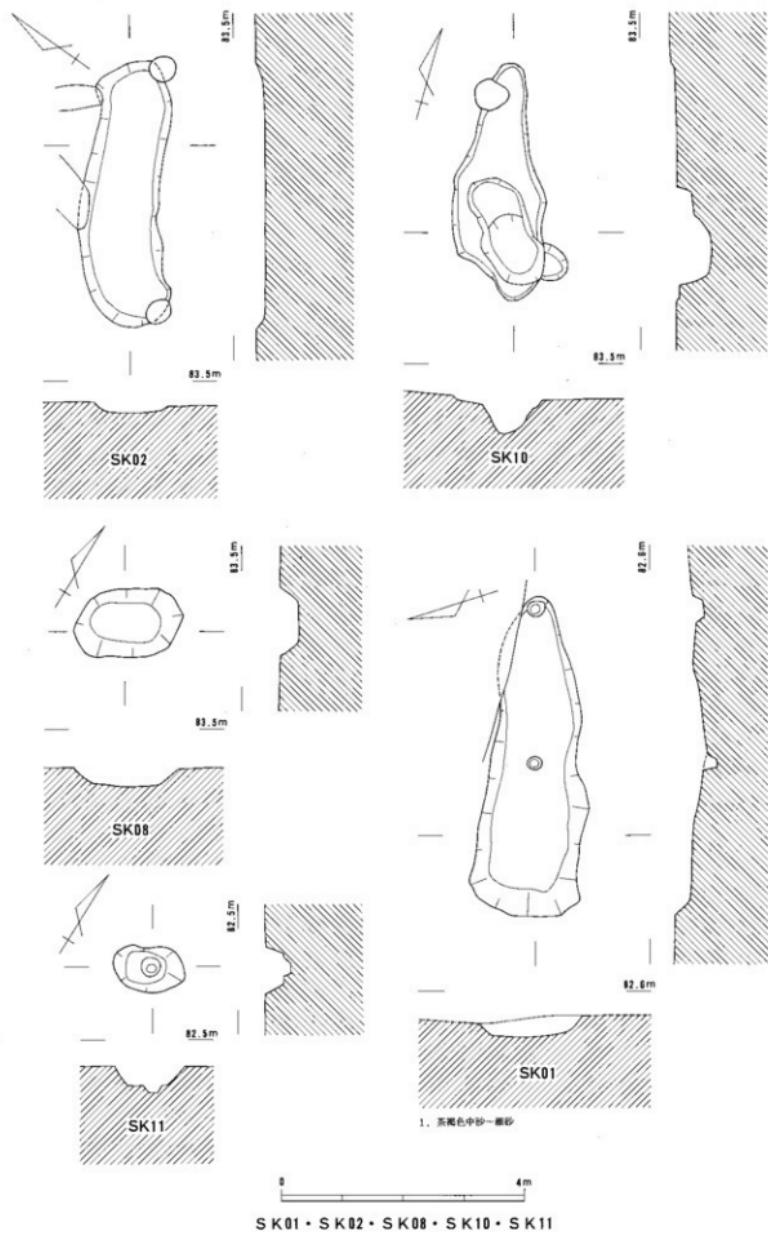
SK03・SK08



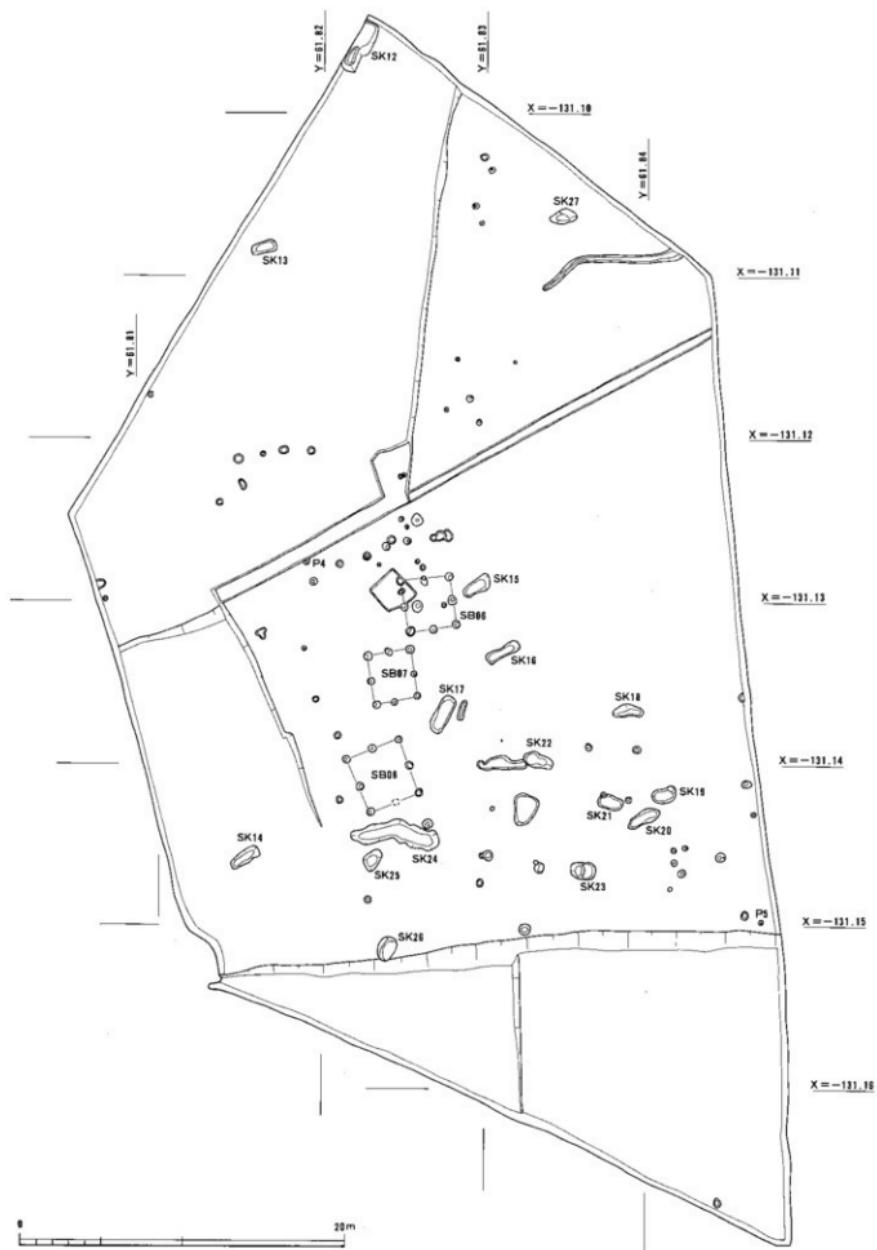
図版11



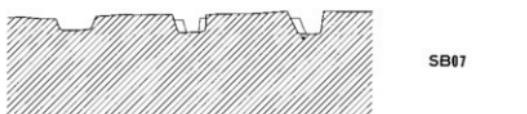
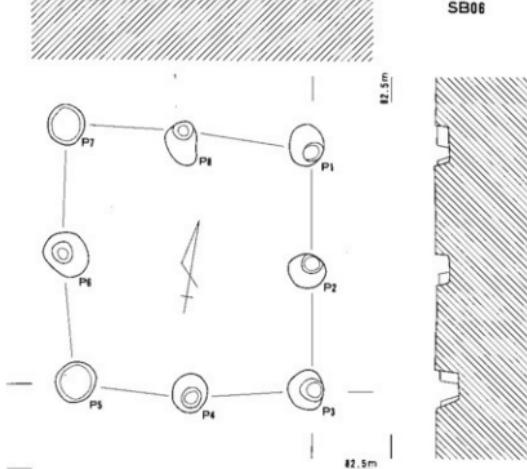
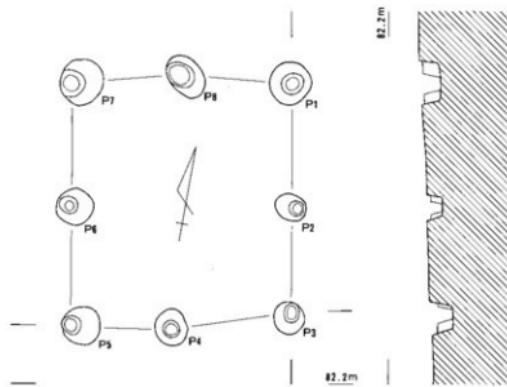
SK04~SK07



図版13



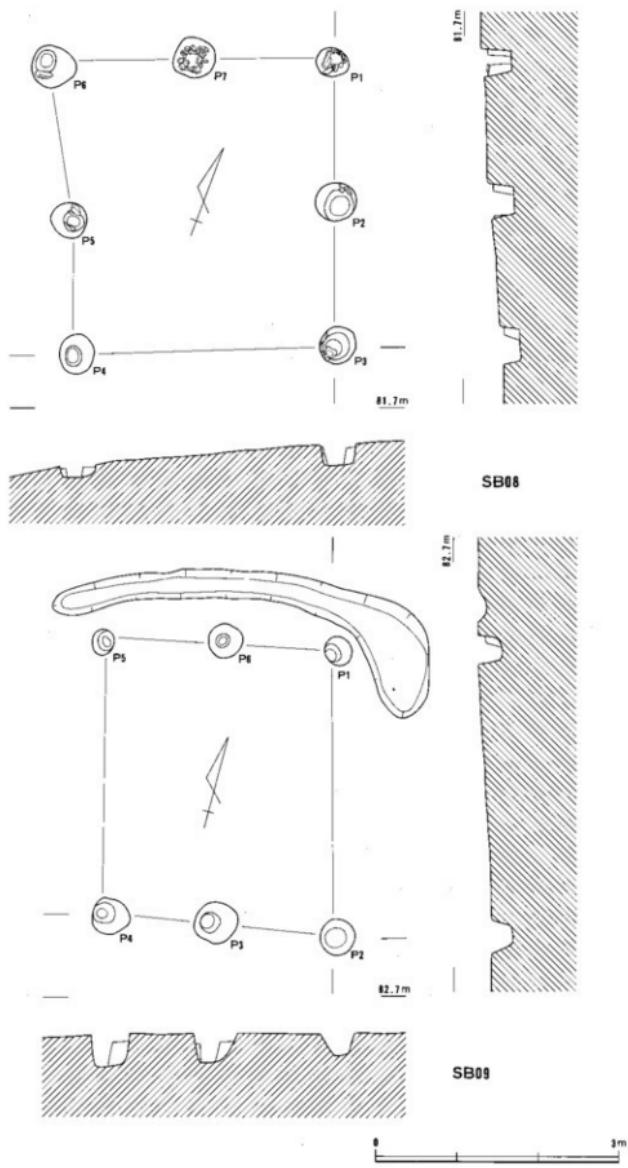
B地区全体図

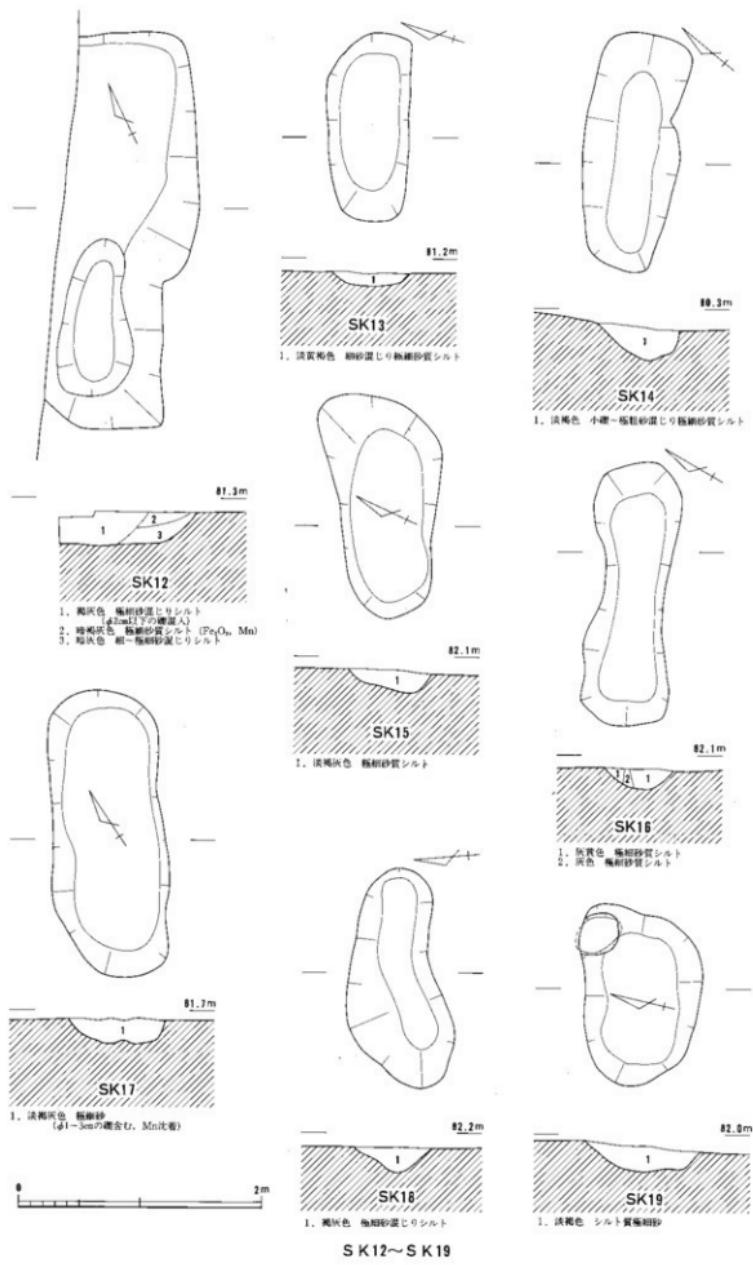


0 1m

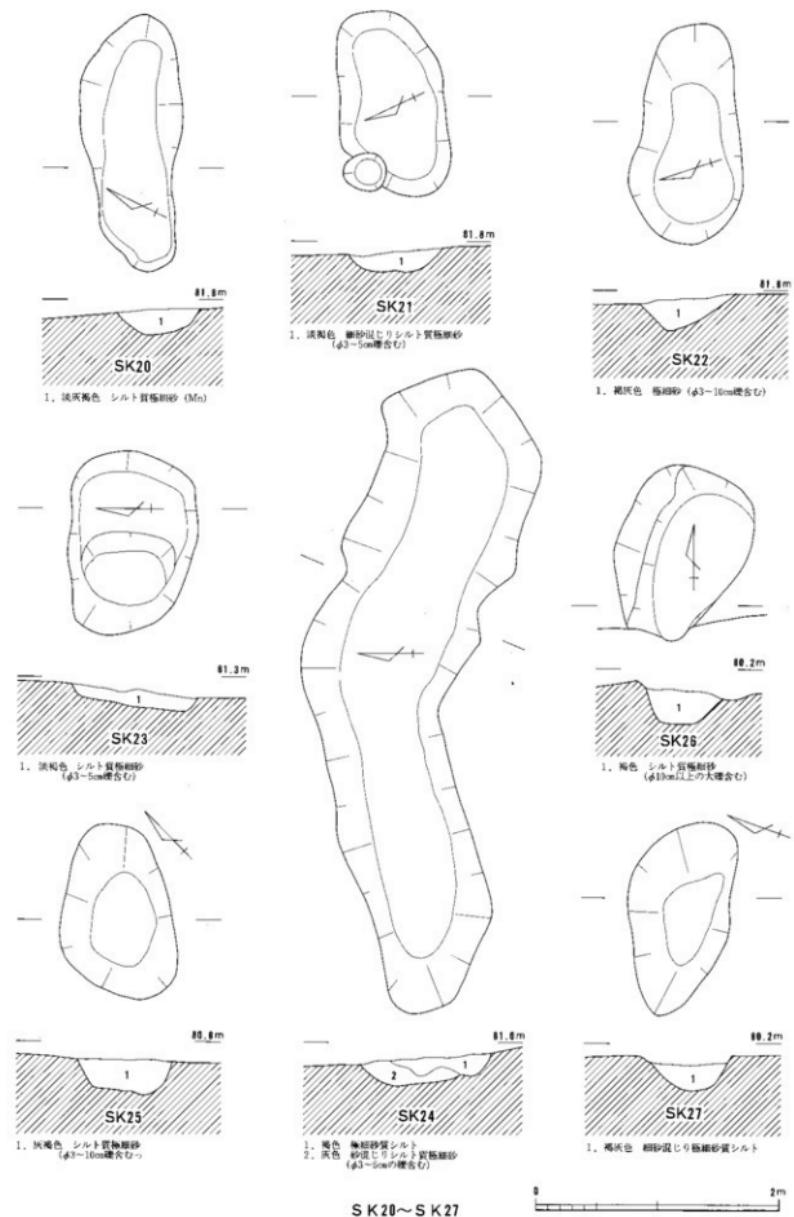
SB06 • SB07

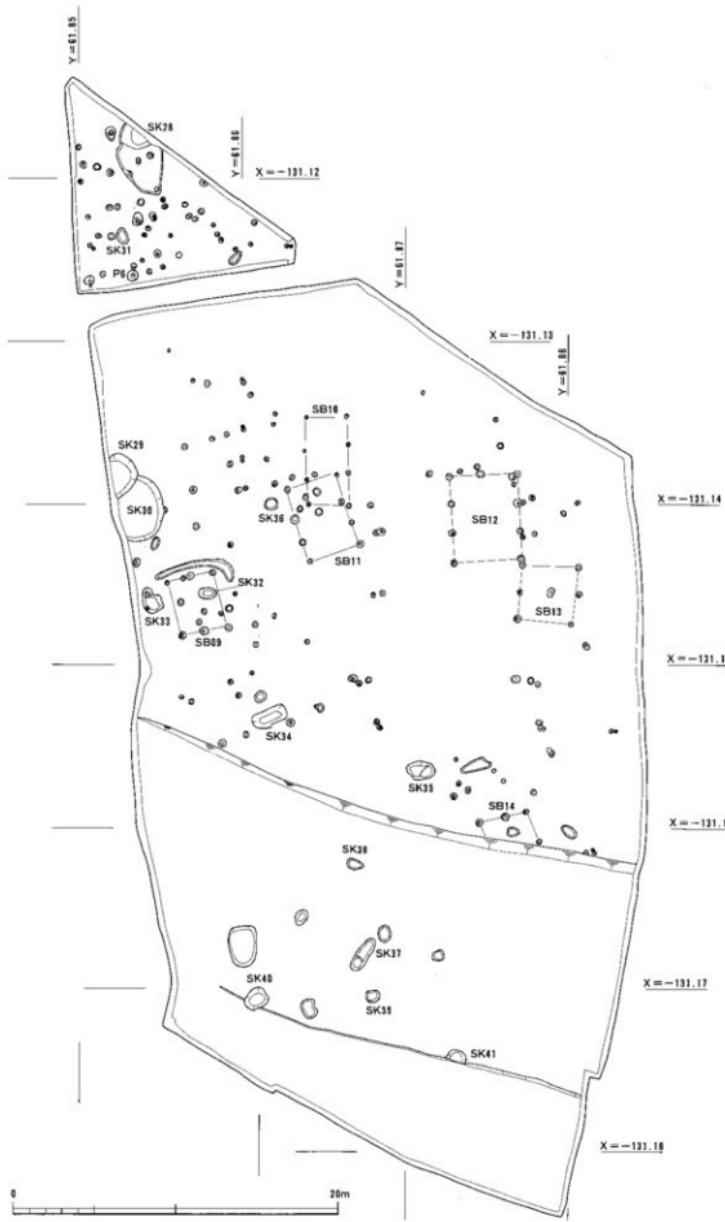
図版15





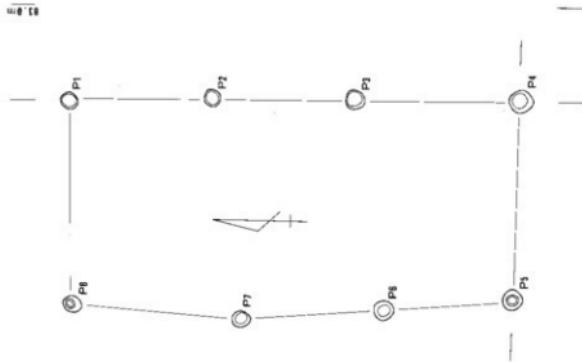
図版17





C地区全体図

図版19



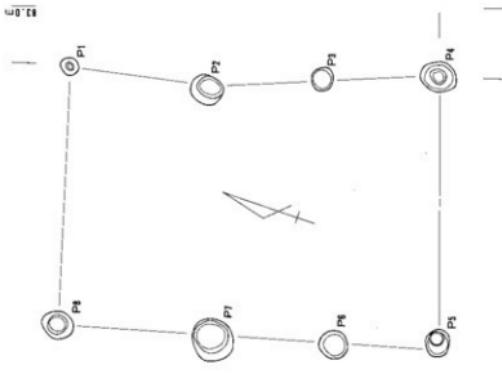
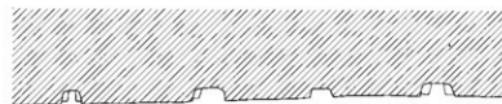
SR10

2m



SB11

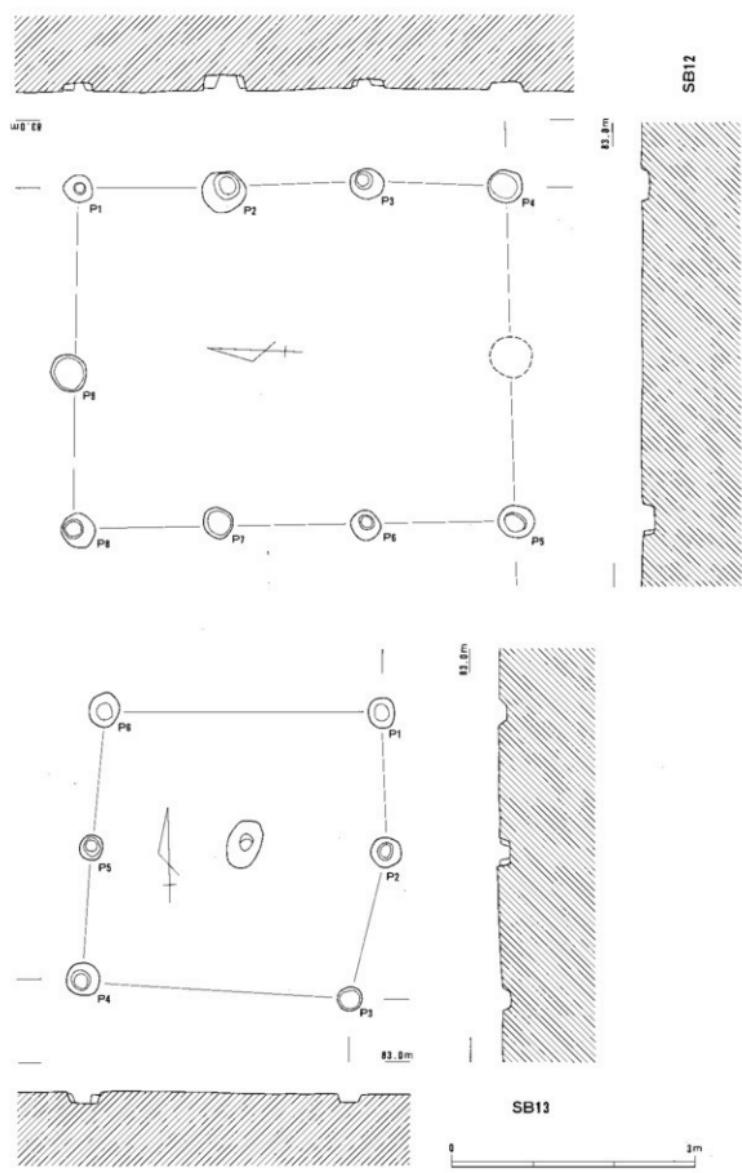
SB10・SB11



SB10

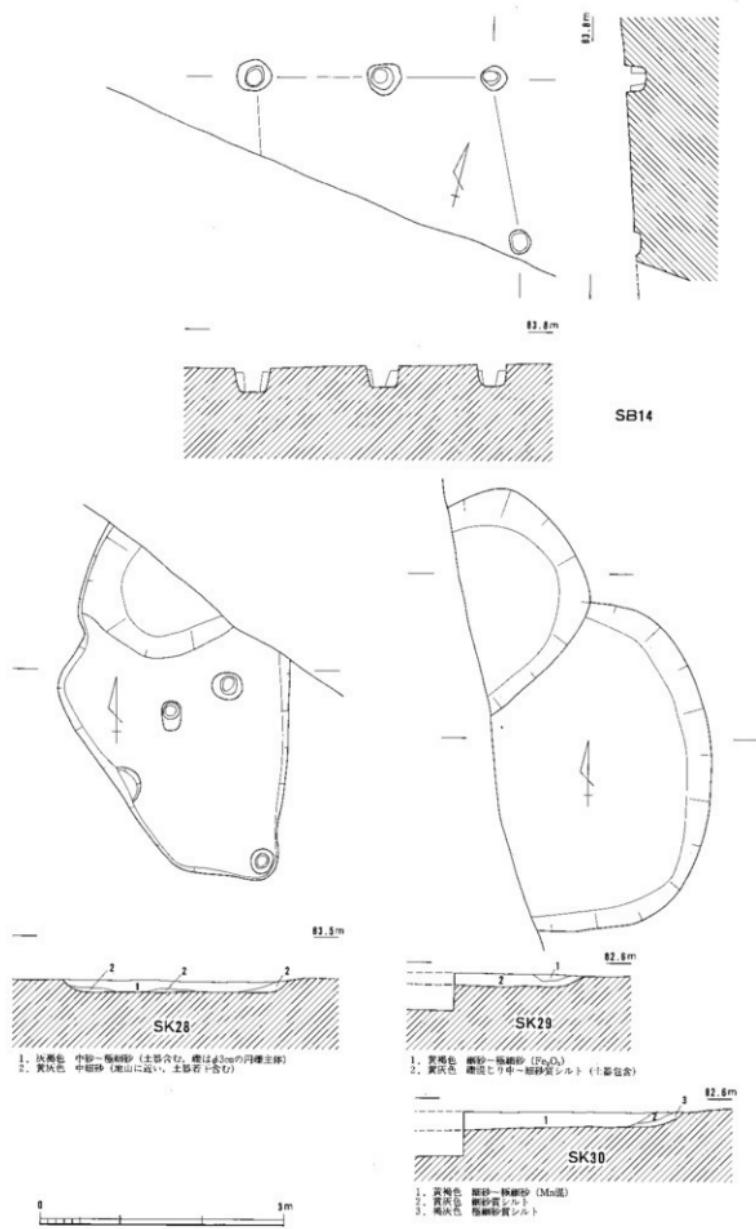
SB11

2m

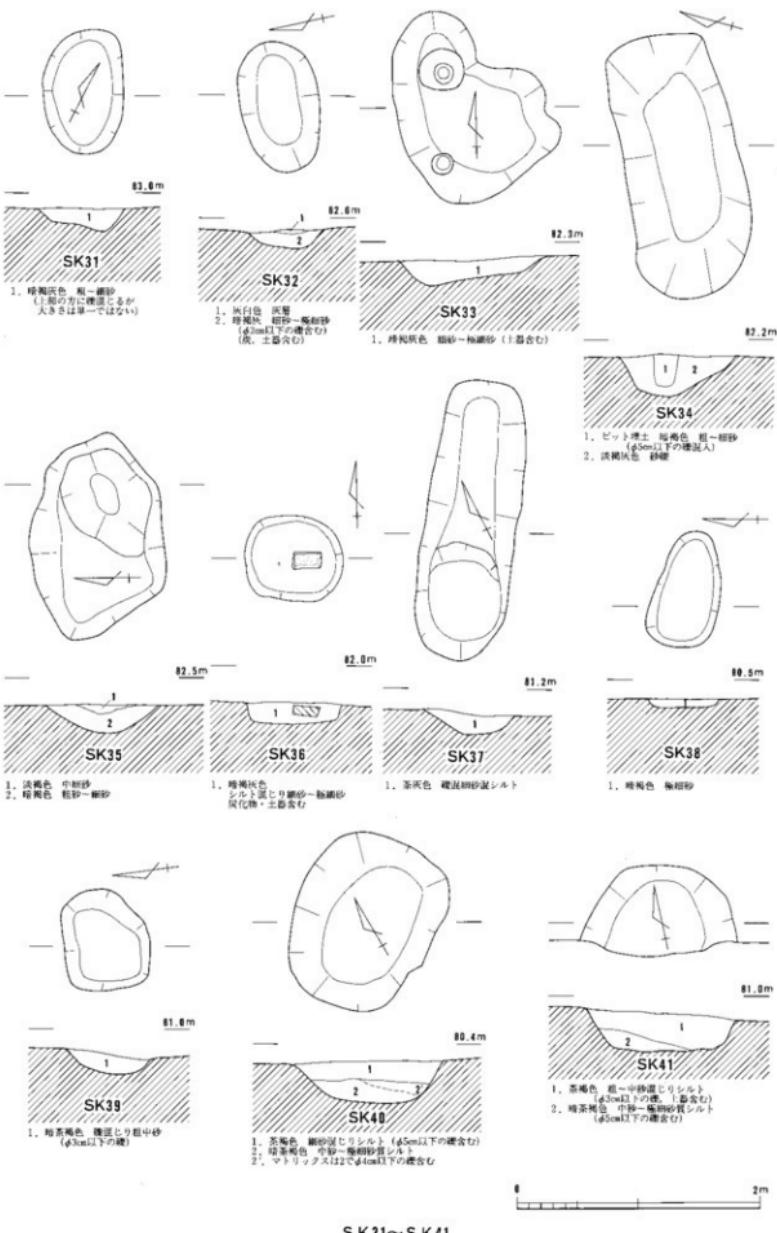


SB12 • SB13

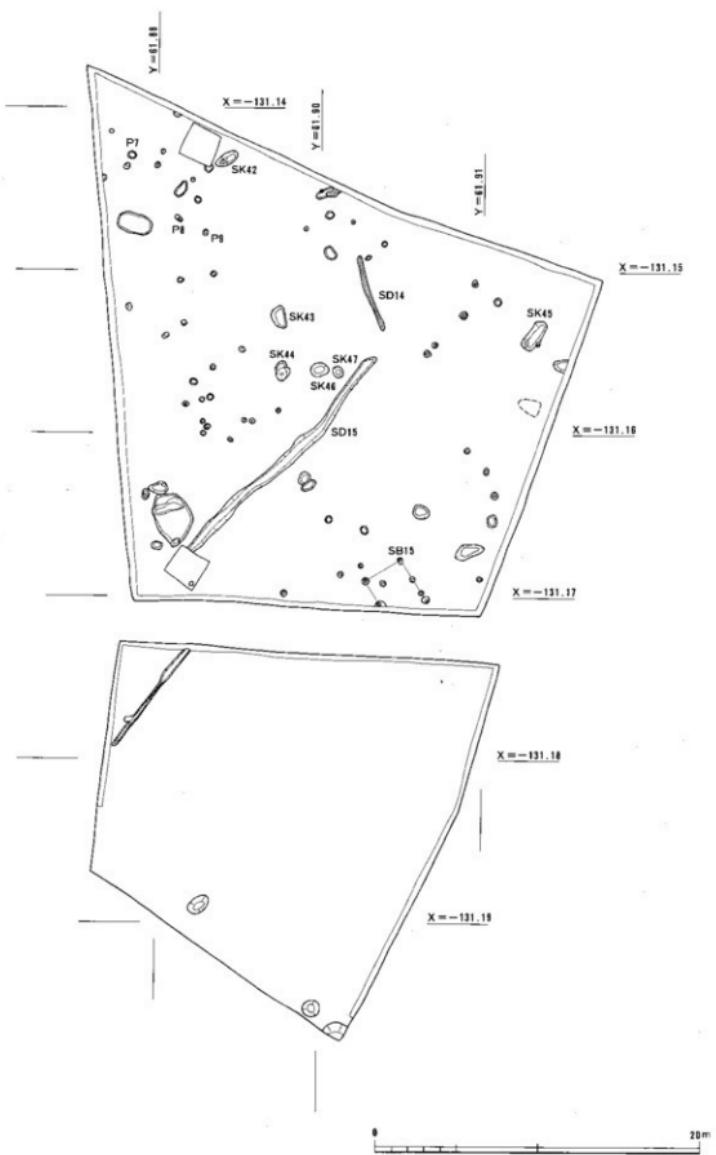
図版21



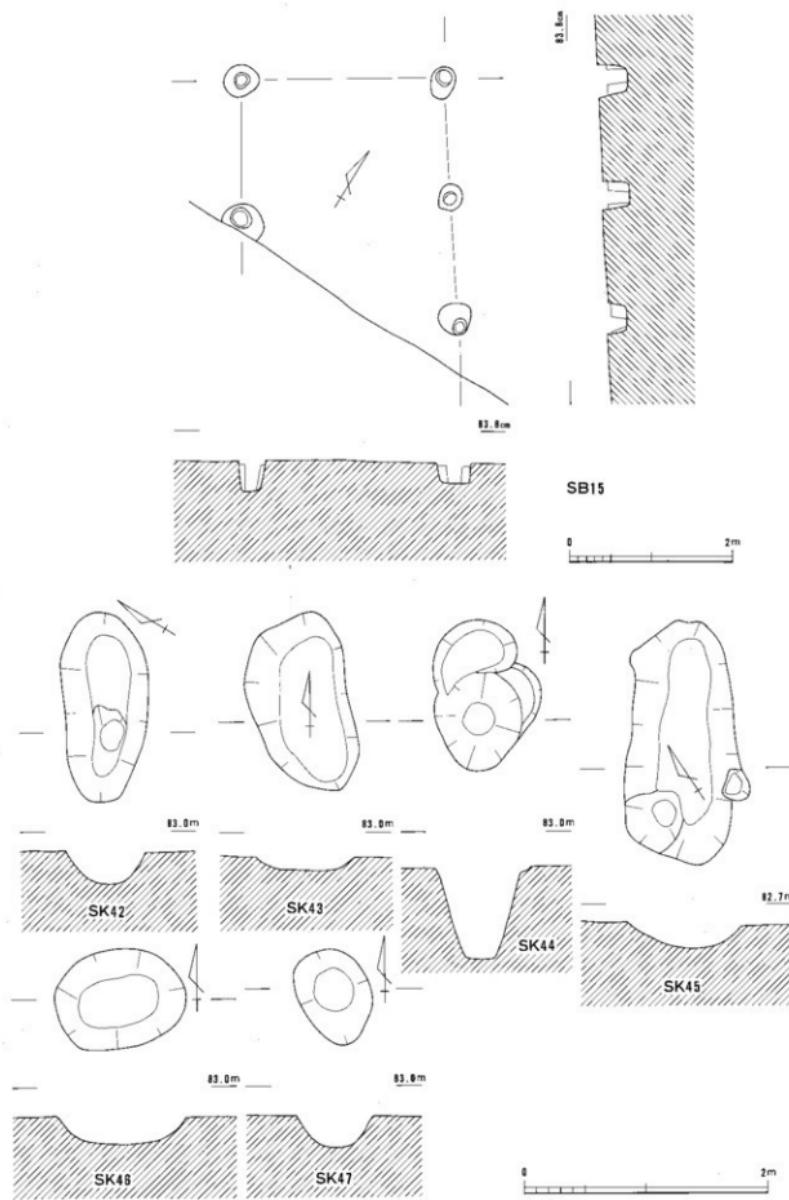
S B14 • S K28~S K30

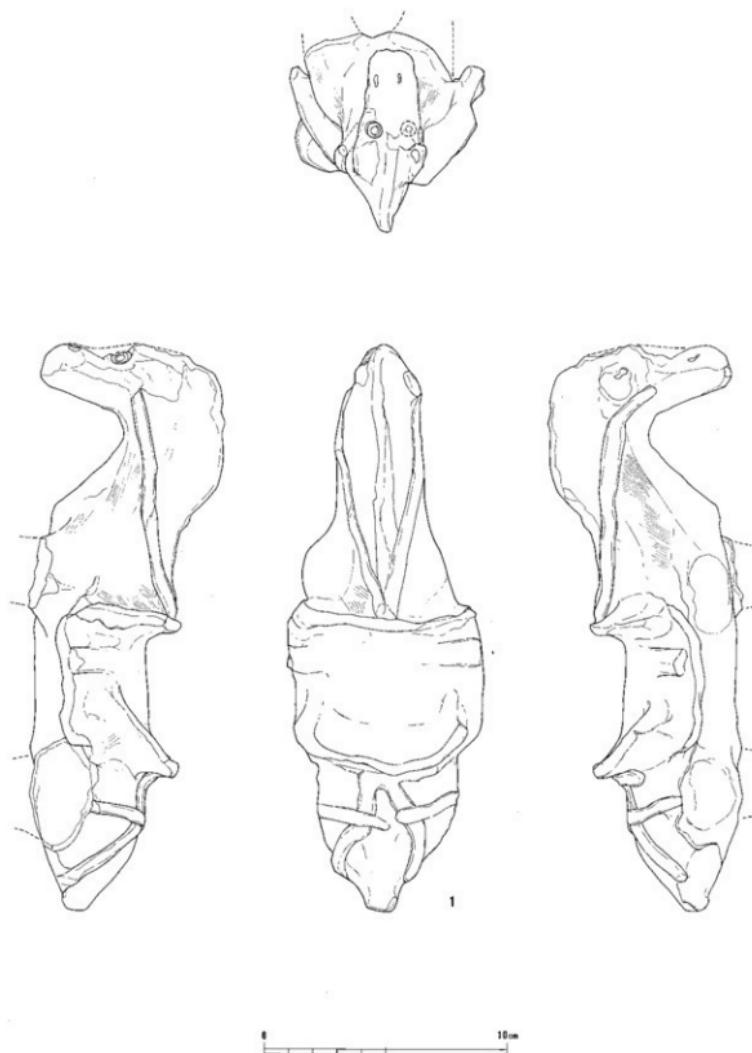


図版23

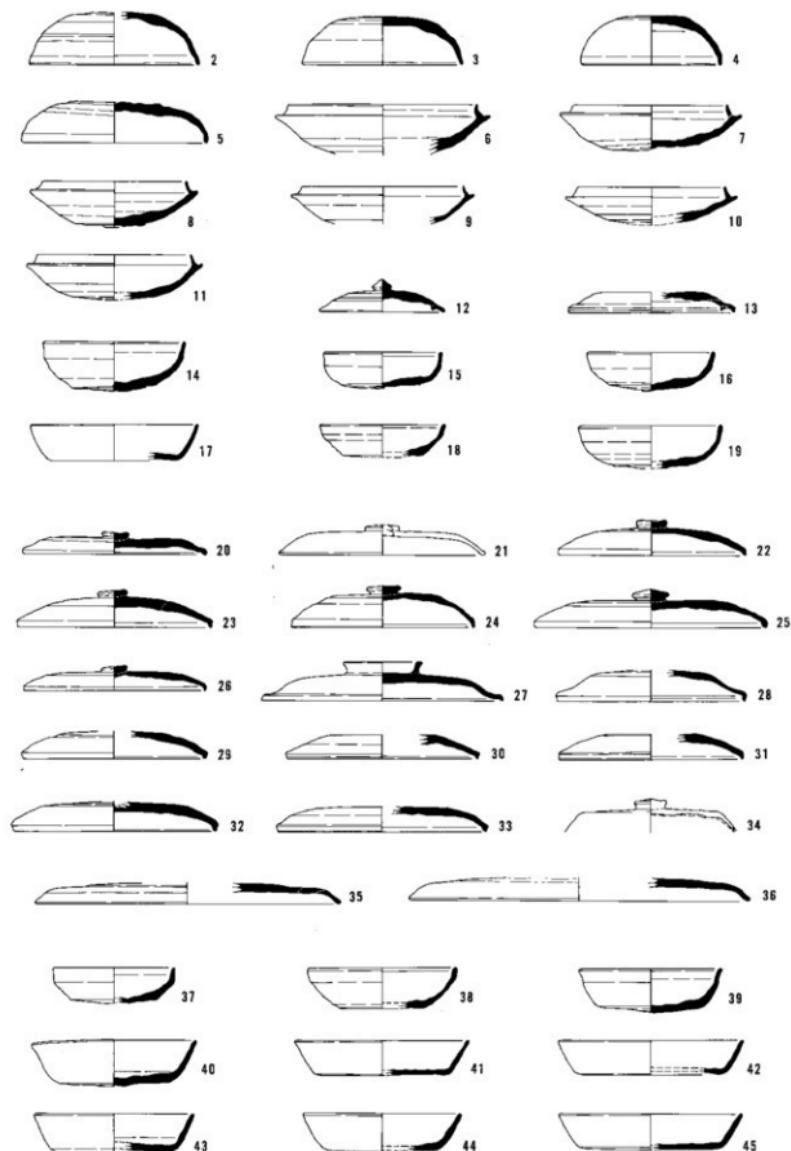


D地区全体図

**SB15・SK42～SK47**



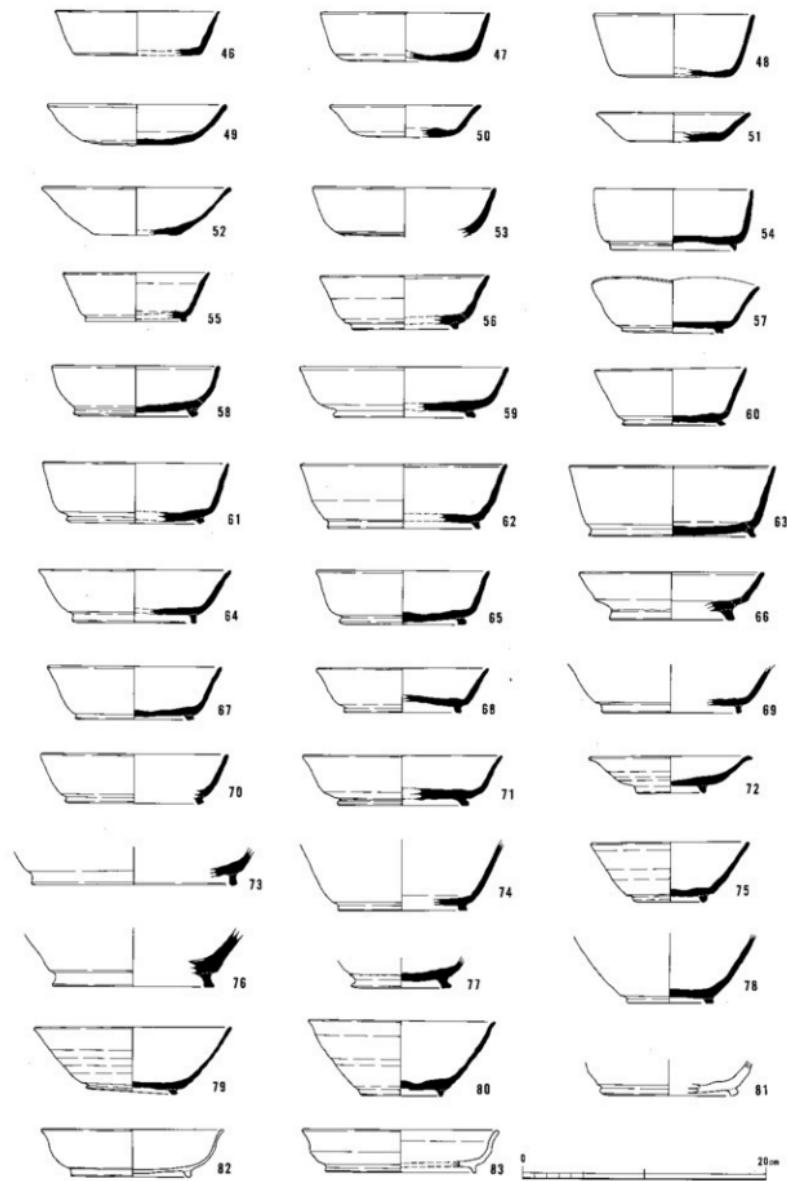
出土遺物(1)



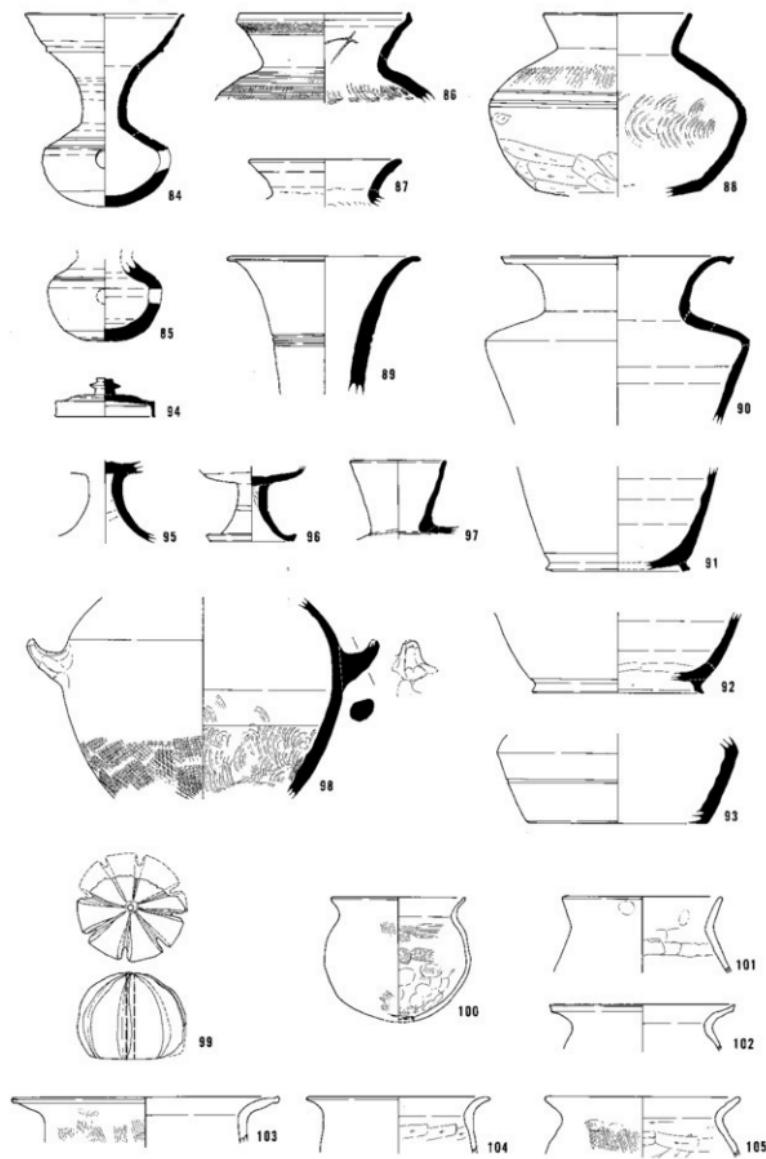
0 20cm

出土遺物(2)

図版27



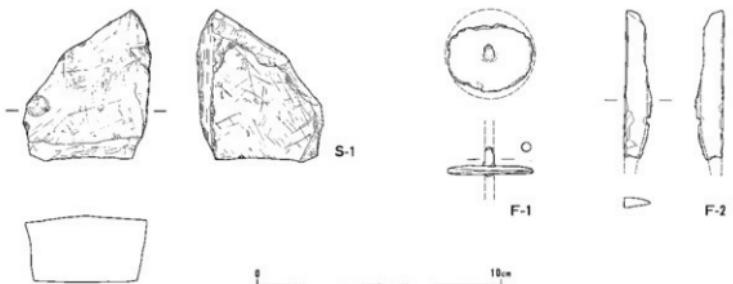
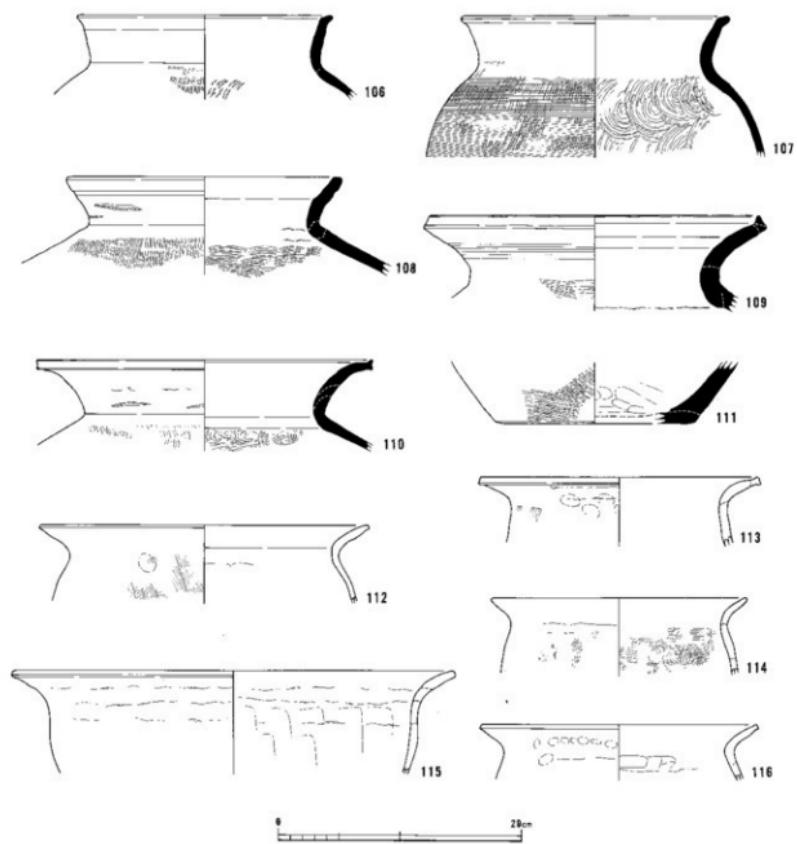
出土遺物(3)



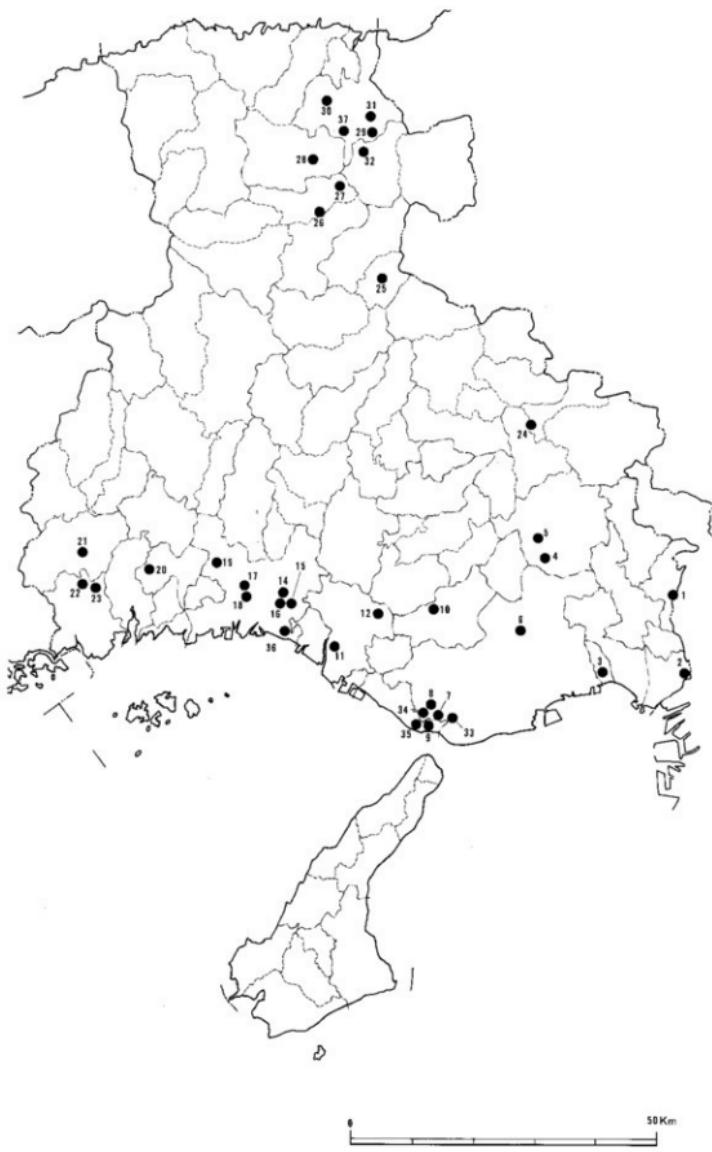
出土遺物(4)

0 20cm

図版29

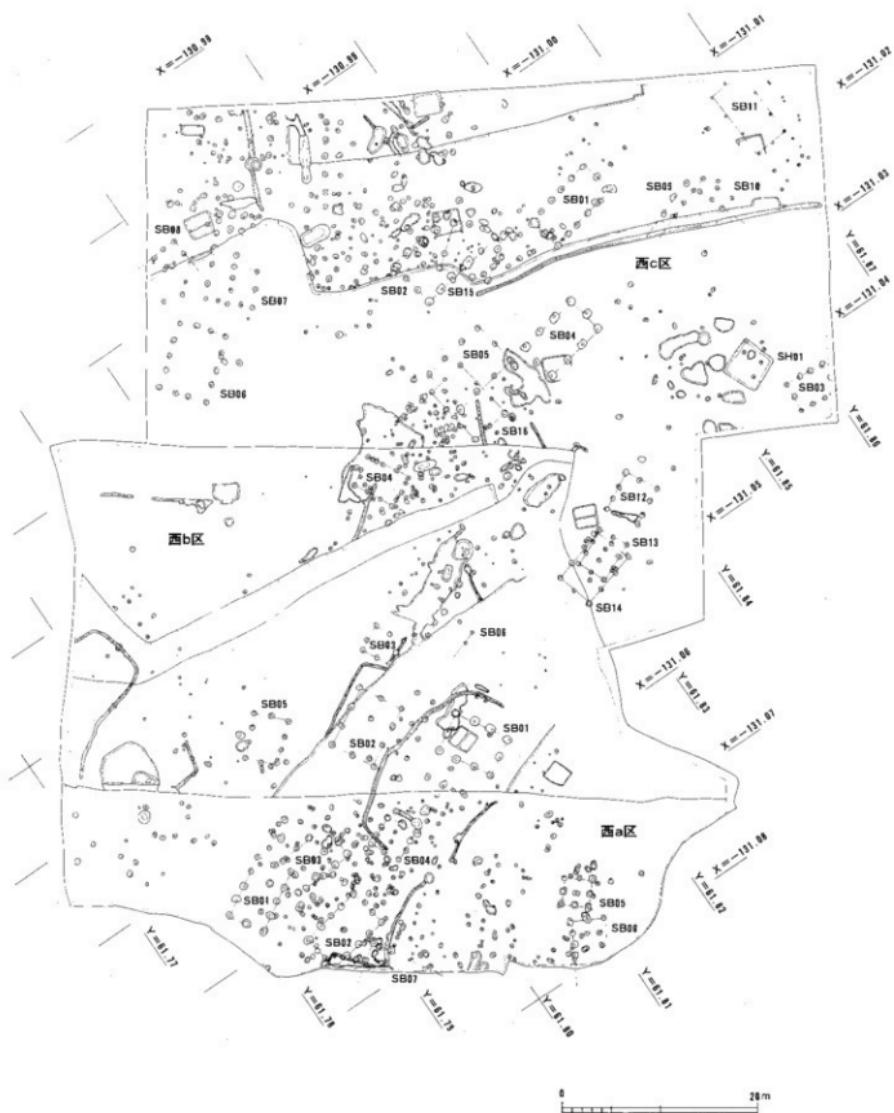


出土遺物(5)



県下出土土馬位置図

図版31



平成3年三木市調査田井野遺跡全体図

写真図版



田井野遺跡の位置（国土地理院撮影）



遺跡の遠景（南から）



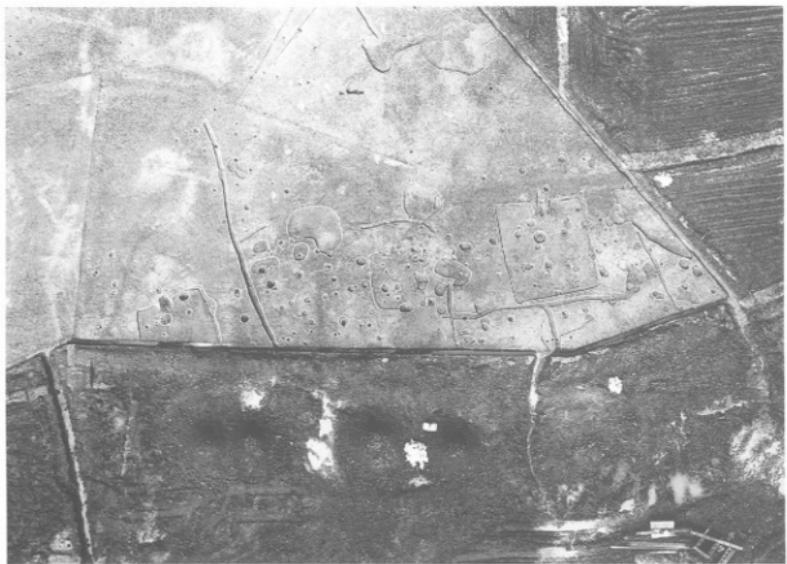
遺跡の遠景（南西から）



A地区（平成2年度調査） 全景（南西から）



A地区（平成2年度調査） 全景（北西から）



A地区（平成2年度調査） 南東部（南東から）



A地区（平成3年度調査） 全景（北東から）



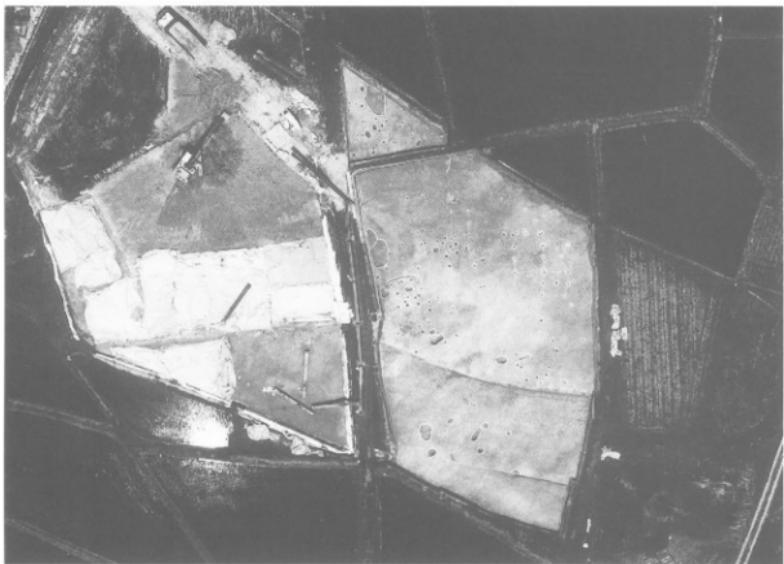
B・C地区 全景（南西から）



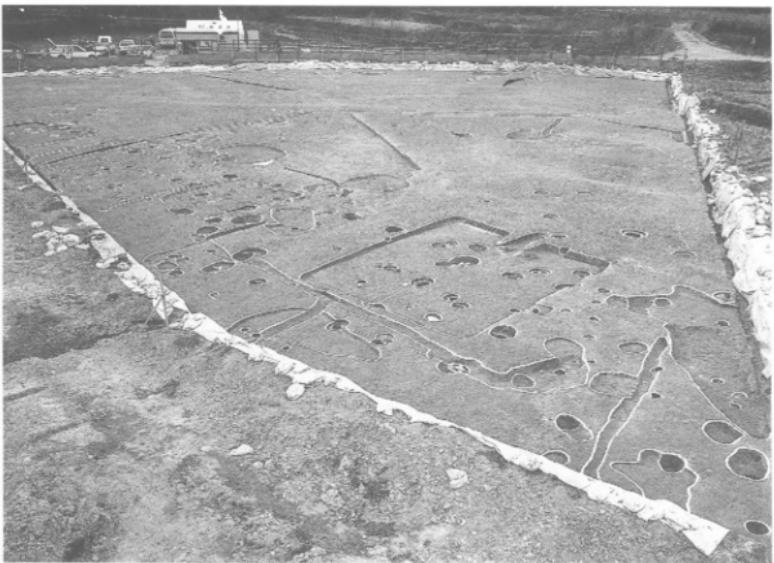
D地区（平成4年度調査） 全景（南西から）



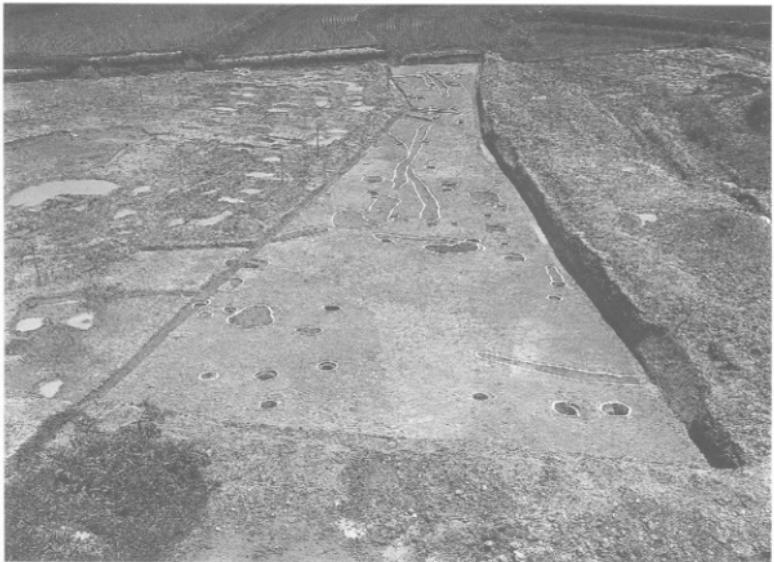
B地区 全景（南から）



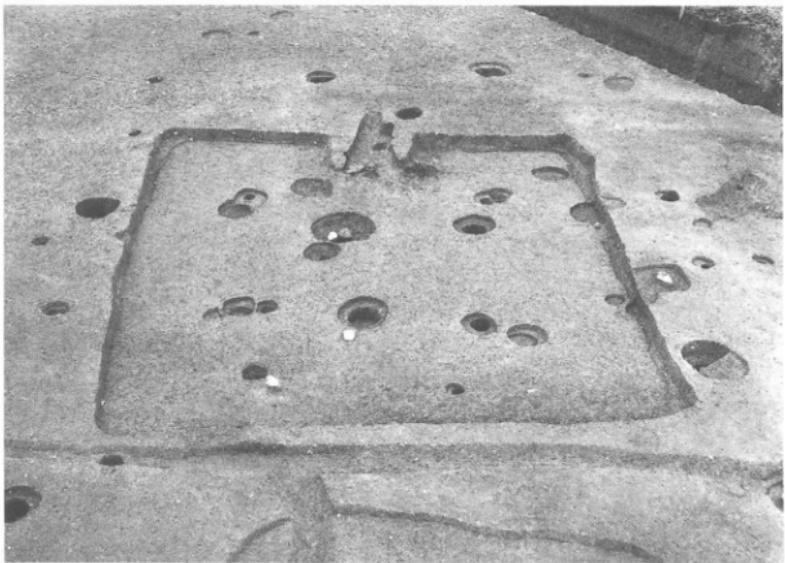
C地区 全景（南から）



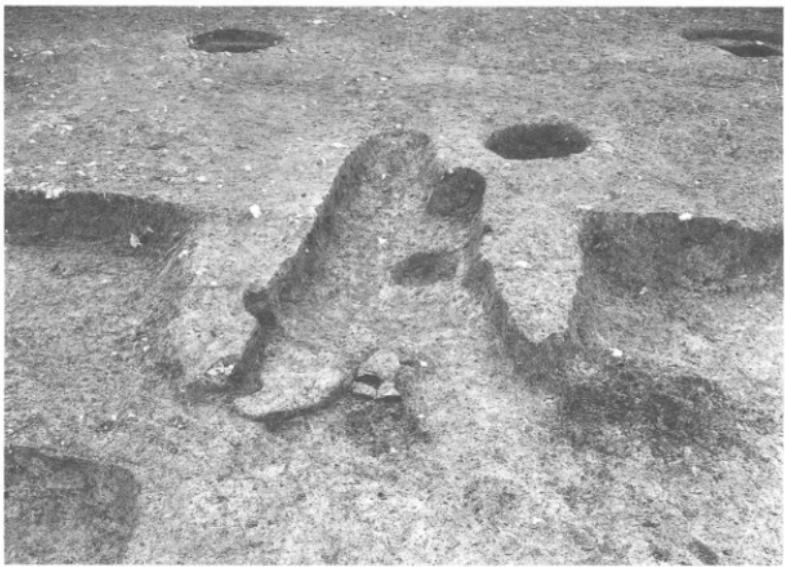
A地区 平成2年度調査部分 全景（東から）



A地区 平成3年度調査部分 全景（西から）



SH01 全景 (南東から)



SH01 カマド検出状況 (南東から)



SH01 作業風景（北西から）



SH01 土馬出土状況



SH02とSB02 全景（南東から）



SH02 カマド検出状況（南東から）



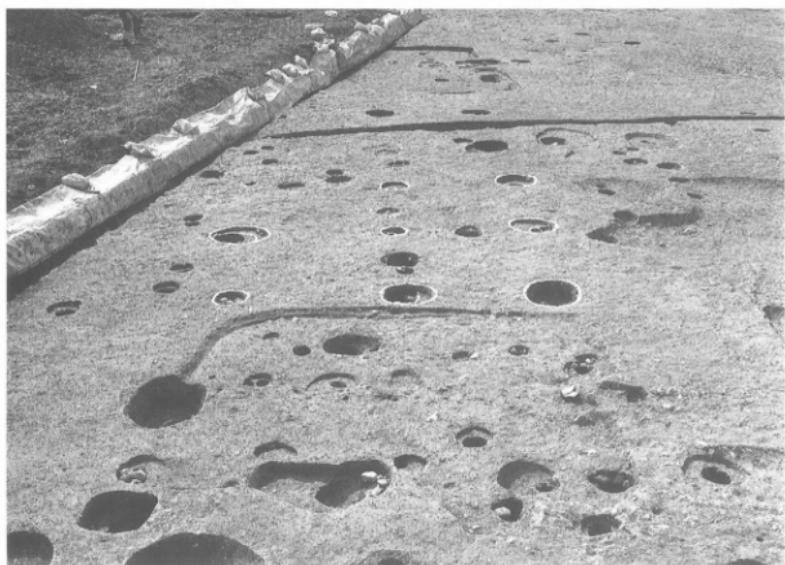
SH03 全景（北西から）



SH03 カマド検出状況（南東から）



SB01 全景（南東から）



SB03 全景（北東から）



SB04 全景（北西から）



SB05 全景（東から）



A地区 SK07付近作業風景（北から）



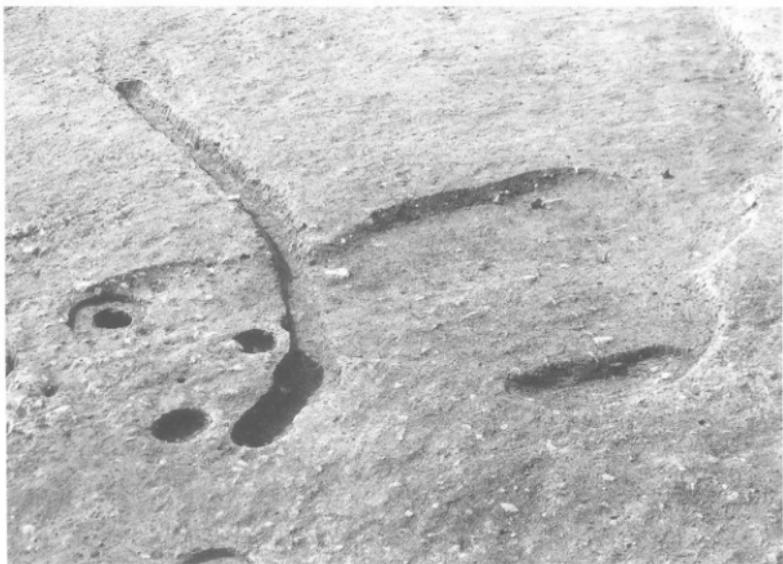
SK01 全景（南東から）



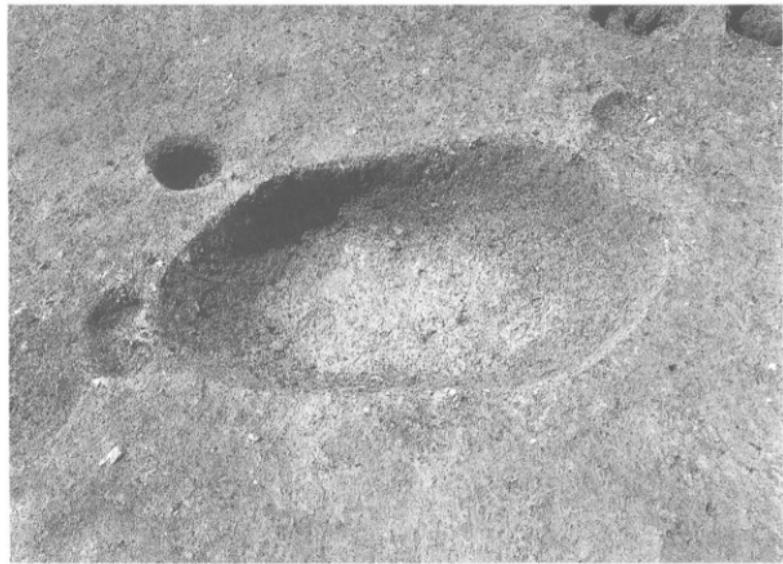
SK03 全景（北西から）



SK04・05 全景（南東から）



SK06 全景（東から）



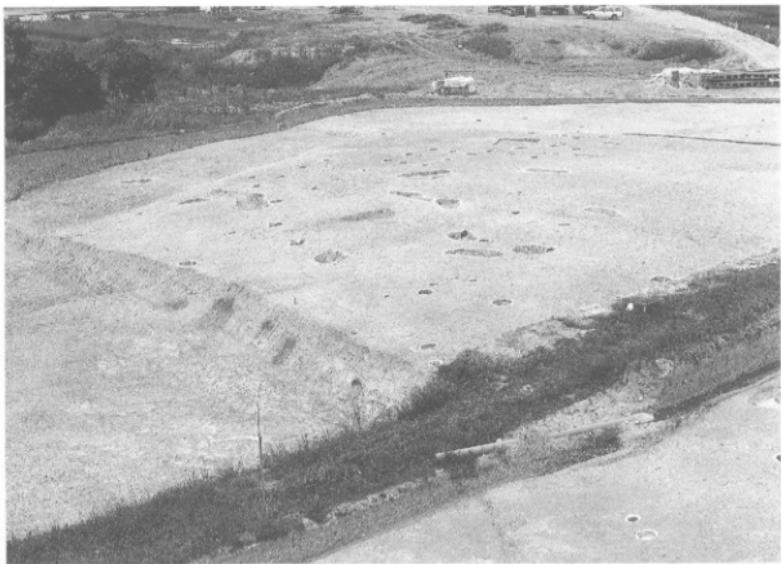
SK08 全景（南東から）



SK09 全景（北から）



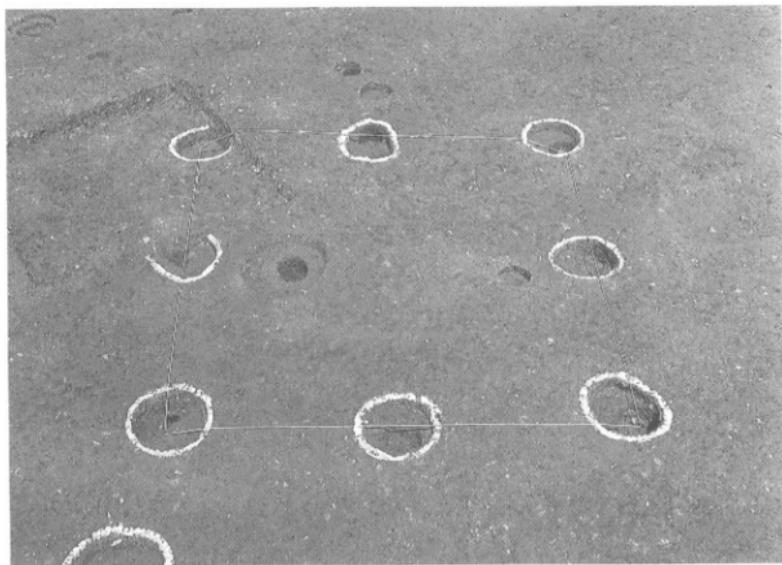
SK10 全景（南から）



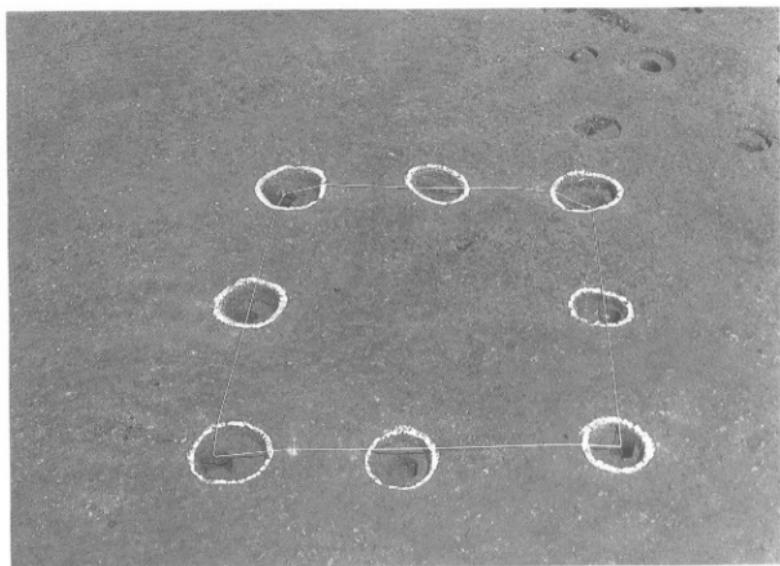
B地区上段（南東から）



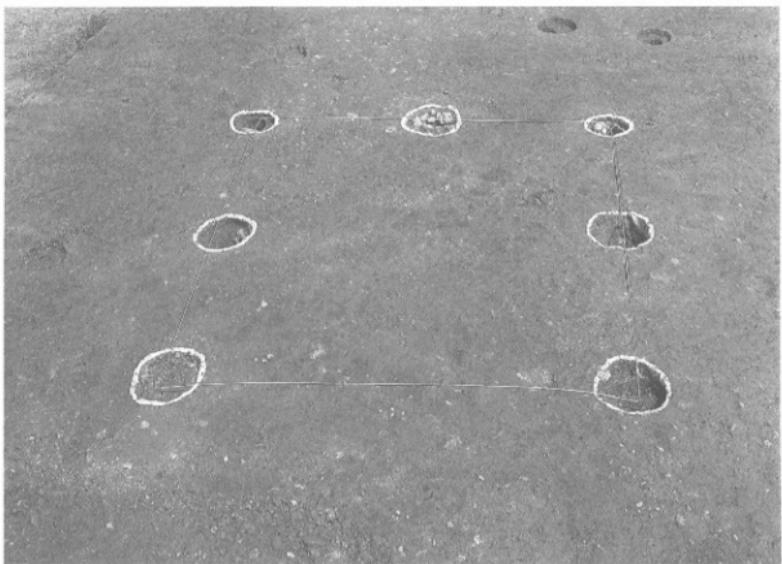
SB06・07・08（南西から）



SB06 全景（南から）



SB07 全景（南から）



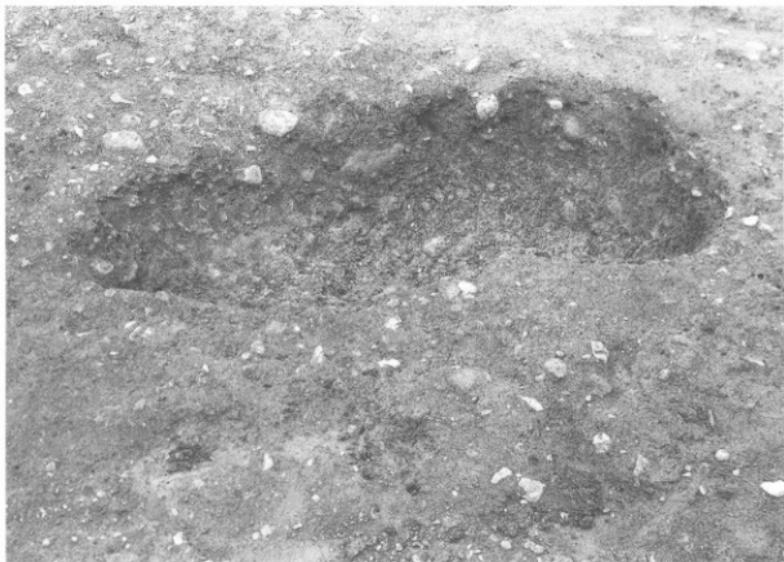
SB08 全景（南から）



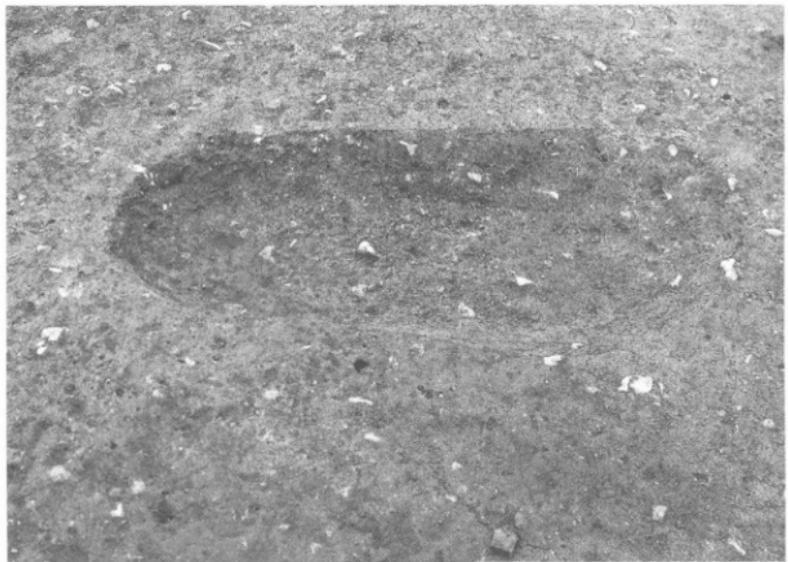
SK12 断面（南西から）



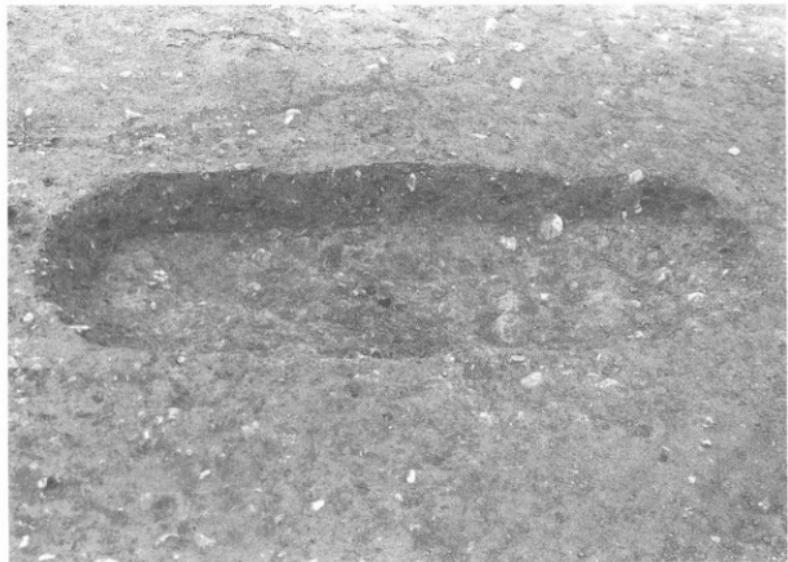
SK13 全景 (西から)



SK14 全景 (南から)



SK15 全景（南から）



SK17 全景（北西から）



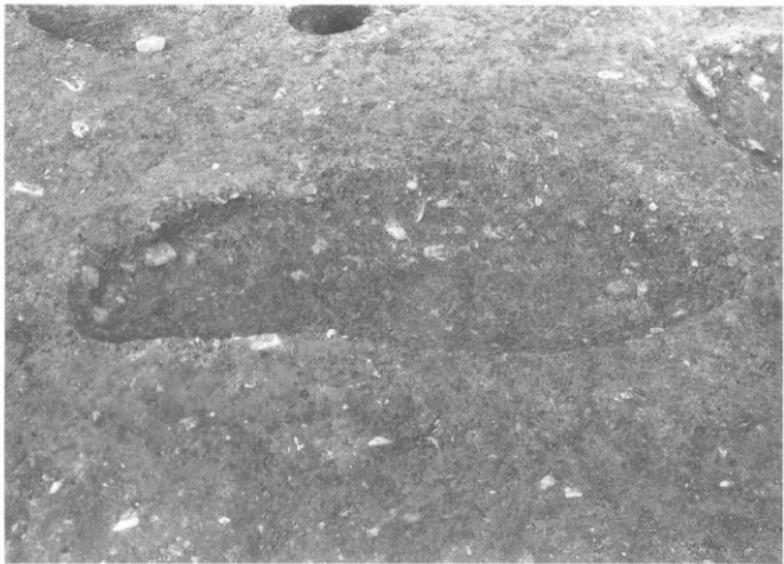
SK18 全景（南から）



SK18 断面（東から）



SK19 全景 (北から)



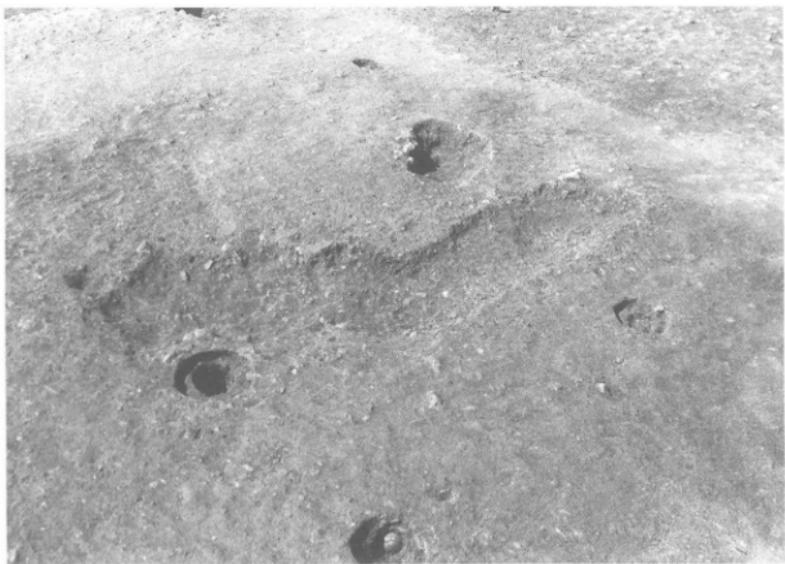
SK20 全景 (南から)



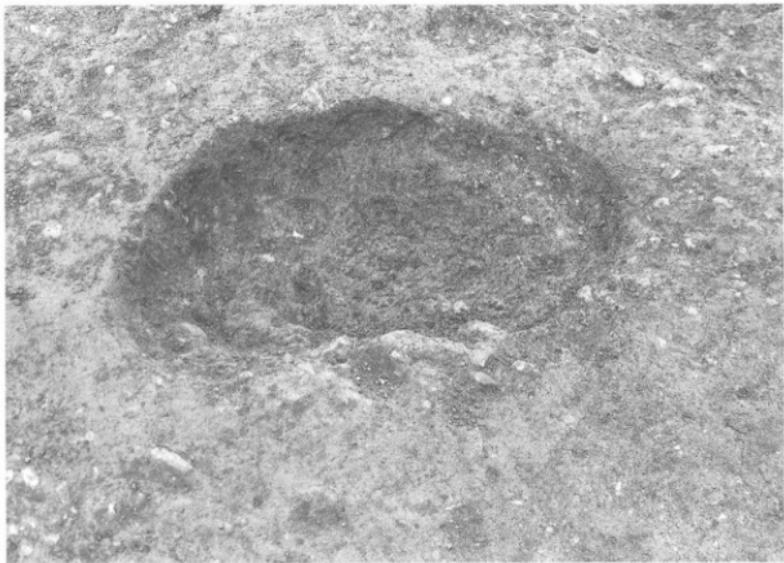
SK21 全景 (南から)



SK22 断面 (東から)



SK24 全景（北から）



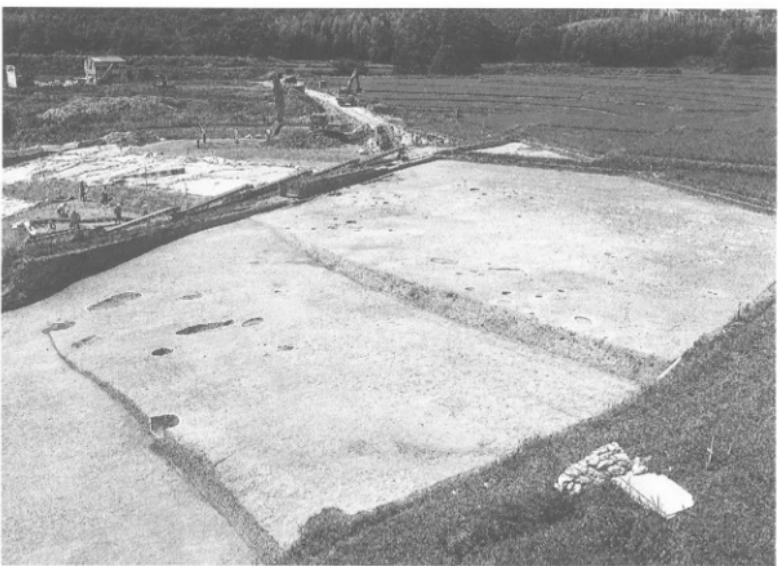
SK25 全景（南東から）



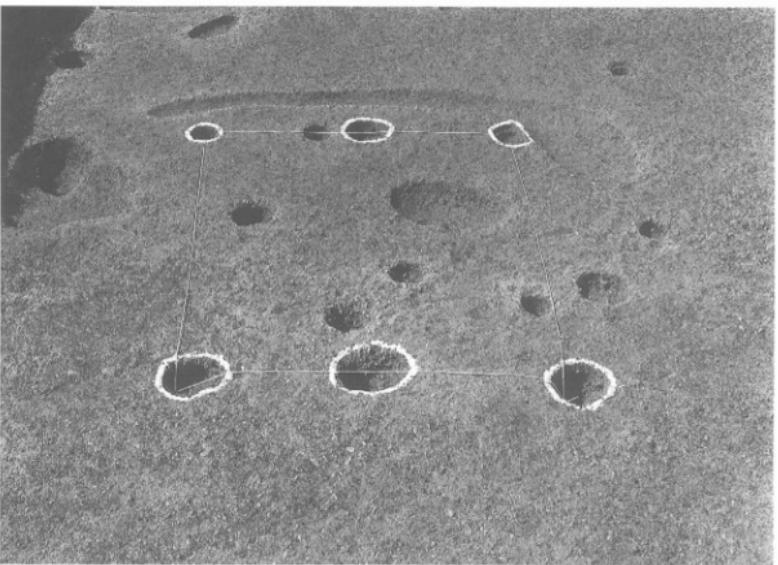
SK26 全景（北西から）



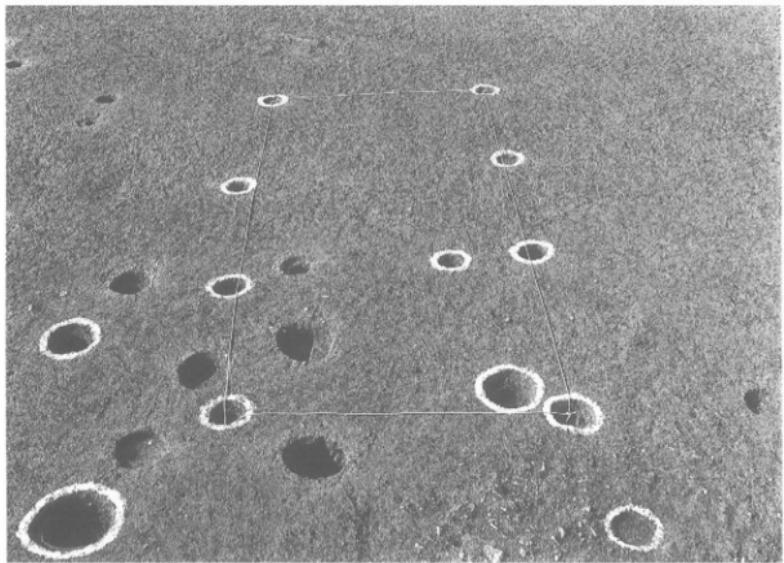
B地区 西壁断面（東から）



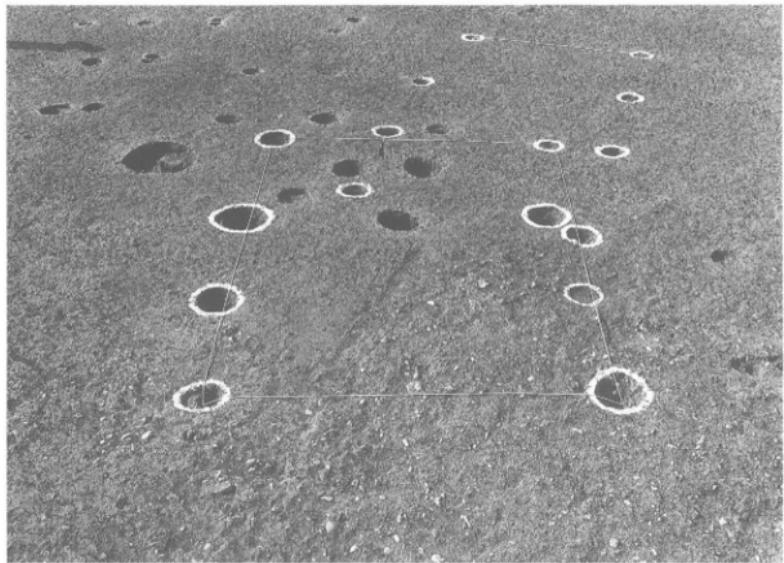
C地区 上・中段（南東から）



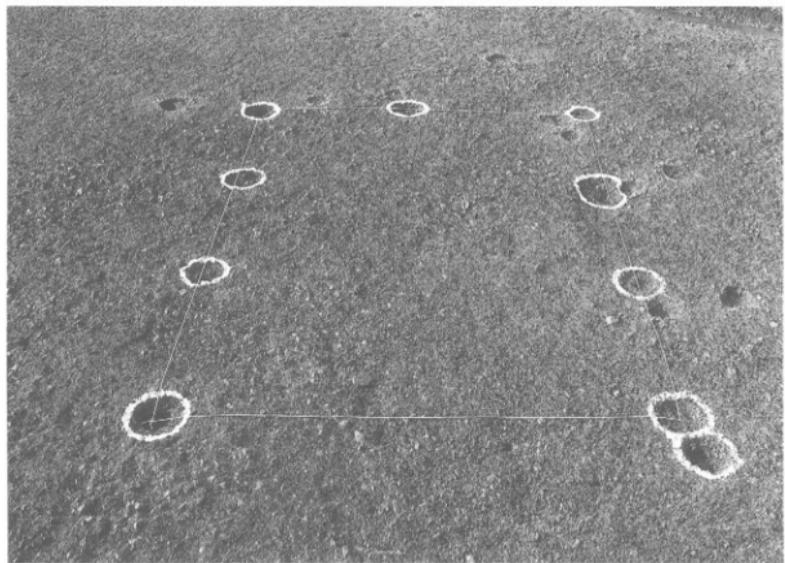
SB09 全景（南から）



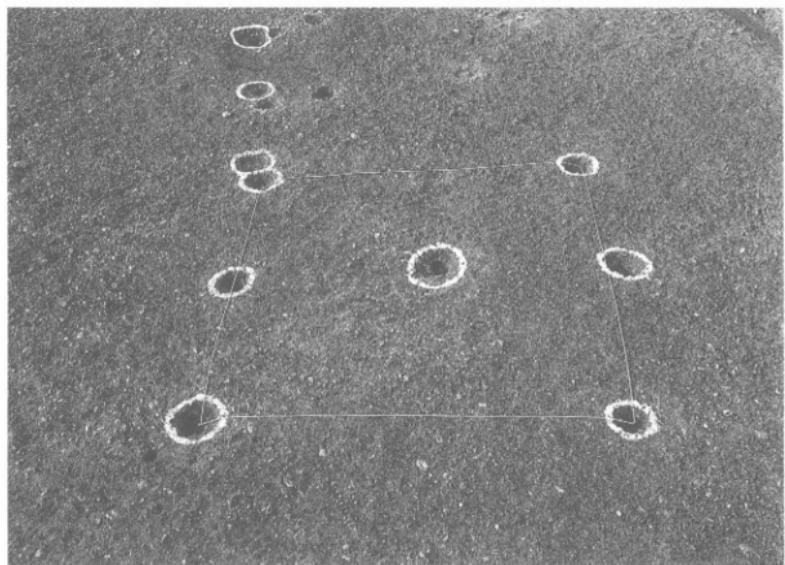
SB10 全景（南から）



SB11 全景（南から）



SB12 全景（南から）



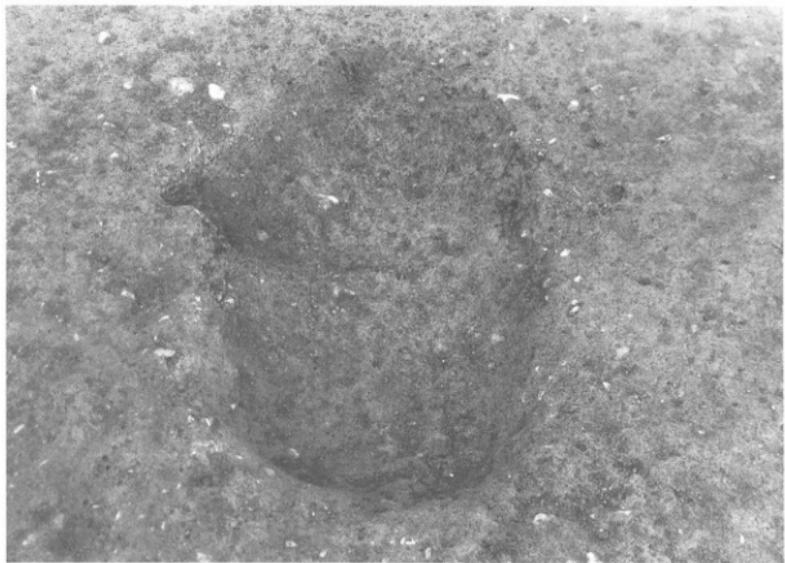
SB13 全景（南から）



SK28 全景 (南西から)



SK31 全景 (東から)



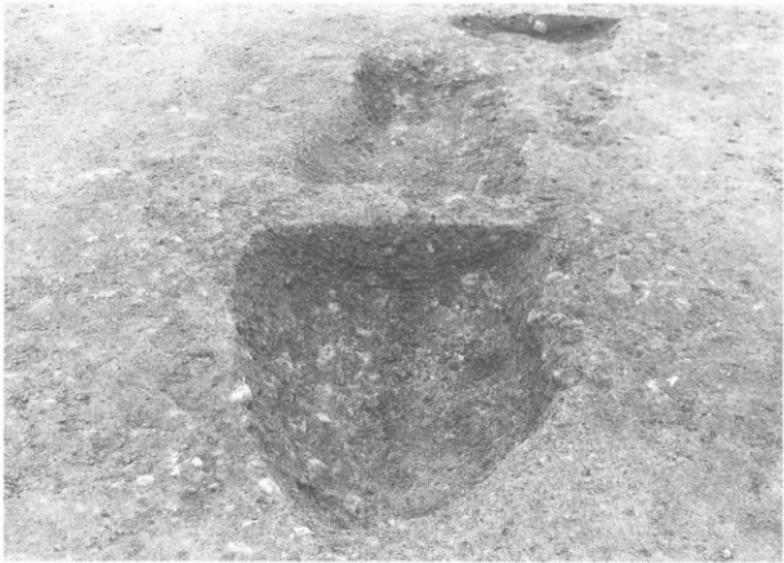
SK32 全景（東から）



SK33 全景（南から）



SK34 全景（東から）



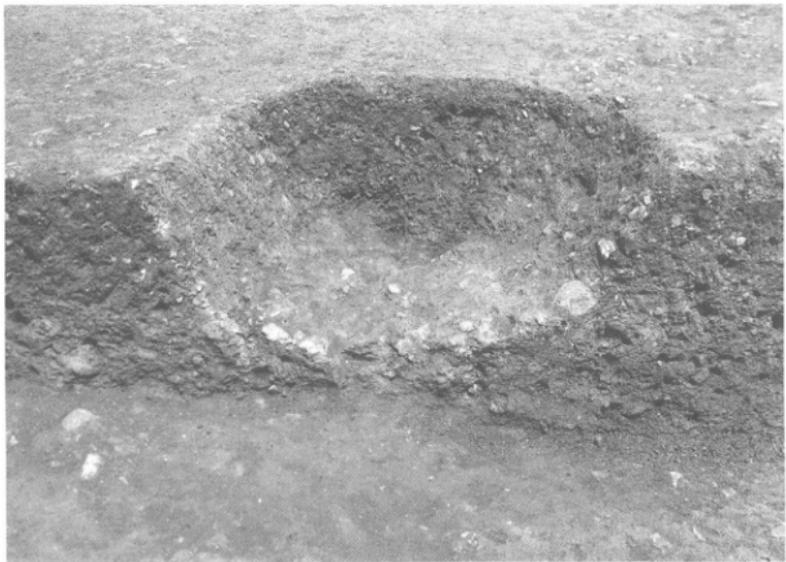
SK37 全景（南西から）



SK39 断面（東から）



SK40 全景（北西から）



SK41 断面（北から）



SK41 全景（南から）



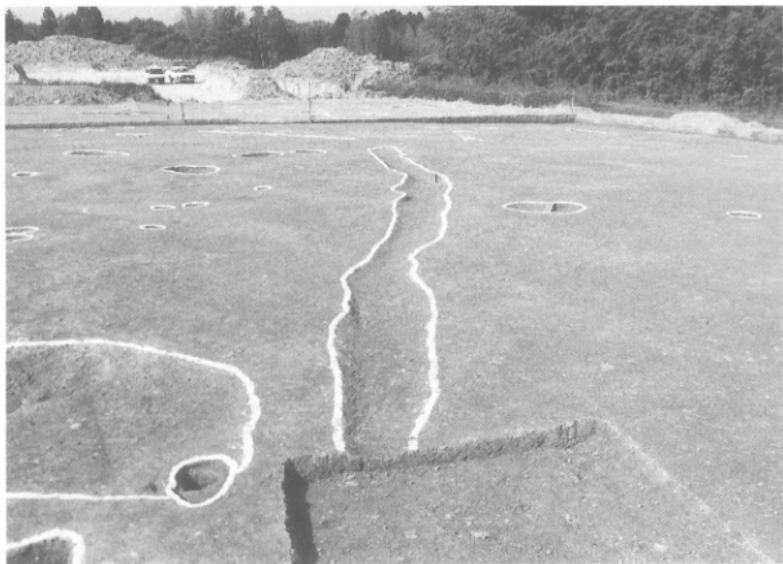
D地区 上段（南から）



D地区 下段（北から）



D地区 上段（南東から）



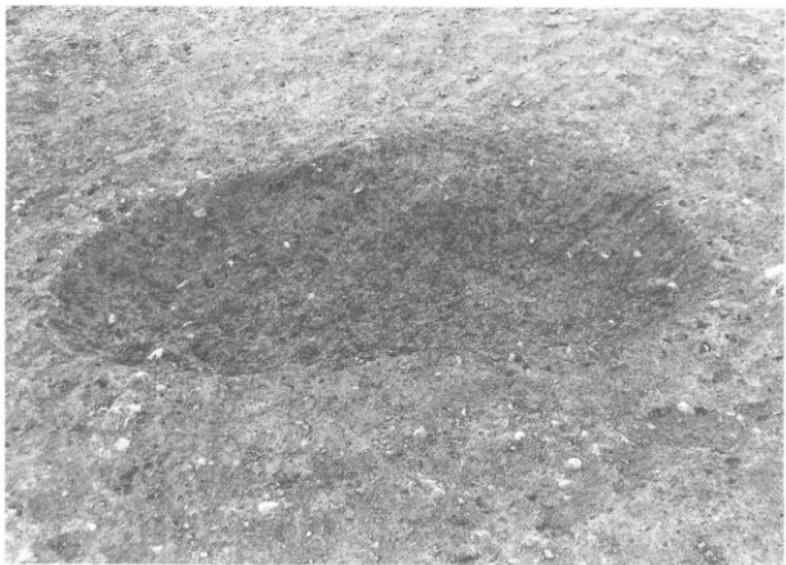
SD15 全景（南西から）



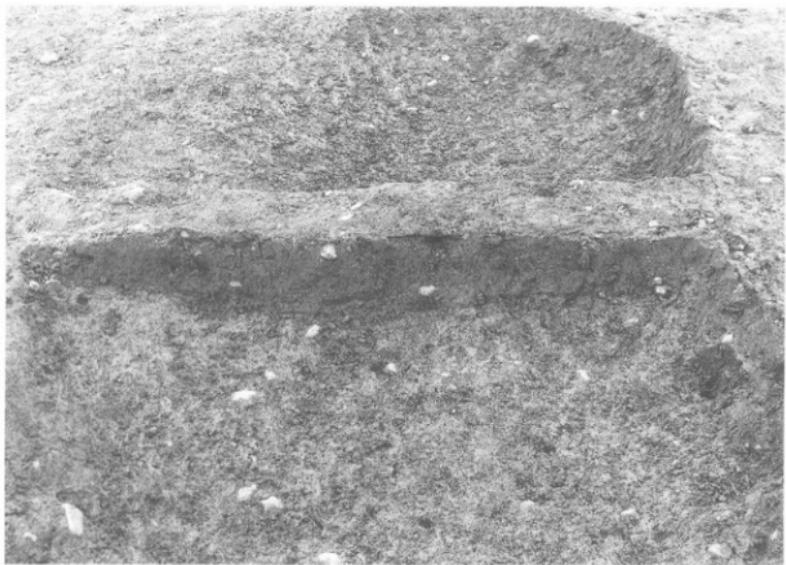
SB15 全景（北西から）



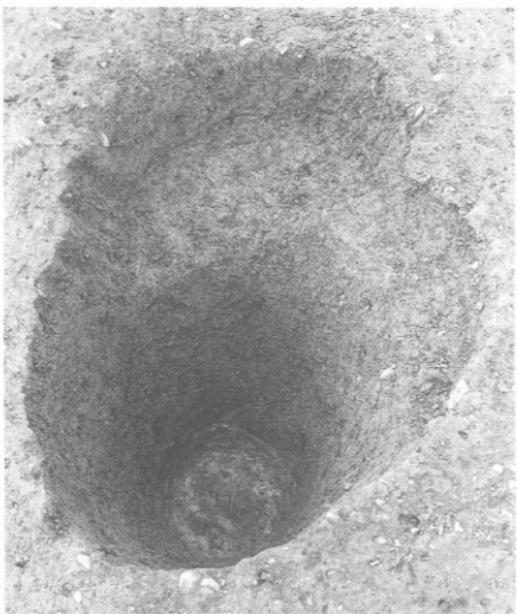
SK42 全景（東から）



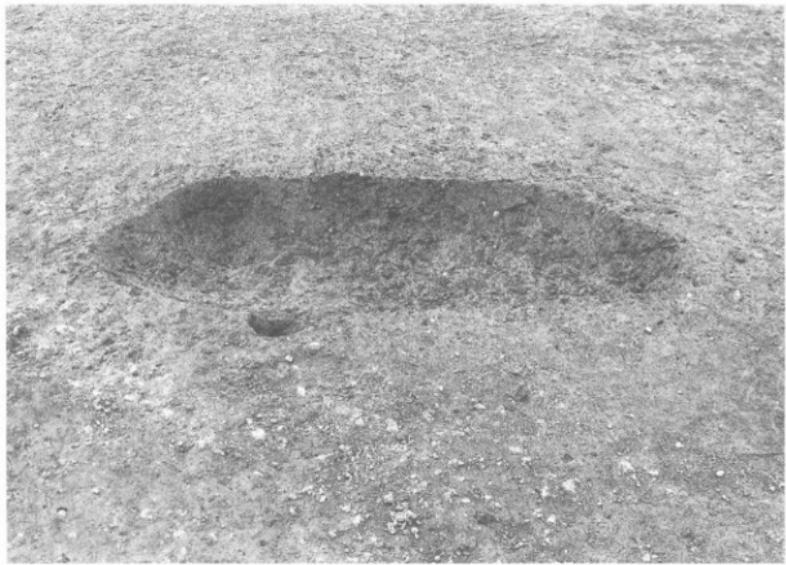
SK43 全景 (東から)



SK43 断面 (南から)



SK44 全景 (南から)



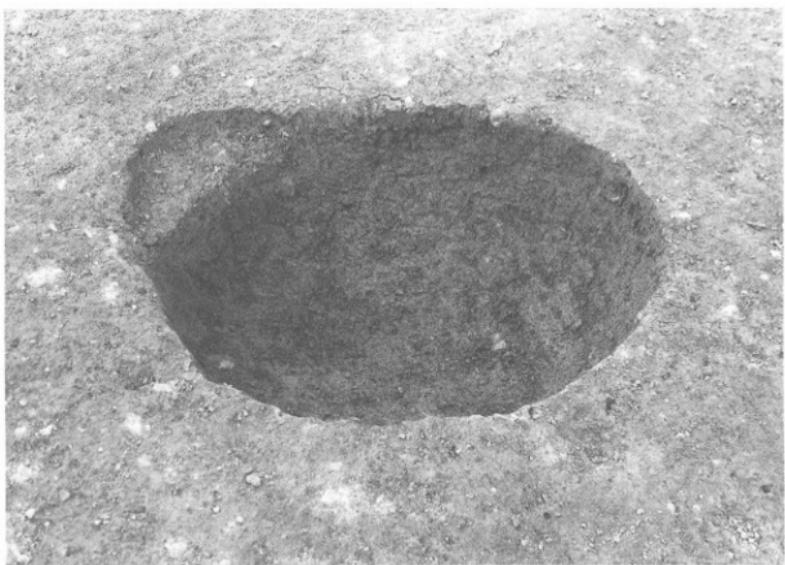
SK45 全景 (南東から)



SK46 全景（北から）



SK46 断面（西から）



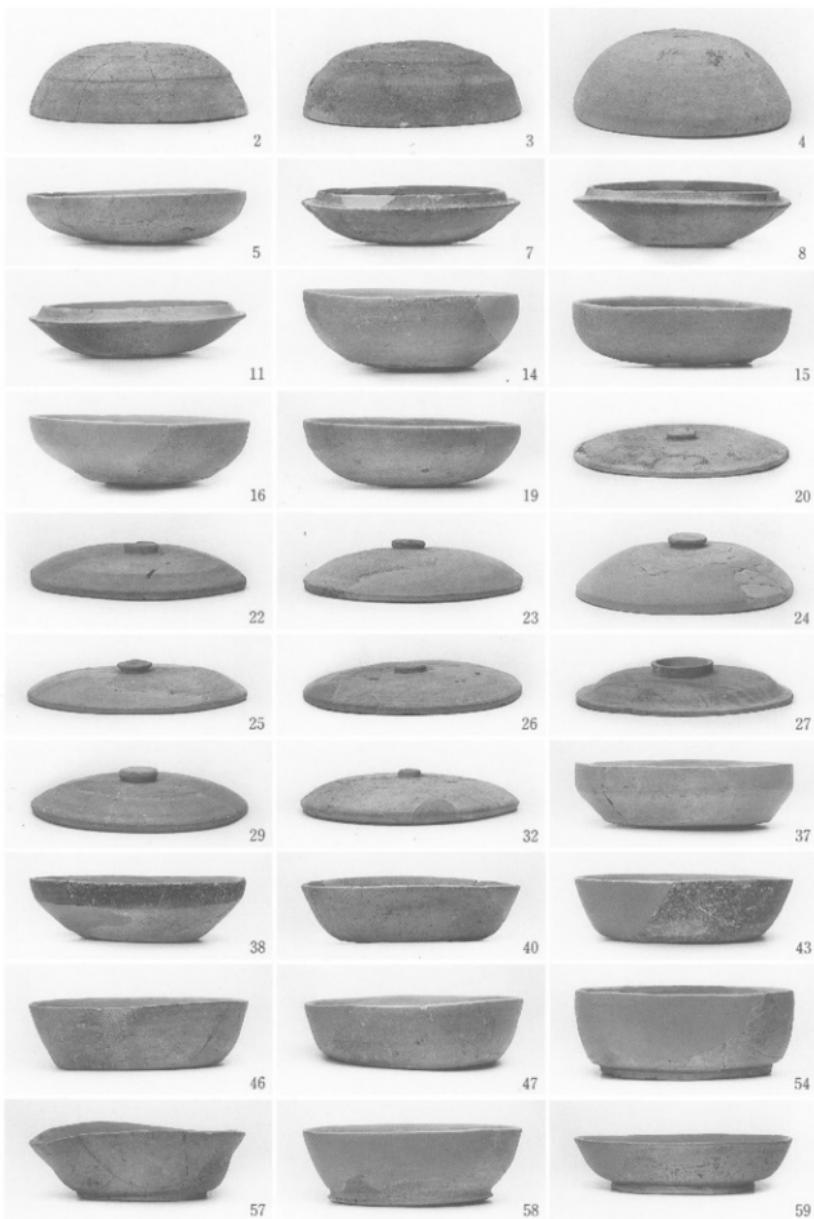
SK47 全景（東から）



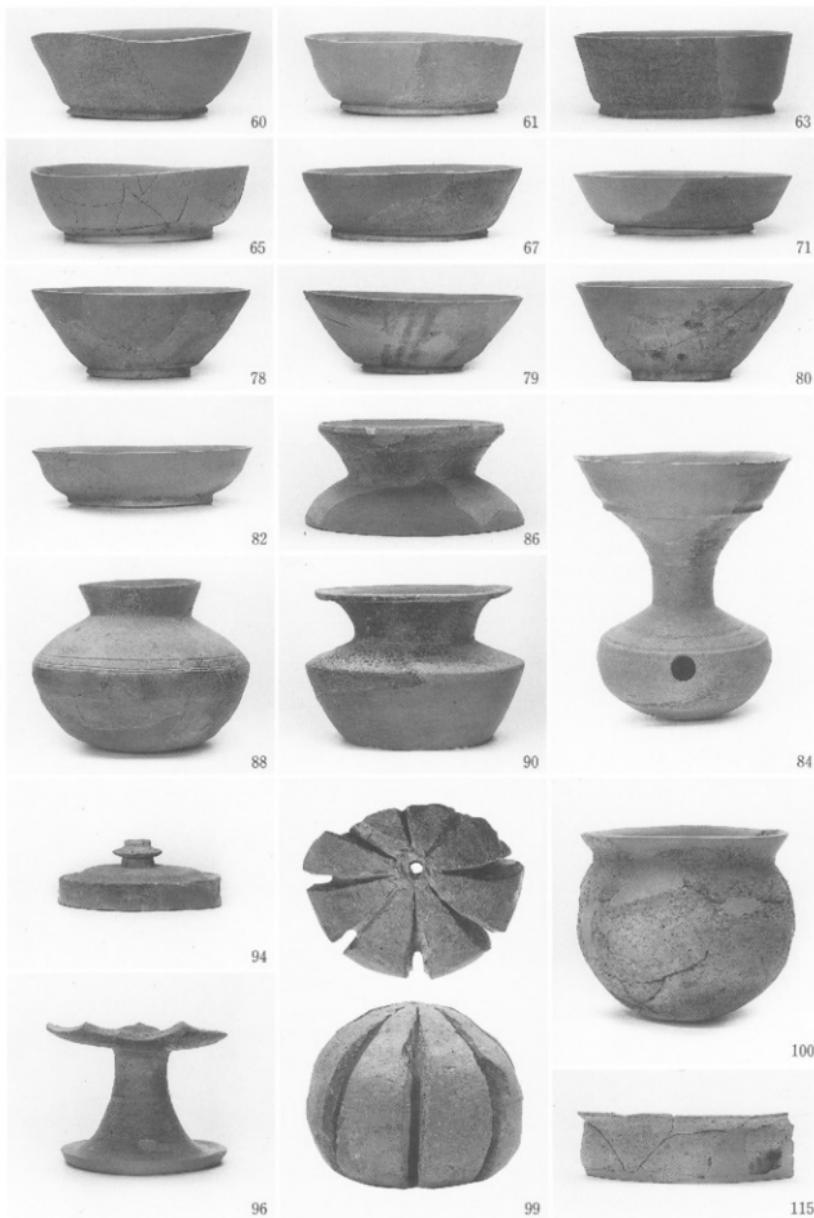
SK47 断面（南から）



SH01 出土馬 (S=2/3)



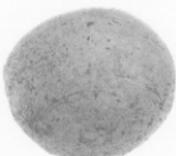
出土土器 (1)



出土土器 (2)



5



85



17



106



113

SH01・03 出土土器



53



18



50



55



56



69



61



62

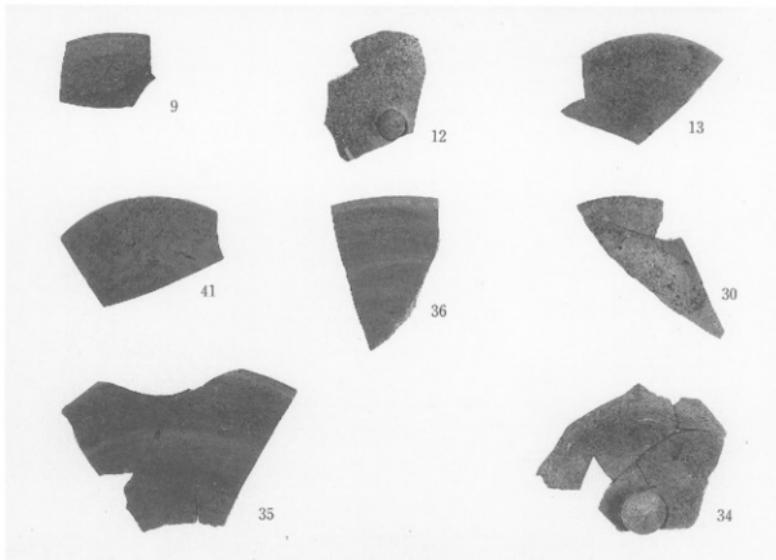


41

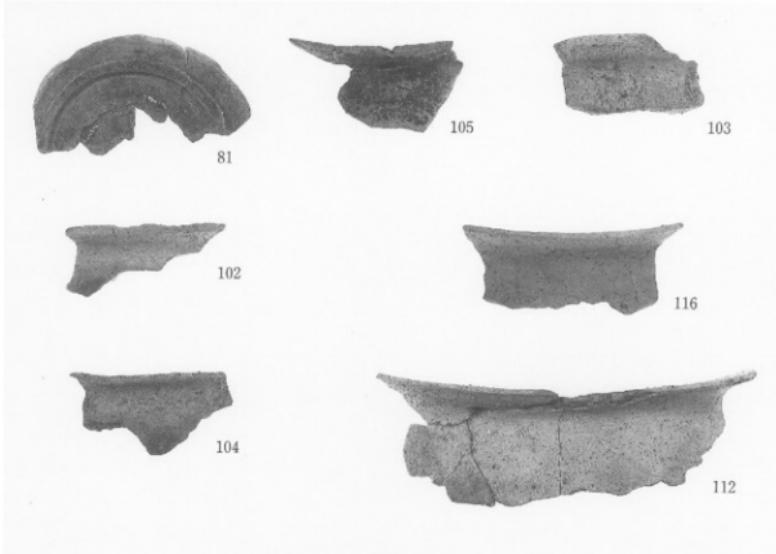


49

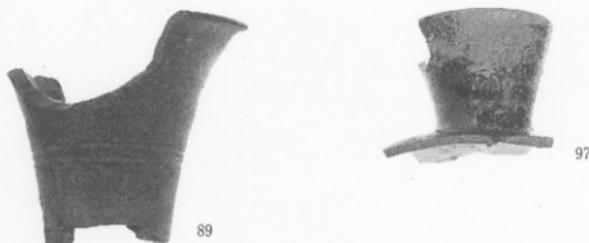
A区 出土土器



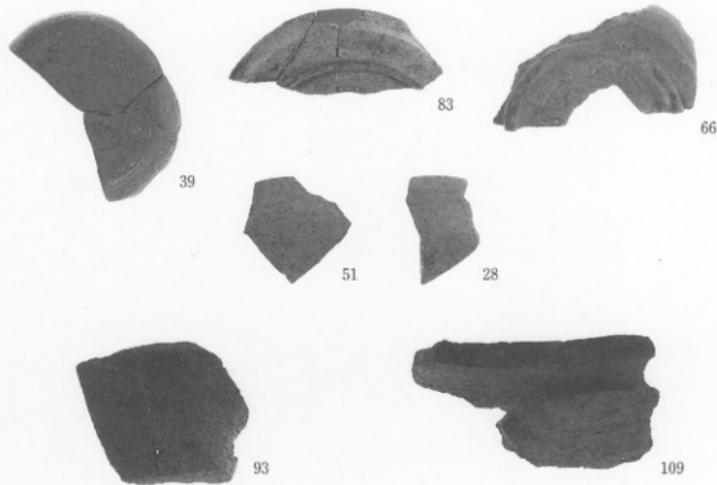
A区 出土土器



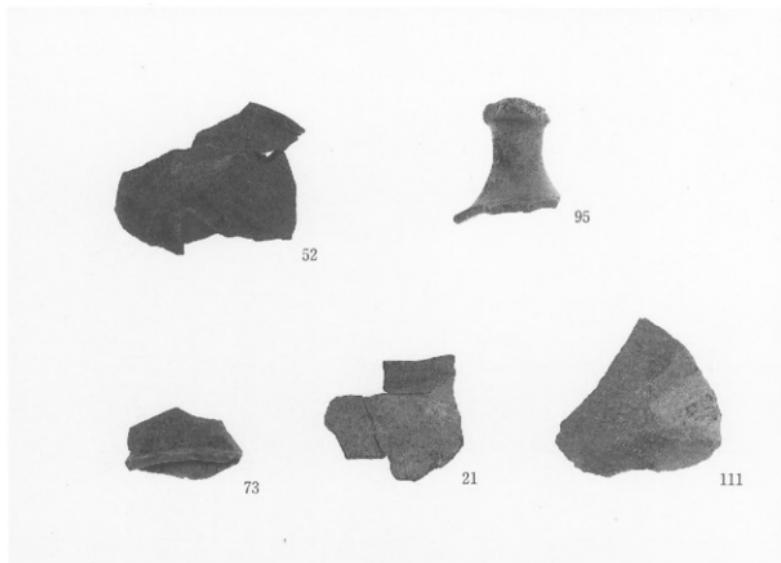
A区 出土土器



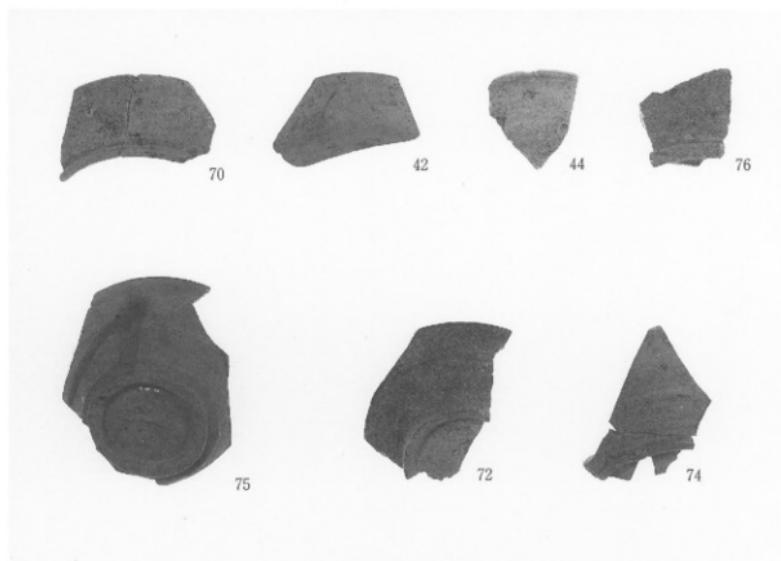
A区 出土土器



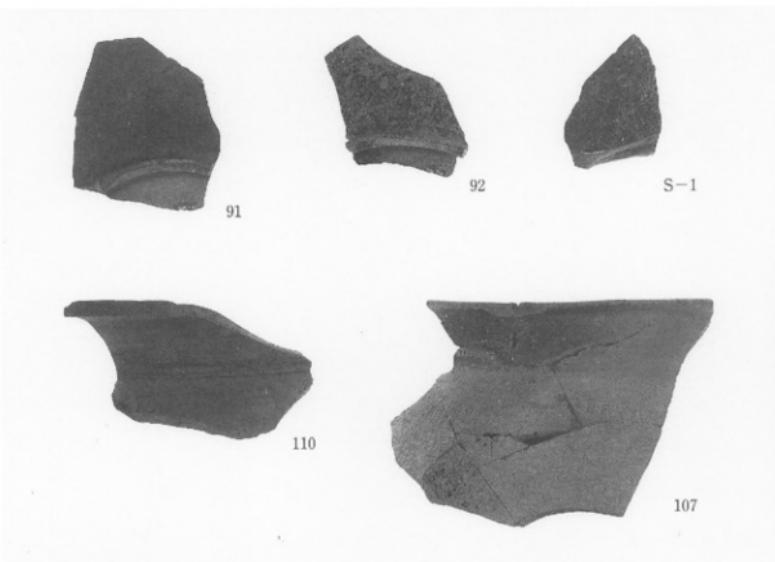
A区・B区 出土土器



B区 出土土器



C区・D区 出土土器



A区 包含層 出土土器



A区 包含層 出土鉄器

兵庫県文化財調査報告 第154冊

田井野遺跡発掘調査報告書

— 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXII —

平成8年3月29日発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発 行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 菱三印刷株式会社

〒652 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11
